福岡市埋蔵文化財調査報告書第1312集

那珂 76

― 那珂遺跡群第156次調査の報告 ―

２０１７

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの史跡や文化財が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところであります。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財もあり、これらについては事前に発掘調査を行って、記録保存を行っています。

本書は、博多区竹下三丁目地内における下水道築造工事に伴い行われた、那珂遺跡群第156次発掘調査について報告するものです。

那珂遺跡群はこれまでの発掘調査の成果により、北側に連なる比恵遺跡群と合わせて、弥生時代から古墳時代前期、および古墳時代後期から飛鳥・奈良時代において、福岡平野では最も大規模かつ中心的な遺跡群であったことが判明しています。特に古墳時代後期から飛鳥時代には、『日本書紀』に見える「那津官家」の推定地とされ、そのほか「筑紫大宰」との関連も評価される重要な遺跡です。今回の調査において検出した飛鳥時代の井戸は、方形の板組井戸枠の最下層に砂利を充填しており、同時代の福岡では珍しいものです。このような構造をもつ井戸は、当時の大和や河内などの畿内中枢部ではみられるものであり、「那津官家」などに関連して、当地に畿内の文化の影響が及んだ可能性を示すものと考えられます。

今後本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、学術的な研究資料として、また地域の歴史の学習の材料として活用して頂けましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理、報告書作成にいたるまで、ご理解と多大なご協力をいただいた調査委託者をはじめとする関係者の方々に対し、心より感謝の意を表する次第であります。

平成29年３月27日

福岡市教育委員会

教育長　星子　明夫

例　　言

1．本書は、福岡市教育委員会が、平成27年５月１日から同年７月31日まで発掘調査を実施した、福岡市道路下水道局による下水道施設建設工事に伴う、那珂遺跡群第76次調査の報告書である。
2．検出遺構の呼称は記号化し、井戸をＳＥ、竪穴建物（「住居」とは限らないので「建物」とする）をＳＣ、土坑をＳＫ、柱穴などピット状遺構（自然遺構を含む可能性あり）をＳＰ、掘立柱建物や柱穴列遺構をＳＢ、落ち込み遺構、造成遺構などの特殊遺構や性格不明遺構などをＳＸとしている。
3．調査区の座標系は敷地地形に合わせた任意座標である。ただし、国土交通省が公表している近隣の測量基準点から調査区内の任意座標測量基準杭に国土座標（世界測地系）を移動して、調査区内の国土座標上の位置を求めている（Fig.3･4）。本書の遺構図に用いる方位北は、多くの場合国土座標北（世界測地系）である。一部の個別遺構の実測図に磁北を用いている場合があるが（国土座標北から約６°40′西偏）、その場合は明記した（明記のないものは国土座標軸北である）。
4．本書に用いる発掘調査時の遺構実測図の作成は、調査担当者の久住猛雄（当時、埋蔵文化財調査課）のほかカルロス・ベレッキア（当時、九州大学大学院生）、上方高弘（当時、埋蔵文化財調査課技能員）、田中康也、宮元亜紀世（発掘作業員）が行った。また遺物実測図の作成は、主に上方高弘（現、埋蔵文化財課技能員）が行い、久住（現、埋蔵文化財課）が全体をチェックし一部を修正加筆した。遺構図面の製図は、小畑貴子、増永好美、林由紀子（以上、埋蔵文化財課整理補助員）、久住が行った。遺物図面の製図は、上方、谷直子（埋蔵文化財課技能員）、久住が行った。
5．本書に用いる写真は、自然科学分析の写真と遺物写真を除き、久住が撮影した。遺物写真は一部を除き井上繭子（埋蔵文化財課職員）が撮影した。写真は全てデジタルデータのものを使用している。写真は報告書掲載にあたり、陰影やコントラストなどに若干のデータ調整加工を行っている。遺構写真については写真画像のオリジナルデータと対応するフィルム写真もあり、あわせて収蔵される予定である。
6．表表紙写真はSE006井戸枠・井戸側痕跡検出時土層状況（北西から）、裏表紙写真はSE006井戸側内最下層砂利敷層検出状況（北から）である。
7．本書の執筆と編集は、自然科学分析委託を除き久住（現、埋蔵文化財課）が行った。自然科学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社によるものである
8．本調査に関わる出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。

目　　次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
　3．周辺の地理的歴史的環境 …… 2
　4．周辺の調査 …… 10
Ⅱ．調査の記録 …… 17
　1．調査の概要と基本土層 …… 17
　2．検出遺構 …… 21
　　（1）井戸 …… 21
　　（2）溝状遺構 …… 24
　　（3）竪穴建物 …… 29
　　（4）谷状落ち込み（造成）遺構 …… 31
　3．出土遺物 …… 33
Ⅲ．自然科学分析
　・那珂遺跡群 156 次調査にかかる花粉分析（パリノ・サーヴェイ株式会社） …… 36
Ⅳ．調査のまとめ …… 40
　1．遺構の変遷と那珂 156 次調査の意義 …… 40
　2．環境の変遷について …… 40
　3．井戸ＳＥ００６に関する考察～飛鳥時代の比恵・那珂遺跡群小考～ …… 41
図版 …… 45

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区那珂一丁目地内および竹下三丁目地内における下水道築造工事に伴う「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」の文書を平成27年１月５日付で道路下水道局から受理した（事前審査番号26-1-224）。

これを受け、経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課事前審査係は、工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群（分布地図番号37-0085）に含まれており、周囲の発掘調査および確認調査の成果から、当該地も埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断した。工事予定範囲のうち、竹下三丁目地内の新たに下水道工事のための発進竪坑を掘削する地点については、工事が埋蔵文化財に影響を及ぼす可能性があるものと判断し、平成27年３月11日に確認調査を実施した。その結果、現地表面下60～90cm前後で中世とみられる遺構と遺物が確認されたことから、遺構（埋蔵文化財）の保全等に関して道路下水道局と協議を行った。

その結果、現地は東側道路面より約１m前後高く、下水道の雨水幹線築造のための竪坑の掘削工事を行うために工事対象地のほとんどを東側道路面まで切り下げる必要があり、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、切り下げ工事予定範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。また工事対象地はアサヒビール株式会社が土地所有者であり、同社博多工場の敷地内であることから、下水道工事に伴う発掘調査についての承認を得る必要があったが、協議によりアサヒビール博多工場の合意を得ることができた。これを受け、道路下水道局長を委託者とし、経済観光文化局長を受託者とする「埋蔵文化財発掘調査業務委託に関する協定書」を平成27年４月10日に締結した。また両者の協議により、同年５月１日から７月31日までを現地における発掘調査の期間とすることになった。

発掘調査は平成27年５月１日に開始し、同年７月31日に発掘調査を終了した。資料整理および報告書作成は、平成28年度に資料整理を行い、平成29年3月に報告書を刊行することになった。

なお発掘調査においては、アサヒビール株式会社博多工場および下水道工事受託業者には、深いご理解と多大なるご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

また、当該調査に関する基本情報は次頁上段の表のとおりである。

２．調査の組織

調査主体：　福岡市教育委員会
調査委託：　道路下水道局
（発掘調査　平成27年度；資料整理・報告書作成　平成28年度）
発掘調査および整理・報告総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課（平成27年度）・
埋蔵文化財課（平成28年度）　課長　常松幹雄
埋蔵文化財調査課調査第1係長　吉武　学（平成27年度）
埋蔵文化財課調査第２係長　加藤隆也（平成28年度）
発掘調査および整理・報告庶務：　埋蔵文化財審査課（平成27年度）・埋蔵文化財課（平成28年度）
管理係　横田 忍
発掘調査および整理・報告担当：　埋蔵文化財調査課（平成27年度）・埋蔵文化財課（平成28年度）
久住猛雄

〈調査基本情報〉

遺跡名	那珂遺跡群	**調査次数**	156 次	**調査略号**	NAK-156
調査番号	1505	**分布地図図幅名**	037 東光寺	**遺跡登録番号**	020085
申請地面積	697.1㎡	**調査対象面積**	353㎡	**調査面積**	299㎡
調査期間	平成 27(2015) 年５月１日～７月 31 日			**事前審査番号**	26-1-224
調査地	福岡市博多区竹下３丁目２８番１				

３．周辺の地理的歴史的環境

那珂遺跡群は、福岡平野の中央やや北側にあり、那珂川と御笠川・諸岡川に挟まれた中位段丘上に立地する（Fig.1）。南方の春日丘陵から北に延びる段丘は、那珂の南側に接する五十川遺跡付近で狭くなるが、北に続く那珂遺跡群では段丘の幅が広くなる。北側に接する比恵遺跡群や、南側の五十川遺跡とは連続的な分布にあり、同一段丘上に立地する。特に比恵遺跡群は、那珂との間に鞍部（浅い谷状地形）があるが、遺構分布や遺構変遷の様相から、弥生時代から古代においては実質的に同一の遺跡群と捉えられ、「比恵・那珂遺跡群」とも総称されている（田崎博之 1998 ほか）。比恵・那珂遺跡群は、中世以降の開墾や屋敷地（城館）の造成、近現代の区画整理（特に「駅南地区」の比恵遺跡群が顕著である）や都市化による地形の改変・削平が著しく、遺構の残存状況は必ずしも良好ではない場合が多い。しかしながら、地点によっては多くの遺構が密集して遺存していることもある。周囲に比べて地形が高く残る土地や、逆に旧地形が低く削平度が少ない場合など、遺構の著しい重複によって遺構の平面プランが不明瞭かつ遺構の認識・検出が困難となり、「包含層」状になっている場合も少なくない。これは、確認（試掘）調査や本調査の遺構検出時においての要注意事項である。比恵・那珂の標高は、地形の削平部分も考慮すると最高所が 12 m前後、低いところで５m前後であり、一定の起伏がある。比恵・那珂遺跡群の範囲は、南北 2.4km、東西 0.5km から最大 1.0km の 100ha 以上に及び、特に弥生時代～古墳時代、飛鳥時代の遺跡としては全国的にも最大規模の部類に入る。本報告における周辺の地理的歴史的環境の叙述は、弥生時代から古墳時代前期については省略する。これらについては、福岡市埋蔵文化財調査報告書（以下、「市報告」とする）那珂 68 次報告（市報告第 639 集）、那珂 73 次報告（市報告第 713 集）、比恵 100・102 次報告（市報告第 956 集）に詳述し、また弥生時代の比恵・那珂については別途論考をまとめたことがあるので参照されたい（久住 2008a・2009）。以下は、本報告の那珂 156 次で検出した、特異な構造を有する飛鳥時代の井戸や、それとほぼ同時期の竪穴建物、溝状遺構に関わる視点で、飛鳥時代（九州須恵器編年Ⅳ～Ⅵ期；小田富士雄 1964・1977、中島恒次郎 1997、舟山良一編 2008、長直信 2012）を前後する主に古墳時代後期から奈良時代前期頃（６世紀～８世紀前半）の周辺の遺跡と比恵･那珂の遺構の展開と動向について主に記す。

比恵・那珂では弥生時代中期から古墳時代前期前半まで大規模な集落が形成されたが（久住 2008a）、古墳前期後半には遺構が激減し、古墳中期の遺構・遺物は非常に少なくなる。しかし、古墳時代中期末（須恵器 TK23 － TK47 期）に剣塚北前方後円墳が築造された前後から集落の再形成が始まる。６世紀中頃（須恵器 TK10 期、九州須恵器編年ⅢＡ期古相）には、三重周溝を有する大型前方後円墳の東光寺剣塚（墳丘長 74m 前後、総長 117m 以上）が築造され（市報告第 267・887 集）、その直後から比恵・那珂は再び大集落となる。６世紀後半～末（九州須恵器編年ⅢＡ期新相～ⅢＢ期）には、比恵８・72 次の三本柱柵列区画を伴う大型倉庫群が造営され、７世紀第３四半期（須恵器Ⅴ期＝飛鳥Ⅱ期新相～Ⅲ期古相併行）まで存続したとみられる。この倉庫群と柵列区画は、『日本書紀』宣化天皇紀にある「那津官家」の可能性が

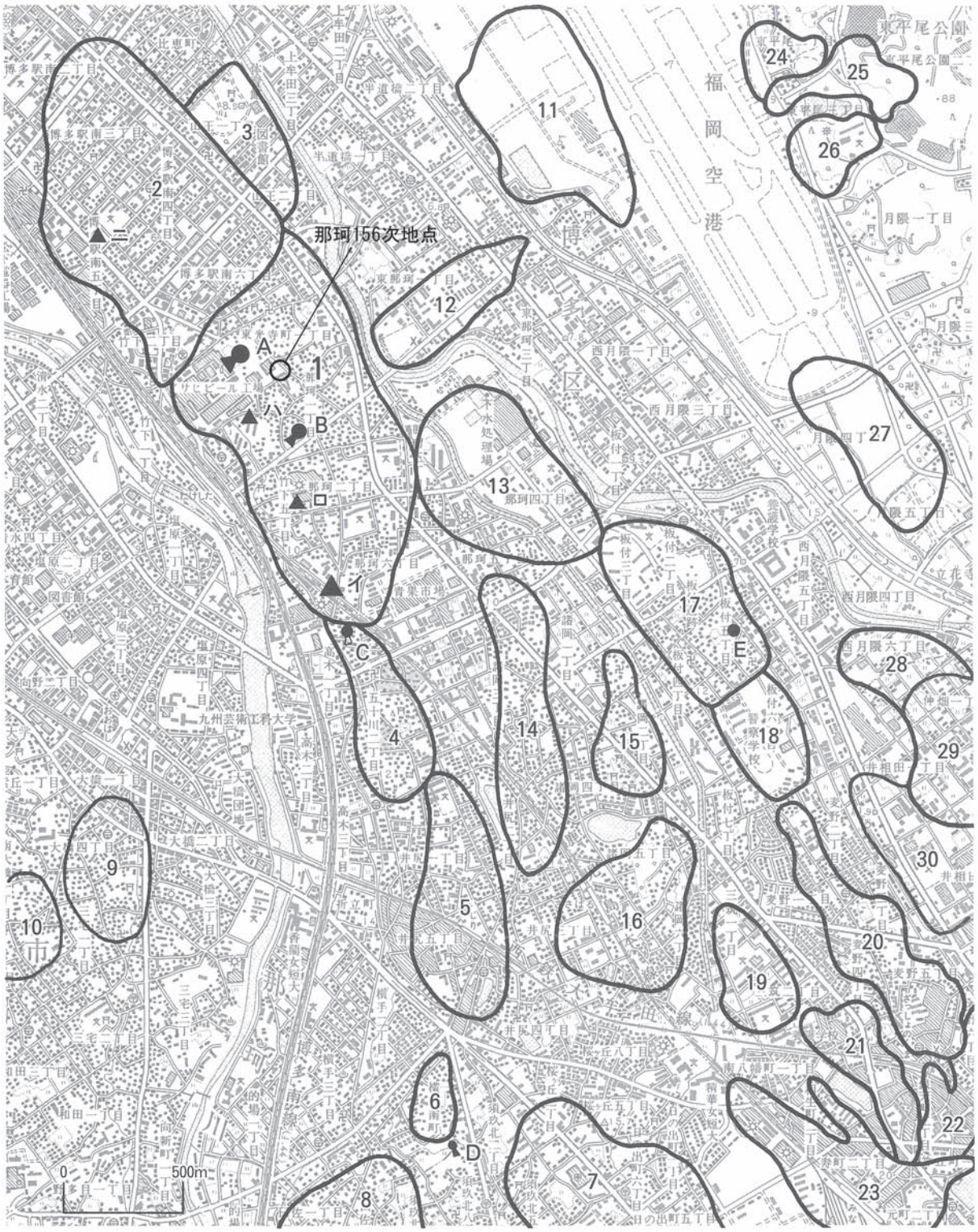


Fig1　那珂遺跡群の位置と周辺遺跡分布図（1/25.000）

1. 那珂遺跡群　2. 比恵遺跡群　3. 山王遺跡　4. 五十川遺跡　5. 井尻 B 遺跡群 6. 寺島遺跡　7. 須玖・岡本遺跡群　8. 曰佐遺跡群　9. 大橋 E 遺跡　10. 三宅 A 遺跡・三宅廃寺　11. 雀居遺跡　12. 東那珂遺跡　13. 那珂君休遺跡 (那珂深ヲサ，那珂久平ほか)　14. 諸岡 A 遺跡　15. 諸岡 B 遺跡　16. 笹原遺跡　17. 板付遺跡　18. 高畑遺跡　19. 三筑遺跡　20. 麦野 A 遺跡　21. 麦野 B 遺跡　22. 麦野 C 遺跡　23. 南八幡遺跡　24. 久保園遺跡　25. 席田大谷遺跡(・赤穂ノ浦遺跡)　26. 宝満尾遺跡 (24 ～ 26. 席田遺跡群)　27. 下月隈 C 遺跡　28. 井相田 D 遺跡　29. 仲島遺跡　30. 井相田 C 遺跡　　A. 東光寺剣塚古墳(6 世紀中頃)　B. 那珂八幡古墳(古墳時代早期～前期初頭)　C. 今宮神社古墳(前期古墳？)D. 須玖御陵古墳(前期初頭)　E. 板付八幡古墳(6 世紀後半)　　イ. 那珂 37・117 次ほか調査ロ. 那珂 23・114 次調査　ハ. 那珂 115 次調査　ニ. 比恵 8・72 次調査　(「那津官家」、国指定史跡)

※上図の遺跡範囲はおよその範囲を示したものであり、埋蔵文化財調査事前調査窓口における分布地図上の埋蔵文化財包蔵地の範囲とはやや異なる場合があり、また調査の進展により範囲が変動する場合もあり注意されたい。

評価され、同地点は国指定史跡として保存されている（市報告第116・663集）。比較的最近の調査により（比恵109・125次、市報告第1002・1237集）、史跡保存地区の南西側で同様な三本柱柵列区画と大型の総柱建物（大型倉庫）群からなる遺構群が検出された。柵列から想定できる方形区画の位置と方位は、８・72次と109・125次では異なっており、また隅角部が重複してしまう可能性があり、同時期ではなく前後する時期か、または一方が先に作られ、後から一方が加えて作られたという可能性が高い。109・125次の方は、北側の69次地点に関連遺構が無く、その手前で折り返し、およそ一辺50ｍの方形区画であろう。一方、８・72次は一辺64ｍ前後の方形区画が予想できる。また125次では「高殿」的な建築様式である、屋外棟持柱付建物があり、「倉庫群」だけでない機能（居館・祭儀機能）も想定できる。125次柵列区画の東端の三本柱が斜行し、調査区南東側に「突出部」を想定しうることも「首長居館」的な要素である。したがって、後の評（郡）衙正倉に繋がるような古代官衙倉庫群としてより洗練されて来ているのは８・72次の方で、遺構の様相からはそちらが後出する可能性がある。さらに、８次建物でもⅢＡ期新相相当の須恵器が出土しているが（市報告第663集第12図1,2）、ⅢＢ期やⅣ期も含む（同図3,4）。一方、125次の建物からはⅢＡ期新相相当の須恵器が複数出土している（第1237集第102図6、第110図10～12、このうち第102図6と第110図10,11は「高杯」坏部とするが、天地逆で坏蓋の誤認の可能性が高い）。すなわち建物群の成立時期と廃絶時期は、109・125次の方が早かった可能性が高い。ただし上記の考察は、８・72次の正式報告書作成と125次出土土器の再観察により今一度慎重に考察すべきところである。さらに、比恵・那珂の他の数地点（比恵39次・50次・109次、那珂18次・23次）にもⅢＢ～Ⅳ期の大型倉庫建物があり、複数の大型倉庫群が並立していたらしい。なお比恵７・13次の三本柱柵列区画（市報告第117・596集）は正方位をなし、比恵・那珂遺跡群での傾向から７世紀中頃以降に下る初期官街遺構群の一部と見た方がよい（長直信2014）。その他、単独存在の特異な総柱大型建物が那珂68次にあり、大型倉庫か祭儀的「高殿」であったか検討を要するが、飛鳥時代前半（Ⅳ期）と推定されている（市報告第639集）。この場合、周囲の遺構分布の中でその用途を考える必要がある。

那珂遺跡群では、「初期瓦」とされる特異な瓦類を含む６世紀末から７世紀後半ないし７世紀末の古代瓦が那珂遺跡群の複数地点で出土している（菅波正人1994、齋部麻矢1999、比嘉えりか2008）。22次では牛頸窯跡群神ノ前窯と同じ須恵器成形の「神ノ前タイプ」瓦が出土し（市報告第253集）、Ⅳ期古相（Ⅳ－１・２期、600年前後～７世紀第１四半期頃）の土器を伴い、九州最古の瓦の一つとされる。「神ノ前タイプ」段階の須恵器成形瓦と、桶巻技法など通有の瓦製作技法を導入した、より瓦らしい瓦として確立した次の「月の浦タイプ」までを出土した23次の溝は（市報告第290集）、近年の114次の成果から（市報告第1082集）、大型建物を伴う一辺90mの方形区画の西辺になることが判明した。６世紀末から７世紀中頃（Ⅳ期新相；Ⅳ－４期まで）の初期官街遺構であろう。23次の区画溝外側西方には倉庫群がある。「官衙」とした場合、「評」制（近江令＝670年）以前であり、その位置付けが課題である。23次の溝は最下層がⅢＢ期に遡り、「神ノ前タイプ」が伴う下層はⅣ期初頭、「月の浦タイプ」が伴う上層はⅣ期新相～Ⅴ期、最上層はⅥ期である。114次では、方形区画内北側に大型掘立柱建物２時期分の柱列ないし建物（SB2070、SX2080）が検出されている。方形区画溝も114次では掘り直しが明らかになった（長直信2014）。また114次の区画溝は東辺に途切れている箇所があり、出入口施設が存在した可能性が高い。その東側には、那珂地区では古墳時代初頭に造営された「道路」遺構が存在する（久住1999b・2008）。この「道路」は、古墳時代後期から飛鳥時代前半期に側溝が再掘削され、再利用された可能性が高く（久住1999b、市報告第639・713集、長直信2014）、この方形区画も方位をそろえている。ところが114次の方形区画溝には初期瓦が少数しか出土していない。一方、23次の溝SD89には初期瓦が多く出土している。これは、23次に近い方形区画内西側に瓦葺きの「主殿」が存在したこ

Fig. 2　　那珂156次調査地点と周辺の調査区位置図（1/1,500）

とを示唆する（長直信 2014）。出入口施設は「道路」側の東なので、この初期官衙では、「東面」する主殿であった可能性がある。

その他、那珂の南端の 37・51・56・117 次でも７世紀中頃～末（Ⅳ期新相～Ⅵ期）の大型建物ないし二本柱柵列が検出されている（市報告第 366・525・500・1034 集、菅波正人 1996）。那珂 115 次では、ⅢＢ期以来の竪穴建物や掘立柱建物の集落の展開の上に、途中から大型掘立柱建物に変遷することが確認され（市報告第 983 集）、さらに建物が正方位化するⅣ期新相（Ⅳ－３期以降）からは初期瓦が出土し、そのうちのⅣ期最新相～Ⅴ期の大型建物 SB01 は初期瓦を伴い葺いていた可能性がきわめて高いと推定される。調査区内では、畿内系暗文土師器坏も出土しており、畿内中枢（飛鳥）との関係が示唆される。これまで那珂の初期瓦については、竪穴住居出土例もあり（13 次・32 次・62 次など）、竪穴住居に使われたという意見さえもあったが、115 次で瓦が確実に伴う大型建物が検出されたこと（Ⅳ－4 期～Ⅴ期＝７世紀第３四半期）、23 次・114 次の初期官衙方形区画溝内西側に瓦葺き建物を想定できることから（前述）、相応の建物に瓦が葺かれていたと判断してよいだろう（注 1）。牛頸窯跡群の須恵器窯で初期瓦が焼成されているが（齋部麻矢 1999、比嘉えりか 2008、舟山良一編 2008）、その主要かつほとんどの消費地は那珂の初期官街遺構群である。115 次では、初期官街の可能性がある建物群は、Ⅳ期新相（７世紀中頃）以降に正方位を指向するという変遷が明らかになった。比恵・那珂全体としては、地区により正方位化の細かい時期の相違がありそうであるが（一部はⅣ期新相から）、Ⅴ期（およそ７世紀第３四半期後半）までには全域的に正方位化して入る可能性が高い。これに関連して、那珂遺跡群だけでなく南に接する五十川遺跡や井尻Ｂ遺跡でも、Ⅴ期以降、特にⅥ期（７世紀第４四半期～700 年代頃）後半の遺構の多くが正方位を指向し（井尻Ｂ 22 次報告、市報告第 923 集）、７世紀後半から８世紀初頭における広域の正方位地割と計画的な官街域形成を予察する意見もある（吉留秀敏 2009）。

このような初期瓦（注 2）の存在や大型建物、大型倉庫群などがある６世紀後半～７世紀代の比恵・那珂遺跡群の評価については、「那津官家」のほか、初期「評衙」、さらには『日本書紀』の記述を参照しつつ大宰府政庁成立以前の「筑紫大宰」、あるいは「長津宮（＝磐瀬宮）」、「筑紫大郡」といった国家的機関（施設）の可能性も含めて検討されるべきである。この点、「難波宮」が置かれた難波の地に、「難波大郡」や「難波屯倉」があったとされることが示唆的である。また７世紀中頃までの瓦の出土は畿内の寺院以外では非常に稀少でありその意味が問われ（注 3）、『日本書紀』の記述からは「那津」（「那大津」とも）に外交・軍事拠点があったのは間違いなく、遺跡群の様相からそれらは比恵・那珂遺跡群に該当する蓋然性が高く（白井克也 1998、長洋一 1994、宮本一夫 2011 など）、逆にそれ以外には考え難い。このうち「磐瀬宮」については、那珂遺跡群西方の那珂川の浅瀬が「磐瀬」とされていたとされ、対岸の古代官道「水城西門ルート」上の「磐瀬駅」（駅家）近くにそれを想定する意見もある（小田和利 2014）。那珂川における「磐瀬」の存在は首肯できるが、７世紀後半段階（注４）の顕著な遺跡群は奈良時代の「磐瀬駅」推定地の現在の大橋から野間付近には存在せず、「磐瀬宮」の想定地は、むしろ対岸の那珂遺跡群に求めるのが適切であり、実際に正方位の方形区画と大型建物を伴い、時期が合致（須恵器Ⅴ期前後）するその候補遺構が那珂 117 次付近に存在する（市報告第 1034 集）。これに関連して、「大宰府政庁Ⅰ期」（７世紀後半～８世紀初頭）のうち、その前半期には特別に顕著な官衙遺構群は展開した形跡がないこと、「筑紫大宰」の中枢施設として整備されたのは「Ⅰ期新段階」とされ、飛鳥浄御原令（681 年以降）段階の可能性が高いことが注意される（吉村靖徳 2003、杉原敏之 2007）。つまり、「政庁Ⅰ期古段階」（680 年代初頭以前）の「筑紫大宰」の実質的な拠点は、依然として那珂遺跡群にあった可能性が考慮される。少なくとも、那珂は７世紀末～８世紀（Ⅵ・Ⅶ期）にかけても、古代瓦や陶硯の出土（陶硯の一部についてはⅣ～Ⅴ期の遺構群に伴う可能性がある）、正方位の道路遺構の存在（122 次、福岡市埋蔵文化財年報 Vol.23）、多数の井戸の掘削（龍孝明・久住猛雄・菅波正人・山崎頼人 2013）など、評（郡）衙のような地域拠点が存在した可能性が高い。ただし７世紀末

Fig. 3　　那珂156次調査区と近隣調査地点（1/500）

から８世紀初頭には、南方 1km にある井尻Ｂ遺跡に寺院址（井尻廃寺）も伴う官衙遺構群が形成されており、計画的な正方位街区が形成されていたとみられる（市報告第 923 集）。この井尻Ｂについては、文字瓦や刻書須恵器などもあり、短期間の評（郡）街である可能性が検討されるべきであろう。さらに井尻廃寺からやや後れる８世紀初頭～前葉には、那珂川対岸に三宅廃寺が造営される。この二つの寺院址は同一緯度線上にあり、計画的な配置がうかがえる。この周囲には、鴻臚館（筑紫館）や大宰府にも瓦を供給したらしい三宅瓦窯や老司瓦窯が分布する。

さて那珂遺跡群には那珂八幡古墳を造営の端緒とし、その分布の北端となる前期古墳群（周溝墓群）が、「道路」に沿って造営されていることが明らかになっているが（久住猛雄 1999・2008a）、この南端は五十川遺跡北部の今宮神社古墳である。この古墳は社殿により著しく削平され、現状は径 30m の円墳状となっているが、大正末期の 1/3,000 地形図では現在よりも墳丘が遺存して地形が南側に突出しており、また戦後早い時期の航空写真には「前方部」の痕跡があり、全長 50 ～ 60m の前方後円墳であった可能性が高い。現在も西側道路の屈曲はくびれ部の存在を示唆する。旧地形図の「前方部」形状からは前期古墳とも推測できる。後期古墳では、剣塚北古墳と東光寺剣塚古墳の存在が知られるが、他にも削平された古墳が遺跡群内に散在する（44・79・110・122 次）。特に 79 次の古墳周溝は径 20m 以上が想定され、Ⅳ期前半の須恵器があり該期としては首長墓級である。これらは、平野周縁の丘陵斜面に造営される多数の群集墳とは一線を画し、特に有力な氏族系譜の墓地であろう。また板付遺跡の南東には大破した石室が露出する板付八幡古墳があるが、現状の残丘からも径 30m が推定される。残丘地形が突出する側の社殿建替に伴う調査では、円墳である場合に存在するべき周溝が検出されず、前方後円墳とする見方も成り立つ（市報告第 717 集）。ⅢＡ期新相～ⅢＢ期頃の須恵器が採集され、東光寺剣塚に後続する本地域最後の前方後円墳であろう。さらに、福岡平野東縁にある今里不動古墳（Ⅳ－１・２期の須恵器表採あり、７世紀初頭頃）、平野西側丘陵にある寺塚穴観音古墳（７世紀前葉～中頃か）はいずれも径 30m になる大首長墓であるが、那珂遺跡群を経営した勢力（在地大首長）との関係が想定されるべきであろう。

（注１）那珂八幡古墳の周溝からは（34 次）、軒丸瓦を含む７世紀中頃～末と推定される瓦類が多量に出土しており（第 365 集）、大型建物ではなく、祠のような比較的小規模の瓦葺建物が古墳上ないし古墳の近在に存在したのではないかという説もある。ただし墳丘上では瓦が採集できないので、むしろ 34 次周溝の南側あたりになんらかの施設の存在を想定すべきかもしれない。

（注２）定型化した百済系単弁軒丸瓦が伴う段階以降は「初期瓦」からは外す（比嘉えりか 2008）。北部九州の本格的な瓦生産は春日市ウトロ窯跡（Ⅴ～Ⅵ期古相）からと考えられ、Ⅴ期（660 年代～ 670 年代前半か）の幅内に画期があり（大野城跡なども含む）、この段階に百済系単弁軒丸瓦なども導入され、Ⅵ期に普及したのであろう。那珂遺跡群には、「初期瓦」に後続するこの段階の古代瓦も多い（那珂 13 次 53 号井戸、那珂 34 次那珂八幡古墳周溝など）。

（注３）飛鳥における石神遺跡において（21 次調査）、斉明天皇代（655 － 661 年）と推定される掘立柱建物の一つに、周囲溝跡から大量の瓦が出土し、瓦葺きであったと推定されている（奈良国立文化財研究所による現地説明会資料を参照）。石神遺跡は蝦夷や隼人などの辺境の民や外国からの使節を饗宴する施設とされ、那珂遺跡群の瓦葺建物の性格を考える上でも示唆的である。また朝鮮半島では、百済や新羅の都において、寺院以外にも瓦葺建物が存在する。対朝鮮半島の外交と軍事の最前線である筑紫の那津において、主要な建物に瓦葺の存在が推定されることと関連し、非常に重要である。

（注４）ここで本報告における土器の編年と暦年代観について触れておく。須恵器編年は、小田富士雄による大別（九州編年）を用いるが（小田 1964・1977 など）、その様式内容について、Ⅱ～Ⅴ期は高橋徹・小林昭彦 1990 を、Ⅳ～Ⅶ期は中島恒次郎 1997「七世紀の食器－九州消費地－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西･東５　７世紀の土器－』（以下、「中島分類（編年）」とする）を参照した。さらにⅣ期は中島編年を参考にして、そのⅠ期をⅣ－１・２期（Ⅳ期前半）に、Ⅱ期をⅣ－３・４期（中島編年Ⅱ－１期／Ⅱ－１期新相～Ⅱ－２期古相）およびⅤ期（Ⅱ－２期）に細分する（久住猛雄 1999a）。その暦年代は、Ⅳ期を

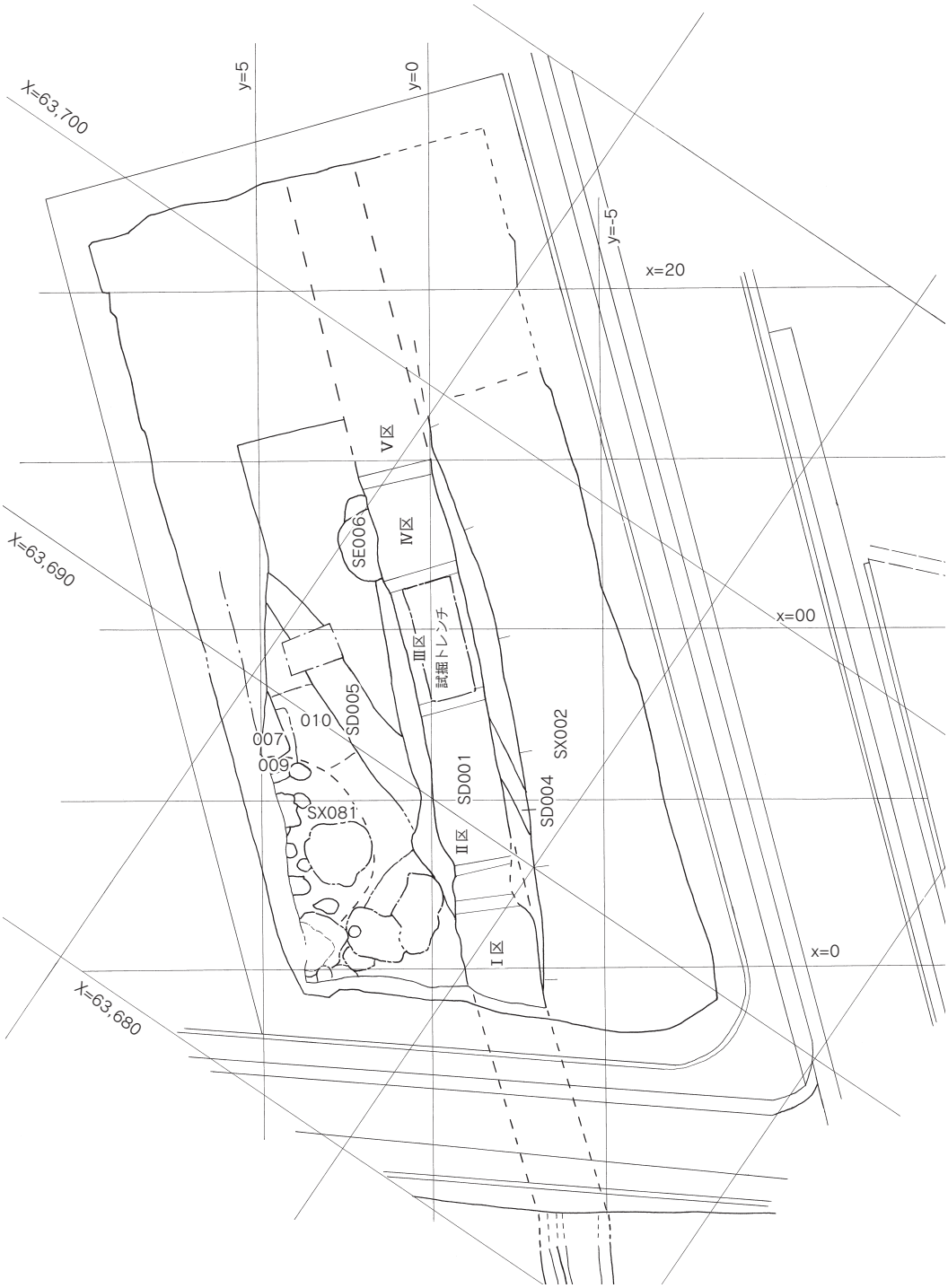


Fig. 4　　那珂156次調査区敷地図（国土座標図）（S=1/100）

590 年頃から 660 年代前半までとし（Ⅳ－３期は 640 年代前後）、Ⅴ期を 660 年代中頃から 670 年代前半と考える（その根拠は久住 1999a 前掲参照）。従来の九州での編年観より新しく見るが、畿内（飛鳥・難波）の土器編年の実年代観（佐藤隆 2003、長直信 2012・2017 など参照）との対照では整合的である。問題となる斉明朝から天智朝（655 ～ 672 年）は、おおむねⅣ－４期からⅤ期に相当すると推定する。従来説のⅣ期からⅤ期の暦年代をより古くする論者は（例えばⅤ期を７世紀中頃あるいは第２四半期とする立場）、飛鳥や難波との編年対比を検討した上で再考するべきであろう。この点については、長直信が筆者の暦年代観も参照した上で熟考を重ねており（長直信 2012・2017）、従来「Ⅴ期」を７世紀第２四半期ないし下っても７世紀中頃としていた論者にも、最近ではⅤ期を７世紀第３四半期とすることに同意する見方が出てきている（石木秀啓 2017）。そうなれば従来の各遺跡、各遺構の暦年代比定とそれに基づく歴史解釈も全面的見直しが必要になる。「Ⅴ期」（Ⅳ期末を含む）の暦年代の再検討

により（ほぼ斉明・天智朝となる）、従来は「７世紀後半」50 年間のイメージであった「Ⅵ期」は７世紀第４四半期を前後する年代幅に、「Ⅳ期」は上限こそ６世紀末だが下限はⅤ期との移行期を含めて７世紀「中頃」までの長い年代幅で考えざるを得ない。この暦年代観の変更により、比恵・那珂の初期官衙や初期瓦に関わる遺構群の評価や意義も再考されるべきだろう。また、「古墳時代後期」はⅢＢ期までとし、Ⅳ期以降は「飛鳥時代」とすべきである。（※文中引用文献は報告書末尾にまとめた。）

４．周辺の調査

本報告の那珂 156 次調査周辺で実施された既往の調査成果について概観したい（Fig.2・3）。ここでは主に弥生時代から奈良時代について見ていくが、一部中世以降についても触れる。156 次調査が所在するアサヒビール博多工場地内では（156 次は工場敷地南東隅にあたる）、施設建替えなどに伴って多くの発掘調査がなされている。15 次調査（市報告第 267 集）は工場内緑地となっている東光寺剣塚古墳の確認調査で、墳丘規模の確定と三重壕の存在が明確になった。その後の周囲調査により（78 次、99 次ほか）三重壕の実態がより明確になってきている。15 次では、古墳墳丘下にある弥生時代から古墳時代前期の遺構も明らかになった。特に 15 次 4・5・15c トレンチ検出の弥生終末期～古墳前期の溝状遺構は、南側は 16・77・100 次の、北側は 128・129 次の溝状遺構に繋がり、弥生終末期から造営された長大な「道路」側溝の一部をなすことが明らかになっている（久住 1999b･2008）。また 4･5･7 トレンチで検出された甕棺墓群は、南は 16・100 次さらに３次・80 次・136 次まで、北側は 89 次および 99 次西縁、128･129 次まで続く長大な甕棺墓群（128･129 次では先行する土壙墓・木棺墓がある）の一部であり（Fig.2 に想定帯を一部掲載、北側は比恵遺跡群近くまで続く可能性がある）、後の長大な「道路」自体、この甕棺墓群列を意識して形成された可能性が出てきた。実際、100 次では甕棺に切られる墓域中の溝（SD003）が延長部分では古墳初頭の土器が出土したり（元々先行溝があった区画線上に、「道路」造営時に側溝を再掘削した可能性がある）、128・129 次では後代の道路遺構に平行する弥生中期の墓域を画する溝があり、36 次でも後代の道路推定線の東側に平行する弥生後期の溝があり、弥生中期の墓域（墓群列）を意識した、断続的な「先行道路」が存在していた可能性がある。東光寺剣塚の北西部三重壕が検出された那珂 99 次では、その「道路」から東に分岐するとみられる、別の「道路」遺構が検出されている。時期は弥生終末期の成立で同じである。この東側延長は段丘内の谷部に達するが、この谷部が弥生時代から存在したものか後の造成なのか、前者の場合たとえばここに船着場のようなものが存在しないかどうか、今後の調査で注意すべきである。この谷部が後世（中世以降？）の造成であれば、その「道路」の延長部分の那珂 135 次において、弥生後期後半～終末期の柵列による方形区画の一部が検出されていることが注意される。甕棺墓群列（Fig.2 範囲内）は、15 次は橋口編年（橋口達也 1979）ＫⅡｃ式甕棺、16 次ではＫⅡｃ～ＫⅣａ式（中期中頃～後期初頭）があり、この墓域は日常土器転用小児甕棺が多く（須玖Ⅱ式古段階＝中期後葉～後期初頭）、さらに土壙墓もある。土壙墓は報告では多くが甕棺墓に先行ないし甕棺墓群の初期までとされているが、一部は後期とみられる横口式土壙墓および足元掘込土壙墓であり、後者は型式学的に後期前葉～後期中葉に下るものがある（SK-12）。１基だが飛鳥時代末（Ⅵ期後半）の土壙墓（SK-17a）があるが、土器の副葬レベルからすると下部の墓壙は別遺構で弥生後期の足元掘込土壙墓だろう。100 次は東隣の 16 次と同じくＫⅡｃ～ＫⅣａ式、小児甕棺もあり須玖Ⅱ式新段階～後期初頭がある（16 次より削平度が大きく失われた小児棺があろう）。土壙墓らしき土坑もあるが削平で少ない。うち一基は後期初頭の足元掘込土壙墓だろう（SK017）。16・100 次の甕棺墓は時期幅があるが、主体はＫⅢａ・ｂ式である。80 次ではＫⅢａ～Ⅲｃ式と出土土器片の下限からおそらく後期後半の大型二段墓壙土壙墓（墓壙下部南側は「足元掘込」の退化か）がある。136・137 次ではＫⅡｃ～ＫⅢａ式とおそらく後期に下るガラス小玉出土の土壙墓があり、やはりおそらく後期の横口式土壙墓とみられる土坑がある（SK03）。さらに墓域中に飛鳥時代後期の須

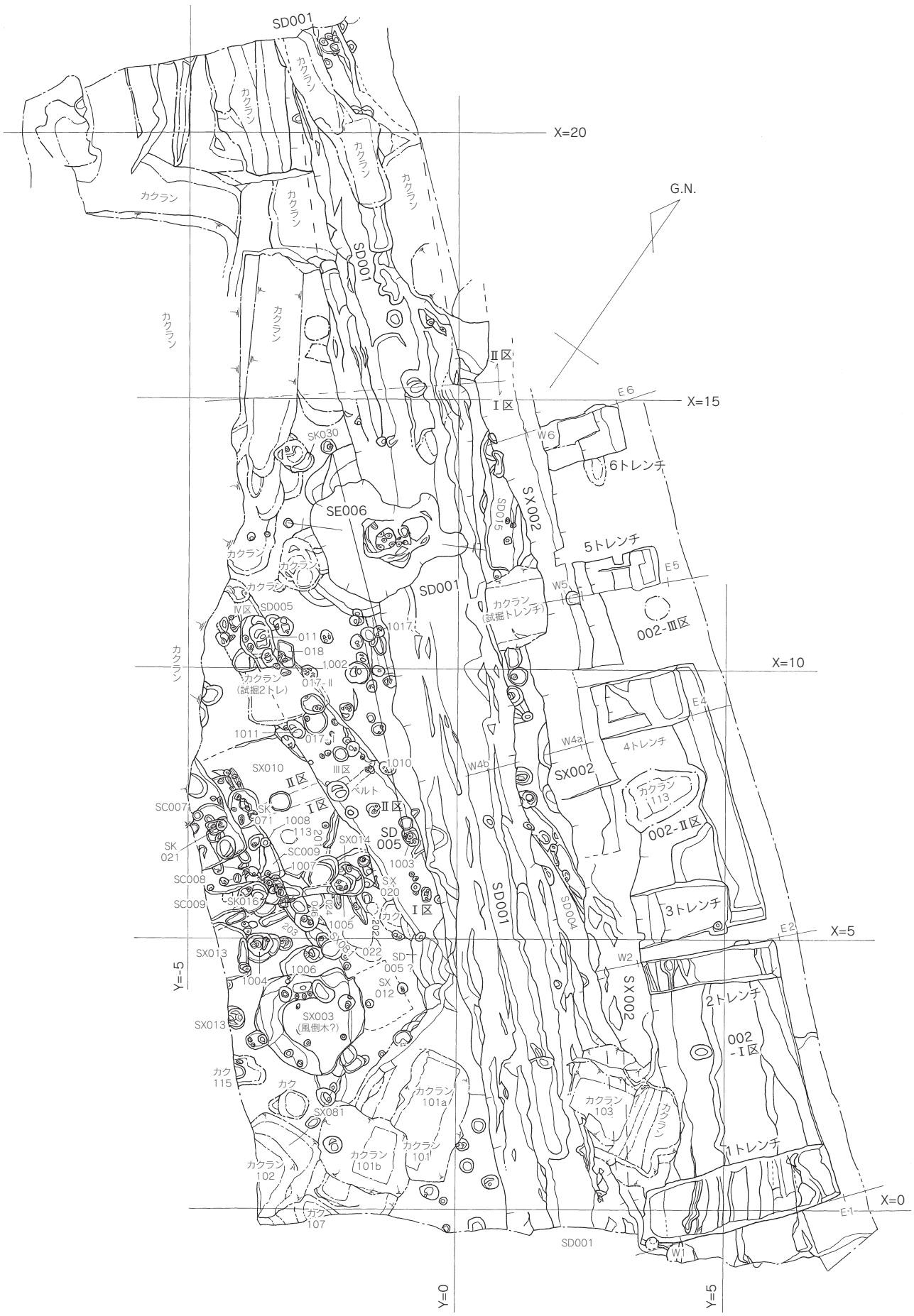
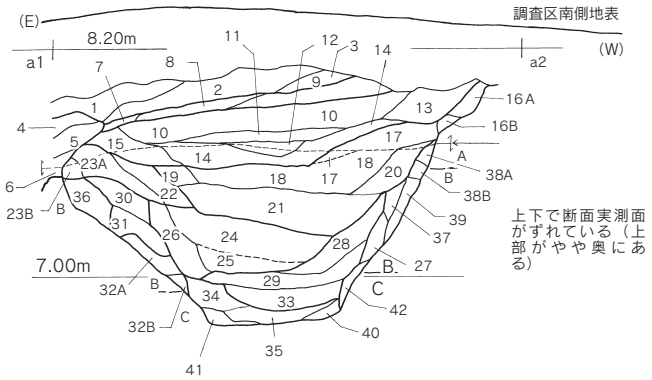
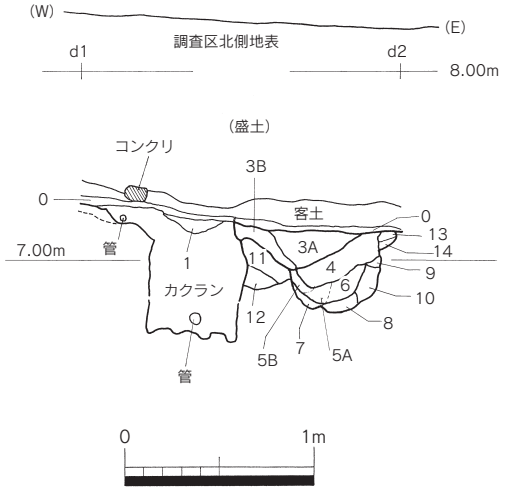


Fig. 5　　那珂156次調査区内全体図（1/100）



SD001-Ⅰ区南側調査区壁面土層

0～3. 表土・客土
0. 瓦礫・煉瓦片・砂礫多く含む耕作土（パサパサの土）、ロームBブロック含む
1. 7.5YR4/3－4/4 シルト＋ローム 5 ミリ以下粒子 2－3%＋小砂礫 1－2%、しまり甘い、旧耕作土か（根の影響大きい）
2. 7.5YR4/4 シルト＋7.5YR5/6－5/6(埋戻し)ロームブロック多 40－50%、しまりやや甘い
3. 7.5YR4/3(－4/4) シルト＋明褐～橙色ローム 10 ミリ以下 7%＋小砂礫わずか(1% 未満)、しまりややあり～やや甘い
4～6. SX002
4. SX002 最上層（現代）、7.5YR4/4－4/6 シルト＋7.5YR－5YR5/6－5/8 ロームブロック多 30－40% しまり甘い、小砂礫わずか、炭含む
5. SX002 上層上部（近現代）、7.5YR（4/3－）4/4 シルト＋7.5YR5/6－6/6 ローム 2.5 ミリ以下ローム 5－7%、しまりややあり（～やや甘い）小砂礫 1%
6. SX002 上層下部（A層、近代）、7.5YR4/3－4/4（わずかに粘質）シルト＋ローム粒子 1－2%、小砂礫ごくわずか、しまりややあり～やや甘い
7～9. SD001 上部整地層？（近世か）
7. 8 層と近い（8 層よりやや明るい）、7.5YR4/4 シルト＋ローム 15 ミリ以下 7－10%、しまりややあり(～やや甘い)
8. 7.5YR4/4 シルト＋7.5YR 明褐－橙色ローム 15 ミリ以下 3－5%、しまりややあり～やや甘い
9. 7.5YR3/4（－4/4）シルト＋7.5YR 橙色ローム 10 ミリ以下 2－3%＋5 ミリ以下砂礫 1－2%＋5－15 ミリ以下砂礫わずか、しまりあり～ややあり、8 層とは土色・しまりが違う
10～15. 最上層～上層
10. 7.5YR4/3－3/4 シルト＋5 ミリ以下小砂礫 2－3%＋ローム 10 ミリ以下 2%、土器小片わずか(再堆積)、しまりやや甘い、旧耕作土ないし再堆積包含
11. 7.5YR4/4(－3/4) やや粘質シルト＋ローム粒子 2 %(5 ミリ以下)、小砂礫ごくわずか、しまりやや甘い～ややあり
12. 7.5YR4/4 シルト＋明褐・黄橙色ローム 15 ミリ以下 7－10%、小砂礫ごくわずか、しまりやや甘い（～甘い）
13. 7.5YR3/4 やや粘質シルト＋ローム 5 ミリ以下 5－7%＋小砂礫 1%、しまりややあり～あり
14. 7.5YR4/4－3/4 シルト＋小砂礫（5 ミリ以下）1%、レキごくわずか、炭粒わずか 1% 未満、しまりややあり～やや甘い
15. 7.5YR3/4（－4/4）シルト＋明褐色ローム 15 ミリ以下 3－5%＋小砂礫わずか、しまりややあり～やや甘い
16～21. 中層上部（上層～中層）
16A. 7.5YR4/4 シルト＋ローム明褐色 5 ミリ以下 5%、しまりやや甘い
16B. 7.5YR3/4 粘質シルト＋明褐～明赤褐色ローム 5 ミリ以下粒子 5－7%、しまりややあり～あり
17. 7.5YR4/4－3/4 やや粘質シルト＋ローム明褐色 10 ミリ以下 5%、小砂礫ごくわずか、しまりややあり～あり、上半ほどやや明るく 7.5YR4/4 になる
18. 7.5YR3/4(わずかに粘質)シルト＋ローム 5 ミリ以下 1－2%、小砂礫(5 ミリ以下)わずか 1%、礫わずかに含む、炭粒 1%（以下）含む、しまりあり～ややあり
19. 7.5YR3/4(－4/4)(やや粘質)シルト＋ローム 5 ミリ以下 2%、しまりやや甘い
20. 7.5YR3/4(－4/4) やや粘質シルト＋ローム 5 ミリ以下 1－2%、炭粒 5 ミリ以下、小砂礫わずか、しまりややあり～（上部）やや甘い
21. 7.5YR(3/4－)4/4 やや粘質シルト＋炭粒 5 ミリ以下 1%＋ローム 5 ミリ以下 1－2%(少)＋5 ミリ以下砂礫ごくわずか、しまりあり
22～25. 中層下部（掘り直し）
22. 7.5YR3/4 やや粘質シルト＋7.5YR5/6－6/6 ローム 15 ミリ以下 5%、しまりあり～ややあり
23A. 7.5YR3/4－4/4 シルト＋明赤褐色ローム 15 ミリ以下 10% しまりやや甘い、30 層にやや近い
23B. 7.5YR4/4(－3/4) シルト＋ローム明褐～明赤褐色 7 ミリ以下 2－3%、小砂礫わずか、しまりややあり～やや甘い
24. 7.5YR3/4(－3/3) 粘質シルト＋ローム粒子・小ブロックわずか 1－2%、炭粒ごくわずか、土器小片含む、しまりややあり、少し暗い
25. 7.5YR3/3(－4/3) 粘質シルト＋ローム粒子ごくわずか、24 層より暗い、しまりあり(24 層よりしまる)
26～29. 下層上部（掘り直し下層）
26. 7.5YR3/4(－4/4) やや粘質シルト＋5YR 明赤褐色ローム 15 ミリ以下 5%、しまりややあり～しまりあり
27. 7.5YR3/4(－6/4) シルト（やや粘質）＋明褐色ローム 10 ミリ以下 5%、しまりやや甘い(－甘い)
28. 7.5YR4/4(－3/4) やや粘質シルト＋ローム粒子 5 ミリ以下 1－2%、しまりややあり～やや甘い、24 層と違い遺物ほとんどなし、24 層より明るく赤い感じ
29. 7.5YR(4/4－)3/4(やや)粘質シルト＋ローム粒子 5 ミリ以下 2%、しまりあり（～ややあり）、炭粒わずか、よどみ状
33～35・40. 掘り直し最下層
33. 29(7.5YR4/4－3/4) より明るく 35 層(7.5YR4/4) よりもやや暗い中間の土色やや粘質シルト＋ロームブロックB(－C) 5%、しまりややあり
34. 7.5YR3/4(－4/5) やや粘質土シルト＋ローム粒子ごくわずか 1%、しまりややあり、土色は 35 層とほぼ同じ
35. 7.5YR3/4(－4/4) 粘質シルト＋ローム明黄褐色 10 ミリ以下 3%＋ロームブロックB・C10%、しまりやや甘い、よどみ状、
40. 7.5YR3/4－4/4 やや粘質シルト＋5YR 橙～明赤褐色ローム 15 ミリ以下 10%、しまりやや甘い
30～32. 下層下部東側（古相掘り直し最下層東側）
30. 7.5YR3/4 シルト＋7.5YR5/6－6/6 ローム 2.5 ミリ以下 15%（ローム土混入やや多）、しまりややあり、31 層より暗く、31 層よりややしまりあり
31. 7.5YR3/4－4/4 シルト＋7.5YR5/6 明褐色ローム 20 ミリ以下 10－15%、しまりやや甘い、粘性あまりない
32A. 7.5YR4/4(＋3/4 少)やや粘質シルト＋(5－)7.5YR5/6(－4/6) ローム 20 ミリ以下 7－10%(上半に多い)、しまりややあり～やや甘い
32B. 7.5YR4/4(＋3/4) やや粘質土シルト＋(－5)7.5YR4/6－5/6 トスロームブロック 15 ミリ以下 7%、しまりやや甘い、32A・B 層は 31 層よりやや粘質
36. 溝さらえ（古相掘り直し）前東壁側堆積土
36. 5YR－7.5YR5/6 明赤褐～明褐色トスローム崩れ＋7.5YR4/4－4/6 シルト斑状 20%、しまりやや甘い～甘い
37～41. 溝さらえ（古相掘り直し）前西壁側堆積土
37. 7.5YR4/3 粘質シルト＋明褐色ローム 10 ミリ以下 5%、しまりややあり～やや甘い
38A. 7.5YR4/4－3/4 シルト＋7.5YR5/6 ローム 15 ミリ以下 10%、しまりやや甘い～甘い
38B. 7.5YR3/4(－4/4) やや粘質シルト＋7.5YR5/6 ローム 15 ミリ以下 10%、しまりややあり、38A～38B 層の差異は漸移的
39. 7.5YR3/4(－4/4) 粘質シルト＋明褐～橙色ローム 2.5 ミリ以下斑状(地山崩れ)2.5%(中位～上半にローム土混入多い)、しまりややあり
41. 7.5YR4/6(－5YR4/6) ローム＋7.5YR4/4 シルト 30%、しまりやや甘い
42. 最下層崩落堆積土（最初期堆積土）
42. 7.5YR4/4 やや粘質シルト＋7.5YR2/3 シルト 2.5 ミリ以下 5%＋5YR 橙～明赤褐色ローム土 15 ミリ以下 7%(下部に多い)、しまりややあり
地山A. 7.5－5YR5/6 トスローム粘質土、しまり下部よりやや甘い(しまりややあり)
地山B. 7.5(－5)YR4/6(－5/6・5/8) トスローム(やや)粘質土
地山C. 5YR4/6(－5YR4/6) トスロームやや粘質土＋7.5YR6/6 が粒・小斑状に入る、しまりあり

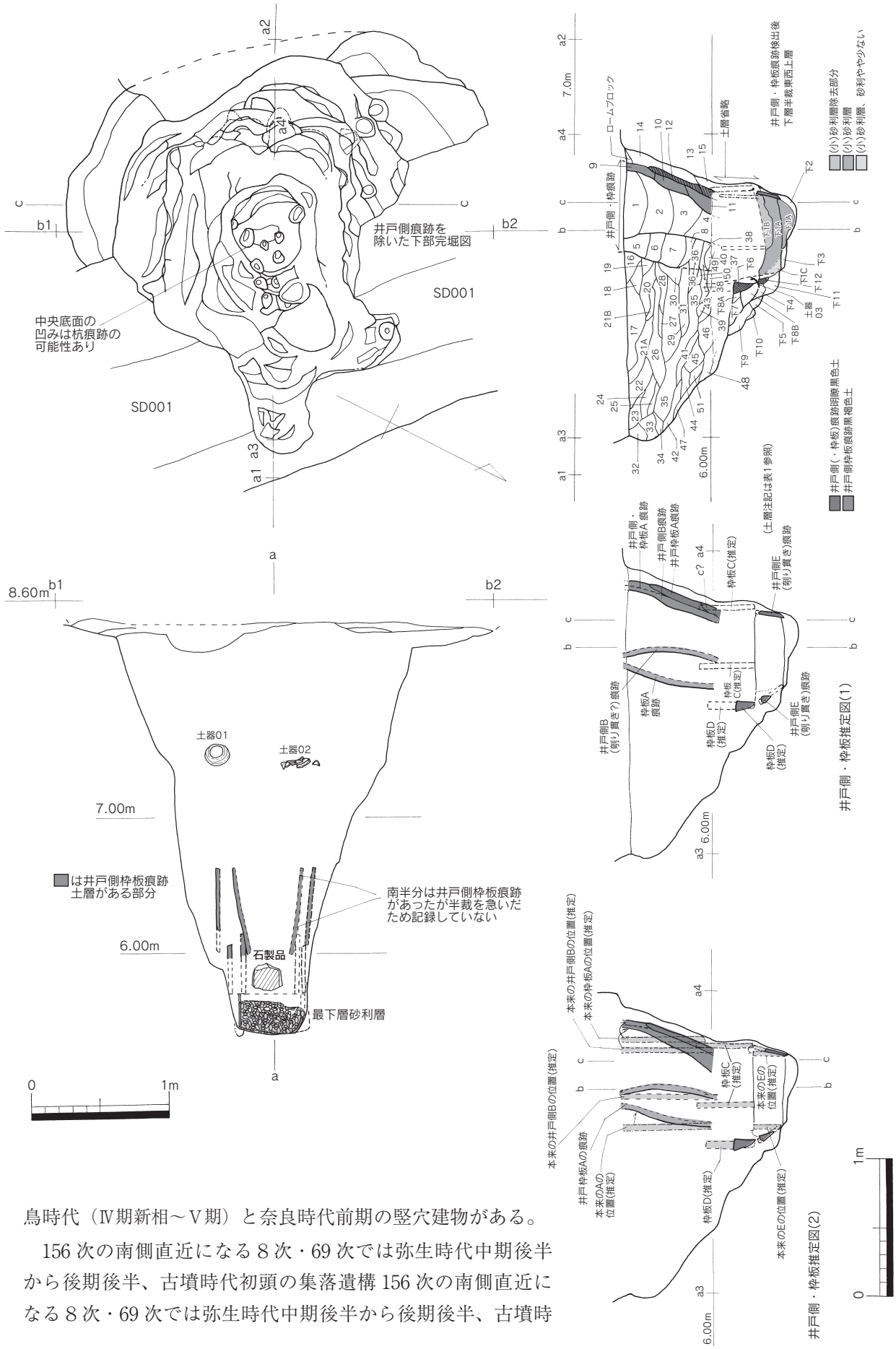


SD001-Ⅷ区北側調査区壁面土層

0. 客土、マサ土＋小バラス＋コンクリブロックなど瓦礫＋ローム土・褐色土混入
1. 5YR やや暗い褐色土＋ローム土 15%
2. 明褐色土 40%＋橙色(～赤褐色土)ローム土 60%
3A. 7.5YR4/3－3/4 粘質シルト＋ローム粒子 2%＋炭粒ややあり 2－3%、しまりややあり
3B. 7.5YR4/3－3/4 やや粘質シルト＋ローム粒子 1%＋炭粒 1%、3A 層より暗い、しまりややあり～やや甘い、粘性 3A よりやや甘い
4. 7.5YR3/4 やや粘質シルト＋ローム土 (5YR－)7%5 ㎜以下（ローム粒子目立つ）＋炭粒 1%、しまりややあり～あり
5A. 7.5YR4/3 粘質シルト 50%＋7.5YR4/4－4/6 粘質シルト 40%＋ローム土 5 ㎜以下 5%、しまりややあり～やや甘い、粘性ややあり、しまり 11 より甘い
5B. 5A と同じだが粘性あり
6. 7.5YR4/4 やや粘質シルト 10 ミリ以下＋赤褐色～明赤褐色ローム土 10 ミリ以下 10、しまりややあり、粘性ややあり
7.5－7.5YR4/3－4/4 シルト＋明褐～明赤褐色ローム土 10 ミリ以下 5－7%、しまりややあり(～やや甘い)、粘性(ややあり)やや少
8. 7.5(－5YR) 4/3－4/4 シルト（やや粘質～少し粘質）＋明褐～橙色ローム粒子 20%(10 ミリ以下)、しまりあり（～やや甘い）
9. 5-7.5YR4/3 やや粘質シルトや＋明赤褐ローム土 30%、しまりやや甘い
10. 5YR4/4(－4/3) やや粘質シルトやや粘＋明赤褐～赤褐ローム土 20 ミリ以下 15－20%、しまりやや甘い
11. 7.5YR3/4－4/4 粘質シルト＋明褐～橙色ローム土 10 ミリ以下 3%＋炭粒 1%、しまりあり
12. 7.5YR4/3 シルト＋明褐～明赤褐ローム土 5 ミリ以下 5%、しまりやや甘い、粘性わずか
13. 7.5YR4/4(やや粘質)シルト＋ローム土 5 ミリ以下 5%、しまりあり
14. 7.5YR(4/4－)粘質シルト＋橙～明褐色ローム土 15%、しまりややあり

Fig. 6　　調査区南北壁土層（SD001南北両端土層）図（S=1/40）

恵器大甕（Ⅴ期）を用いた「甕棺墓」があり、初期瓦片を副葬（？）する。もう一つ古墳後期の土師器「甕棺墓」がある（ST10）。16 次の土壙墓も含め、古墳後期から飛鳥時代に「墓地」が再利用されている事例として注目される。なお 3 次は未報告のため不明である。71 次は甕棺墓群から外れ居住域になる。弥生終末～古墳初頭の「道路」側溝と、これに直交する古墳初頭の溝状土壙（SK05）、飛



鳥時代（Ⅳ期新相～Ⅴ期）と奈良時代前期の竪穴建物がある。

156 次の南側直近になる８次・69 次では弥生時代中期後半から後期後半、古墳時代初頭の集落遺構 156 次の南側直近になる８次・69 次では弥生時代中期後半から後期後半、古墳時

Fig. 7　SE006掘方平面図・南北断面図・下層東西土層図（S=1/40）

代初頭の集落遺構（竪穴建物・掘立柱建物・井戸）が検出されている（24次は削平著しく弥生中期末／後期初頭の井戸1基のみ）。69次では弥生後期中頃の竪穴建物屋内土坑から舶載内行花文鏡片が出土したが、土坑の形式から後期初頭頃の足元掘込土壙墓の可能性も考慮される。156次も削平があり当該期の明確な遺構が無かったが、ほぼ同じ時期幅の土器が出土している。8次では、青銅器鋳造に関わる取瓶、石製鋳型片、中子が弥生中期末～後期初頭の遺構から出土し、この付近で一時青銅器生産があったことが分かる。その後、8・69次では古墳後期末～飛鳥時代前半期（ⅢB期～Ⅳ期新相）の集落が展開し、これらを切るように8次西側でⅣ期新相～Ⅵ期前半の溝（SD07-SD05-SD03,SD08-SD04）

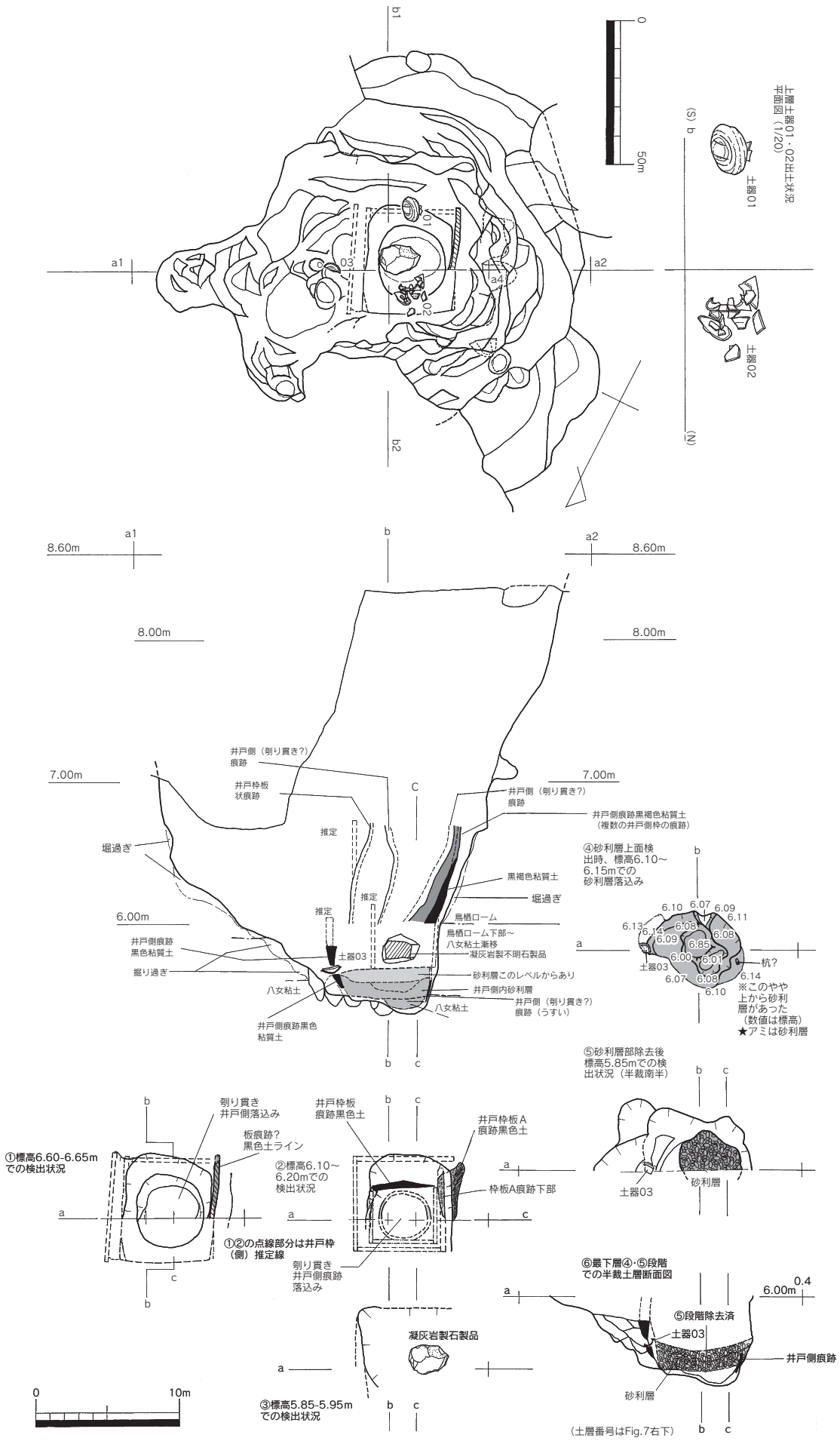


Fig. 8　SE006平面図（遺物出土状況図）・東西断面図・下層各段階平面図（S=1/40）

表１．ＳＥ００６下層・最下層土層注記（Fig.７）

Fig.７右上　SE006 下層井戸土層

1. 5－7.5YR3/3（暗赤褐～暗褐）粘質シルト＋橙色ローム 20 ミリ以下 5%、粘質ややあり、しまりややあり～やや甘い
2. 7.5YR3/3（1 層より暗い）粘質シルト＋橙色ローム 30 ミリ以下 7%、粘性あり、しまりややあり
3. 7.5YR3/3（－2/3）粘質シルト＋橙色ローム 30 ミリ 3%＋にぶい褐色粘質シルト 40 ミリ以下 1%、粘性あり、しまりやや甘い（土壌サンプル）
4. 7.5YR3/3 粘質シルト＋にぶい褐色土粘質シルト 30 ミリ以下 3%＋橙色ローム 20 ミリ以下 2%、粘性あり、しまりやや甘い～ややあり（土壌サンプル）
5. 5－7.5YR3/3 粘質シルト（6 層より暗い）＋橙色ローム 40 ミリ以下 5%、粘性ややあり、しまりあり
6. 7.5YR3/3 粘質シルト＋20 ミリ以下橙色ローム 10%＋にぶい黄褐色土 20 ミリ以下 2%、粘性ややあり、しまり甘い～やや甘い（つまっていない）
7. 7.5YR3/3 粘質シルト＋橙色ローム 20 ミリ以下 2%＋にぶい黄橙色 50 ミリ長以下 5%、（やや）粘性あり、しまりややあり（～やや甘い）
8. 7.5YR（3/3－）3/4 粘質シルト＋25 ミリ以下橙色ローム 10－15%、しまりやや甘い（あまりつまっていない）
9. 7.5YR3/3－4/3 粘質シルト＋40 ミリ以下橙色ローム 25%、粘性（やや）あり、しまりやや甘い～ややあり
10. 7.5YR4/3－3/4 粘質シルト、15 ミリ以下橙色ローム 5－10%、粘性ややあり、しまりやや甘い（土壌サンプル）
11. 7.5YR（3/3 少・）4/3－3/4 粘質シルト（粘性ややあり）＋橙色ローム 25 ミリ以下 20%、しまりやや甘い～ややあり
12. 7.5YR（3/3－）2/3(橙暗褐色) 粘質シルト＋ローム 7 ミリ以下 5%、しまりやや甘い～ややあり
13. 7.5YR2/3－4/3 粘質シルト＋ローム 7 ミリ以下 10%、粘性あり、しまりややあり
14. 7.5－10YR4/3－4/4 粘質シルト＋橙色ローム 15 ミリ以下 20－25%、粘性ややあり、しまりやや甘い
15. 7.5YR3/3－4/3 粘質シルト＋25 ミリ以下橙色ローム 10%、粘性あり、しまりやや甘い（14 層の下部）
16. 5－7.5YR3/3(－4/3)（5 層より明るい）粘質シルト＋明褐 (橙) 色ローム 20 ミリ以下 15(－20)%＋にぶい橙色ローム土 10 ミリ以下 2%、しまりあり
17. 7.5YR4/3(－4/4) 粘質土、10 ミリ以下ローム土 (明褐～橙)5－7%、しまりあり～ややあり
18. 5－7.5YR3/3－3/4 の間の粘質シルト＋明褐～橙色ローム土 10 ミリ以下 7－10%、しまりあり～ややあり
19. 7.5YR3/3 粘質シルト＋ローム土 7 ミリ以下 5% 未満 (2－3%)、右の 6 層と違う、しまりあり（～ややあり）
20. 5YR4/3 粘質シルト＋明褐色ローム土 20 ミリ以下 10(－15)%、粘性やや (少し) あり、しまりややあり
21A. 7.5YR4/4（褐色）粘質シルト＋明褐～明赤褐色ローム 30 ミリ以下多（20－25%）、粘性ややあり、しまりあり（～ややあり）
21B. 21A 層よりシルトっぽく、大きめの橙色 (～明褐色) ロームブロック（50 ミリ以下）含む、21A 層とほぼ同じ＋ローム 30－40%、しまりやや甘い（～ややあり）
22. 7.5YR3/3－4/3 粘質シルト＋明褐色ローム 15 ミリ以下 15%、粘性ややあり、しまりやや甘い
23. 7.5YR3/3－4/3(32 層より明るい) 粘質土＋明褐色ローム土 15 ミリ以下 10－15%（32 より多い）、粘性ややあり、しまりあり（～ややあり）
24. 7.5YR4/3(－4/4) 粘質シルト＋明褐（～橙色）ローム 25 ミリ以下 20%、粘性ややあり、しまりやや甘い（～甘い）
25. 7.5YR3/3－4/3 粘質シルト＋明褐色ローム 20 ミリ以下 15%、粘性ややあり、しまりやや甘い
26. 5YR4/3－4/4 粘質シルト＋明赤褐～明褐色ローム 20 ミリ以下 15%＋7.5YR2/3 シルト 2%
27. 7.5YR4/3－4/4 粘質シルト＋明褐色ローム土 10 ミリ以下 15%、粘性少しあり、しまり甘い
28. 7.5YR4/4 粘質シルト＋明褐色ローム土 10 ミリ以下 7%、粘性ややあり、しまりややあり（～やや甘い）
29. 5YR4/3 粘質シルト＋橙色 (～明赤褐色) ローム土 10 ミリ以下 15－20%、粘性少し、しまりややあり（～やや甘い）
30. 5－7.5YR4/3 粘質シルト＋橙色ローム土 25 ミリ以下 7%、粘性あり、しまりややあり
31. 5(－7.5)YR4/3 ～ 5YR4/4 粘質シルト＋橙色 (～明赤褐色) ローム土 20 ミリ以下 10%、しまりややあり（～やや甘い）
32. 7.5YR3/3(－3/4) 粘質シルト＋7.5YR4/4 粘質シルト 20%＋橙色ローム土 10 ミリ以下 7－10%、23 層より暗い、しまり（ややあり～）あり
33. 7.5YR3/3－3/4 粘質土＋7.5YR4/4 粘質土 30%、ローム土粒 15－20%、しまりややあり (～やや甘い)
34. 7.5YR4/4－3/4 粘質シルト＋橙色ローム 30 ミリ以下 25－30%、しまりやや甘い
35. 5－7.5YR4/4 粘質シルト＋橙色ローム (～明赤褐色) 土 25 ミリ以下 20－25%、しまりやや甘い～甘い
36. 7.5YR（2/3 少－）3/3 粘質シルト＋橙色 (～明褐色ローム土 (粘質シルト状) 多 40－50%（下部に多い）、しまりやや甘い（～ややあり）
37. 5YR3/3－2/3 粘質土＋橙色～にぶい褐色ローム土 20 ミリ以下 10－15%、粘性あり、しまりややあり
38. 7.5YR3/3－4/3 粘質シルト＋明褐 (～橙) 色ローム土多 30－40%
39. 7.5YR（2/3 少・）3/3－4/3 粘質土 (＋ローム少)、37 層とほぼ同じ、粘性あり、しまりややあり
40. 橙色～明褐色ローム土、粘性ややあり、しまりやや甘い
41. 5(－7.5 少)YR4/3 粘質シルト＋ロームまじり 1－2%、粘性あり、しまりやや甘い
42. 7.5（－5 少）YR4/3 粘質土＋明褐色ローム土 3－5%、粘性あり、しまりやや甘い（～ややあり）
43. 7.5YR(3/3－)4/3 粘質シルト＋明褐 (～橙) 色ローム土 20 ミリ以下 15－20%、粘性（やや）あり、しまりあり～やや甘い
44. 明褐～橙色ローム土 50%＋7.5YR4/3－4/4 粘質シルト 40%＋7.5YR3/3 粘質土 10% 以下、粘性あり（～ややあり）、しまりやや甘い～甘い
45. (5－）7.5YR4/3 粘質シルト＋明褐（～橙）色ローム土 15 ミリ以下 10%、粘性（やや）あり、しまりやや甘い
46. 7.5YR3/4（－4/4）粘質シルト＋橙色（～明赤褐色）ロームブロック 15 ミリ以下 10%＋暗褐色シルト少量、粘性（やや）あり、しまりややあり（土壌サンプル）
47. 7.5YR3/3（－4/3）粘質シルト＋明褐（～橙）色ローム土 25 ミリ以下 10%、粘性ややあり、しまりややあり～やや甘い
48. 7.5YR2/3－3/3 粘質シルト＋明褐（～橙）色ローム土 30 ミリ以下 10%＋浅黄～浅黄橙色ローム土 15 ミリ以下 3%、粘性あり、しまりややあり
49. 5YR3/3－7.5YR4/3 粘質土、明褐（～橙）色ローム土 10%、粘性あり，しまりややあり
50. 38 層に近いが、7.5YR4/3－3/3 粘質シルト主体＋ローム土 25 ミリ以下 20－30%（38 層より少）
51. 5（－7.5）YR4/3＋5YR 明赤褐色ローム土 30 ミリ以下 10－15%

Fig.7 右上 SE006 最下層土層 (（「下１」層以下）＝Fig.８右下土層

下 1. 明褐色ローム崩れ土（一部暗褐色土汚れ 5%）＋砂利 15－50 ミリ小礫混入多量＋土器小片含む
下 2. 八女粘土（明黄褐～浅黄色粘土）＋15－50 ミリ小礫混入
下 3. 2 層とほぼ同じ
下 4. 2・3 層に近いが砂利少ない、褐色土含む、八女粘土＋褐色土＋砂利、しまりやや甘い
下 5. 八女粘土崩れ、砂利少し、しまりやや甘い
下 6. 黒褐色（極暗褐色）有機質土＋明褐色ローム土ブロック 25%、しまりやや甘い～甘い
下 7. 明褐色（～にぶい橙色）ローム土＋うすい暗褐色土（～にぶい褐色土）、しまりあり
下 8A・下 8B. 7 層が入り上下で分離するがほぼ同じ土層、暗褐色シルト＋明褐～褐色ロームブロック 30%、しまりややあり～やや甘い
9. 7 層より暗く 8 層より明るい、暗褐色～にぶい褐色土＋にぶい明赤褐土ローム 20%、しまりややあり～やや甘い
10. 9 層＋明黄色～（にぶい）浅黄橙色八女粘土、しまりやや甘い
11. トスローム下部 / 八女粘土漸移層、明赤褐色粘土崩落土（下部に掘方底面）、しまりあり
12. 黒褐色（～極暗褐色土）有機質土＋明褐色・黄色ローム粒、しまり甘い

と、8 次東側 SD01 と 69 次西側にまたがるⅣ期新相～Ⅶ期（奈良時代初頭）までの溝がある。いずれもほぼ真南北方位で平行している。8 次 SD01 には初期瓦も出土する。この両溝は南北に延びて「道路」状となる可能性があるが、156 次では撹乱や谷部造成落込み部分のためおそらく遺存せず、検出できなかった。8・69 次の南側の谷部を挟んだ 86 次では、弥生中期後半から後期末までの竪穴建物などの集落遺構がある。弥生終末期で遺構群が一時途絶えるのは、この南側にある那珂八幡古墳の築造と関係があろう。那珂八幡「古墳」は終末期新相（ＩＢ期）の築造と考えられ（久住 1999・2017）、築造期に周囲の居住域が一時廃絶し、移動している状況がうかがえる。また 58 次では、弥生中期中頃（須玖Ｉ式新相）～後期前葉の土器が北側の「谷部」に落ち込む包含層から出土する。この状況からは「谷部」は弥生時代にもあったともいえるが、この地点での傾斜は緩やかであり、急に落ち込む箇所は後世の造成が考えられよう。156 次の東側の「谷部」を挟んだ地区は、これまで調査が少なかったが、近年調査事例が多くなりその様相が判明してきた。67 次では弥生前期中頃（板付Ⅱａ式）掘削の平面楕円形の環壕（Ｖ字溝）があり、この環壕が機能する前期末までにかけて環濠の内外に貯蔵穴群がある。環壕が埋没した以降の弥生中期からは、土壙墓・甕棺墓群が展開する。甕棺墓はＫⅢａ式とそれに対応する須玖Ⅱ式古相の小児棺からＫⅢｃ式とそれに対応する内湾「く」字口縁の中型棺（報告ではＫⅣａ式とするが中期末）までがある（「丸みをもつ甕棺」ST-21 はＫⅢｃ式ではなく小児棺 ST-31 に切られていることからも型式学的にＫⅢａ式段階である）。土壙墓は切りあいから甕棺墓群に先行するものもあるが、一部は後期初頭以降の「足元掘込土壙墓」と考えられ（「甕棺が抜かれた」とする ST-71 および SR-59、SR-28、SR-46）、型式学的に後期中頃までがある（SR-51）。墓地群の展開後の古墳初頭に竪穴建物がある。67 次の北側、156 次の東側の 153・154 次では、中期後半頃に掘削された大溝（条壕）がある。上面幅は 4.0 ～ 4.2 m、深さ 2.4 m と大規模で、深さ 1.6 m までは逆台形の箱掘、中央下部はさらに細い逆台形

をなすという特異な形状をなす。153 次では大溝の北側肩部に柱穴列（柵列）があり、北側を囲む防御的な「環壕」であった可能性が高い。溝は掘削後しばらく維持されたようで、下層の出土遺物は少なく、中層に後期後半～古墳初頭の土器溜層ができている（ⅡA期の土器相は在来系主体で比恵・那珂では後進的な土器相である）。完全埋没は上層の土器から飛鳥時代に下る。153・154 次では弥生後期初頭の井戸を除き、大溝の機能した中期後半～古墳初頭に併行する遺構が不明確であるが、古墳後期末（ⅢB期）～飛鳥時代前半（Ⅳ期）の竪穴建物群がある（Ⅳ期以降を「古墳後期」とする記述が多いが不適切である）。おそらくこの時期に造成され削平が進んだとみられる。154 次 4 区 SC041（Ⅳ -2 期）からは、滑石製玉製作に関わる遺物が出土している。142 次は弥生後期初頭の井戸と、中期後半～後期前葉および古墳初頭～前期前葉（ⅡA期～ⅡB期；久住 2017）の遺構と遺物がある。細かい時期は不明だが、土壙墓 SK25 は半島系碧玉の管玉であり、弥生後期～古墳前期だろう。90 次は未報告だが、弥生後期～終末期の竪穴建物や井戸とⅢB期ないしⅣ期の竪穴建物がある。151・152 次は、弥生中期後半と後期（？）、古墳後期末～飛鳥時代前期（ⅢB期～Ⅳ期）の竪穴建物群があり、151 次 1 区・152 次 1 区には古墳周溝とみられる弧状溝がある。151 次 1 区・152 次 1 区の SD-003 は須恵器の一群から古墳後期中葉（ⅢA期）で、滑石製臼玉多数と土製模造鏡が廃棄されていた。祭祀とみられ、小古墳の周溝だろう。この溝を切る SD004 はⅢA期新相の須恵器坏身がある（「6 世紀前半」との報告は誤り）。これも小古墳の周溝だろう。その他、SK054 は弥生中期後半の土壙墓、SK011 は貯蔵穴ではなく削平された弥生後期初頭～前葉の足元掘込土壙墓だろう。この地区の北側では 66 次と 135 次の調査がある（66 次報告＝市報告第 841 集にある 66 次調査区の位置は誤りで、Fig.2 が正しい）。66 次は弥生終末のベッド付竪穴建物と古墳後期中葉～飛鳥時代前期（ⅢA期～Ⅳ期前半）の溝や土坑がある。竪穴建物 SC10 は古墳後期と報告されるが、古墳後期～飛鳥前期の溝群との重複関係に矛盾があり（SD18 は SC10 を切り、SD35 などは竪穴肩部を「破壊」しているとするが、調査区壁面写真を見るとこの延長が SC10 を切っていた可能性が高い）、須恵器は重複する溝に帰属し、実際の時期は弥生終末期だろう。135 次は、上面で古墳中期後半～末（TK23）の柱穴群や古墳後期中葉～末（ⅢA期～ⅢB期）の竪穴建物群などがあり、これらの間や下部から弥生後期～古墳前期前半の遺構が検出された。このうち SB018 は 18 m以上の柱列があり、柱穴規模が小さいので、建物ではなく柵列による方形区画だろう。後期後半～終末期の集落の重要施設が調査区周囲に広がる可能性がある。遺構密度も高く、この周囲は今後の調査において注意を要する地区である。

Ⅱ．調査の記録

1．調査の概要と基本土層

那珂 156 次調査地点は、那珂遺跡群中央北部に位置し（Fig.1）、調査地の道路を挟んだ南側では 8 次、24 次、69 次の調査がなされており、弥生時代から古墳時代前期、飛鳥時代から奈良時代、中世の各時期の遺構が多く分布することが知られていた（Fig.2・3）。調査地は、アサヒビール博多工場敷地の道路に面した南東隅であったが（Fig.4）、下水道施設（発進竪坑）建設工事のため福岡市道路下水

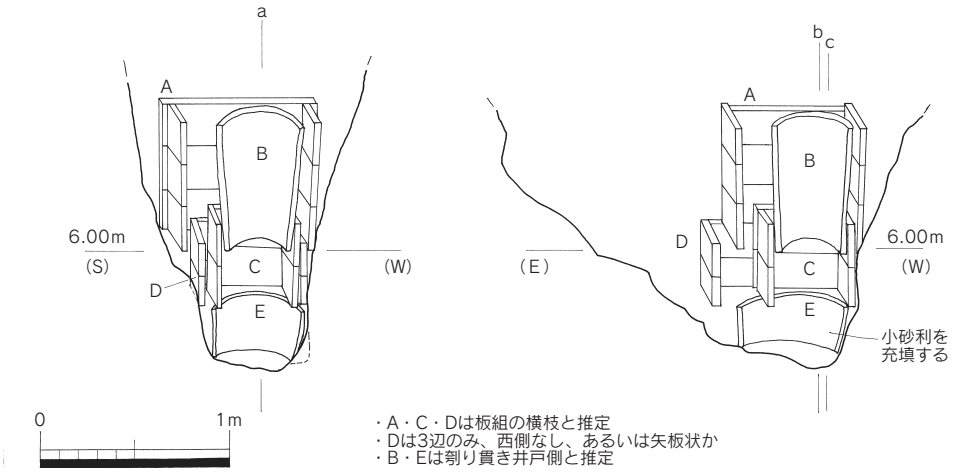
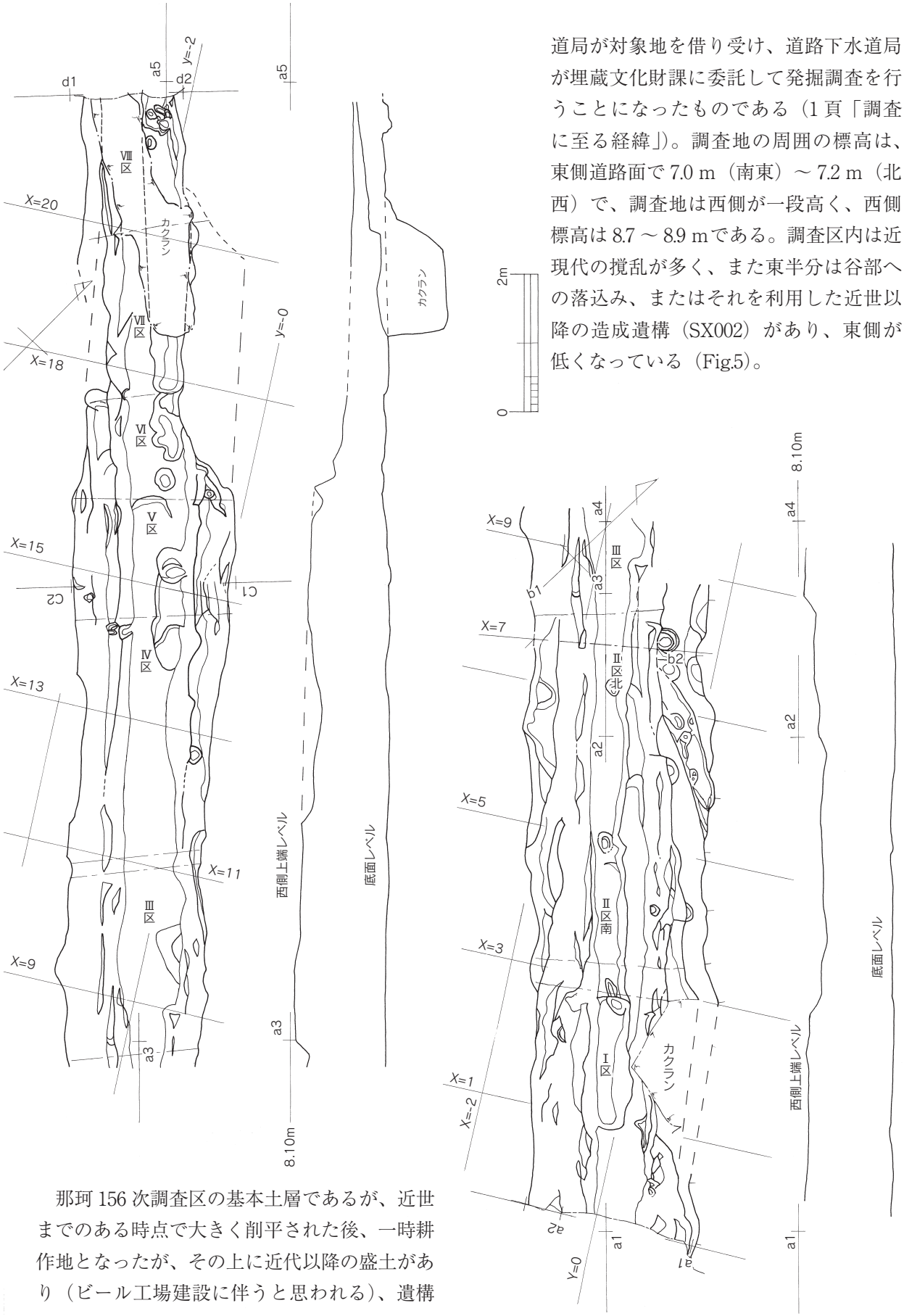


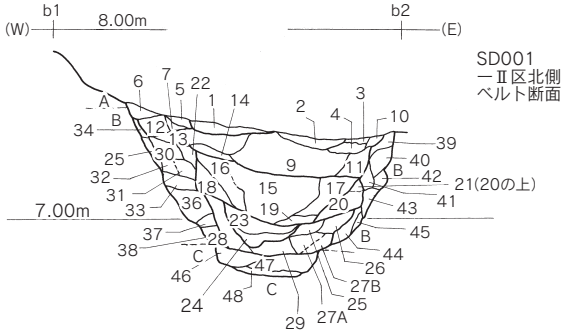
Fig. 9　　SE006井戸構造想定復元模式図（S=1/40）

道局が対象地を借り受け、道路下水道局が埋蔵文化財課に委託して発掘調査を行うことになったものである（1頁「調査に至る経緯」）。調査地の周囲の標高は、東側道路面で7.0 m（南東）～7.2 m（北西）で、調査地は西側が一段高く、西側標高は8.7～8.9 mである。調査区内は近現代の撹乱が多く、また東半分は谷部への落込み、またはそれを利用した近世以降の造成遺構（SX002）があり、東側が低くなっている（Fig.5）。



那珂156次調査区の基本土層であるが、近世までのある時点で大きく削平された後、一時耕作地となったが、その上に近代以降の盛土があり（ビール工場建設に伴うと思われる）、遺構

Fig.10　SD001平面図・縦断面図（S=1/100）



SD001-Ⅱ区北側ベルト土層

1 ～ 14.　上層

1. 7.5YR4/4 シルト＋7.5YR3/4－4/3 シルト 10%＋ローム土粒子ごくわずか、しまりやや甘い
2. 7.5YR4/4(－4/6) シルト、1 より明るい、ローム土粒子ごくわずか、炭粒・黒色有機物粒 3 ミリ以下 1%
3. 7.5YR4/4 ～ 4/6（4/4＜4/6）シルト＋5YR4/6 シルト＋5YR4/6－5/6 ローム土粘質土 40%、しまりややあり（～やや甘い）
4. 7.5YR3/4－4/4 粘質土＋ローム土明赤褐色粒子 4 ミリ以下 3%、しまりあり
5. 7.5YR3/4(－4/4) やや粘質シルト＋橙色ローム土粒子 3%、しまりややあり～やや甘い
6. 7.5YR4/3－3/4 シルト＋明褐～橙色ローム土 3 ミリ以下 5%、しまりやや甘い
7. 7.5YR3/4(－4/4) 粘質シルト＋橙～明褐色ローム土 10 ミリ以下 7%、しまりややあり
8. 7.5YR3/4－4/3(・4/4 少) やや粘質シルト＋ローム土粒子 1%、炭粒わずか、土器片わずか、しまりややあり
9. 7.5YR3/4－4/4(4/3＜4/4) やや粘質シルトローム土粒子 1%、炭粒わずか、土器細片ごくわずか、しまりありややかたい
10. 5YR4/4 シルト＋5YR5/6 粘質ローム土 50%、しまりやや甘い (～甘い)
11. (5－) 7.5YR4/4(9 層よりは赤い)(－4/6 少) やや粘質シルト＋明褐色ローム土粒 3 ミリ以下 2%、炭粒わずか、しまりややあり
12. 5YR3/4－4/4 やや粘質シルト＋5YR5/6 ローム土 10 ミリ以下 15%、しまりややあり～やや甘い
13. 7.5(－5)YR(3/4－)4/4 やや粘質シルト (8 層より赤い、少し明るい)＋明赤褐色ローム土 7 ミリ以下 10%、 しまりやや甘い～甘い
14. 5(－7.5)YR4/4 粘質シルト＋ローム土粒子 2%、しまりややあり、

15 ～ 22.　中層

15. 7.5YR4/4 粘質シルト＋明褐色ローム土粒子 2-3%＋8 ミリ角炭粒あり炭粒わずか (1%)、しまりあり、
16. 7.5YR4/4（－3/4 少）(やや) 粘質シルト＋ローム土粒子 3(－5)%、炭粒ごくわずか、しまりあり～ややあり
17. (5－)7.5YR4/4 粘質シルト＋橙色～明褐色 3 ミリ以下ローム土粒子 3－5%（＋ α)、土器小片わずか、しまりあり
18. 7.5YR4/4(＞3/4 少)、やや粘質シルト、ローム土粒子 1－2%、しまりややあり～やや甘い
19. (5－) 7.5YR4/4 粘質シルト＋明褐～橙色ローム土 5 ミリ以下 5－7%、しまりあり～ややあり、21 層よりやや暗い (－7.5YR3/4)
20. 21 層＋明褐～橙色ローム土 5 ミリ以下 7－10%、しまりやや甘い
21. 7.5(－5)YR4/4、やや粘質シルト＋、明赤褐～明褐色ローム土 7 ミリ以下 5%、しまりややあり～ (やや甘い)
22. 7.5YR4/4（－3/4 わずか) やや粘質シルト＋明赤褐色ローム土 10 ミリ以下 10%、しまりやや甘い～甘い

23 ～ 29.　下層

23. 7.5YR3/4－4/4 粘質シルト＋橙色ローム土粒子 (4 ミリ以下）2－3%、炭粒わずかに含む、しまりあり
24. 7.5YR－5YR4/3－4/4、粘質シルト、しまりあり、鉄分沈殿粒、 ローム土明褐色粒子 1－2%
25. 7.5YR4/4（－4/6）少し明るい粘質シルト＋明赤褐～明褐色ローム土 3 ミリ以下（3－）5%、しまりややあり
26. 7.5YR4/4（－3/4）やや粘質シルト＋明赤褐～橙色ローム土粒子 3 ミリ以下 2－3%、しまりややあり

27A. 27B 層よりやや暗い、7.5YR4/4（－3/4）やや粘質シルト＋ローム土粒子わずか (1% 未満)、しまりややあり～やや甘い

27B. 27A 層よりやや明るい、(5－) 7.5YR4/4 粘質シルト＋橙色ローム土粒子 3 ミリ以下 2%、しまりややあり～やや甘い

28. (5－)7.5YR4/4（－3/4 少）やや粘質シルト＋明赤褐～明褐色ローム土粒子 2%、しまりややあり
29. 24 層主体に 28 層混じる粘質シルト、しまりあり～ややあり

30 ～ 38.　西壁際層（下層；23 ～ 29 層以前）

30. 7.5YR4/6(－5YR4/6) ローム 土 汚 れ 土＋7.5YR4/4、やや粘質シルト 20%、しまりややあり (30/35 層間 7.5YR3/4－4/4 シルト主体層あり)
31. 7.5YR4/4－3/4＋明褐色ローム土 10 ミリ以下 7－10%、しまりやや甘い
32. 7.5YR4/4(－3/4 少) やや粘質シルト＋明褐色ローム土 20 ミリ以下 15%、しまりやや甘い
33. 7.5YR4/4(－3/4) やや粘質シルト＋明赤褐色ローム土 20 ミリ以下 10－15%、しまりややあり～やや甘い
34. 7.5YR(－5YR)4/4（－3/4 少）粘質シルト)＋明赤褐色ローム土 10 ミリ以下 20%、しまり甘い
35. 5(－7.5)YR5/6 ローム粘質土＋7.5YR4/4－4/6 粘質土しみ状 20%、しまりややあり
36. (5－)7.5YR4/4 シルト 40%＋ α ＋5－7.5YR5/6 ロームやや粘質土 30(＋ α)%＋5YR4/6 ロームやや粘質土 25(＋ α)%（ローム土粘質土計 50%)、しまりやや甘い、粘性少し
37. (5－)7.5YR4/4－4/6(少し粘質) シルト＋明赤褐色ローム土粒子 5%、しまりやや甘い
38. 5YR4/4－7.5YR4/6 シルト (ローム土汚れ)＋5YR5/6 明赤褐色ローム土 15 ミリ以下 10%

39 ～ 45.　東壁際層（下層：23 ～ 29 層以前）

39. 7.5YR（3/4－）4/4 やや粘質シルト＋明褐～明赤褐色ローム土 10 ミリ以下 7%、しまり甘い～やや甘い
40. 7.5YR－5YR(3/4－)4/4（39 層より赤い）粘質シルト＋明赤褐～橙色ローム土 7 ミリ以下 10%、しまりややあり～やや甘い
41. 5－7.5YR4/6－5/6 ローム粘質土＋7.5YR4/4 粘質シルト 25%、しまりあり
42. (5－)7.5YR4/4(－4/6) 粘質シルト（5YR 少）＋橙色ローム土 4 ミリ以下 3%、しまりやや甘い (～ややあり)
43. 7.5YR4/4 やや粘質シルト＋明褐～橙色ローム土 5 ミリ以下 5%、しまりやや甘い
44. 5YR－7.5YR4/4 やや粘質シルト＋明赤褐色ローム土 10 ミリ以下 7－10%、しまりややあり (～やや甘い)
45. 5YR4/4 やや粘質シルト＋明赤褐色ローム土 7 ミリ以下 20%、しまりややあり

46 ～ 48.　最下層

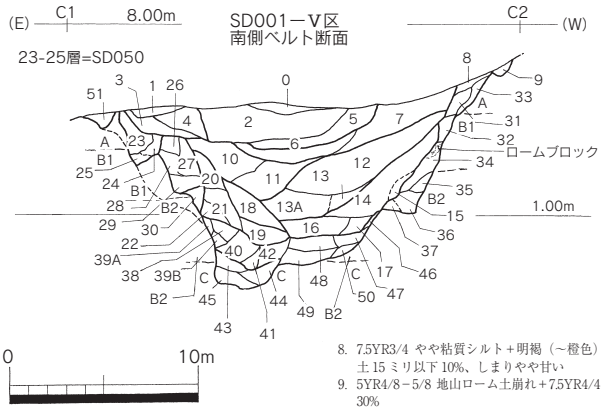
46. 5YR(－7.5YR)4/4（やや粘質）シルト＋(明) 赤褐色ローム土（5YR4/6－5/6）30 ミリ以下 5(－7)%、しまりやや甘い～ややあり、
47. 5（－7.5）YR4/4 粘質シルト (7.5YR4 少)＋(明) 赤褐色ローム土 10 ミリ以下 2%、炭粒ごくわずか、しまりややあり、
48. 5YR4/4(やや) 粘質シルト＋(明) 赤褐色ローム土 20 ミリ以下 10－15%、しまりやや甘い

A ～ C.　地山トスローム土

A. 5YR5/6－4/6(やや褐色) やや粘質ローム土、乾くとパサパサになる

B. 5YR5/6 前後粘質ローム土 (乾いても粘質)

C. 5YR4/6(－5/6) シルト気味粘質ローム＋5YR6/6－7/6 ローム土 20%＋黒色パミス 2－3%、しまりあり



SD001-Ⅴ区南側ベルト土層

1. 7.5YR3/4 やや粘質シルト、橙色ローム土 5 ミリ以下 3% しまりややあり～やや甘い
2. 7.5YR3/4(－4/3) やや粘質シルト＋ローム土粒子わずか＋炭粒ごくわずか、しまりあり～ややあり
3. 5 層に近い、7.5YR3/4－4/4(やや粘質)シルト＋(明) 赤褐色ローム土 10 ミリ以下 3(－5)%、しまりややあり
4. 7.5YR4/3 やや粘質シルト＋橙色ローム土粒子 3 ミリ以下 1－2%、しまりあり
5. 7.5YR4/4（－3/4）シルト＋(明) 赤褐色ローム土 15 ミリ以下 5－7%、小礫ごくわずか、しまりややあり
6. 7.5YR4/4 やや粘質シルト (1 層よりやや粘質)＋ローム土粒子 5 ミリ以下 1% (わずか)、炭粒ごくわずか、しまりややあり
7. 7.5YR3/4(－4/4) シルト＋7.5YR4/3－5/3 粘質シルト 25% 前後＋ローム土 7 ミリ以下 2%、小礫 (20 ミリ) ごくわずか、 しまりあり、粘性ややあり
8. 7.5YR3/4 やや粘質シルト＋明褐（～橙色）ローム土 15 ミリ以下 10%、しまりやや甘い
9. 5YR4/8－5/8 地山ローム土崩れ＋7.5YR4/4 シルト 30%
10. 7.5YR4/4 粘質シルト＋12 ミリ以下明褐色 (～明赤褐色) ローム土 3%、炭粒ごくわずか、土器小片ごくわずか、しまりややあり
11. 7.5YR4/3－4/4 粘質シルト、しまりややあり、12 層より暗い
12. 7.5YR3/4－4/4(やや粘質) シルト (11 層より明るい)＋ローム土粒子 1－2%＋小砂礫 5 ミリ以下ごくわずか、しまりややあり～あり、粘性少し、

13A. 7.5YR4/4 粘質シルト、しまりややあり～あり、ローム土粒子 2%

13B. 7.5YR4/3(－4/4) やや粘質シルト (13A 層より少し暗い)、炭粒わずか、ローム土粒子ごくわずか、しまり (あり～) ややあり

14. 7.5YR（4/4－）4/6(少し粘質) シルト＋ローム土粒子・小ブロック 7 ミリ以下 3%、しまりあり、12 層より明るく赤い
15. 7.5YR4/4－4/6 やや粘質シルト＋ローム土 10 ミリ以下 (橙色)5%、しまりややあり～やや甘い
16. (5－)7.5YR4/4 粘質シルト、ローム土粒子わずか、炭粒ごくわずか、しまりあり
17. (5－) 7.5YR4/4 粘質シルト（5YR 少）＋ローム土 5 ミリ以下 3－5%、しまりあり～ややあり
18. 7.5YR4/6（－4/4）やや粘質褐色 (やや明るい褐色) シルト＋明赤褐～橙色ローム土 5 ミリ以下 3%、小砂礫 3 ミリ以下ごくわずか、しまりあり
19. 7.5YR4/4 やや粘質シルト＋ローム土粒子 5 ミリ以下 1－2%、 小砂礫 3 ミリ以下ごくわずか、しまりあり、
20. 7.5YR4/4（－4/6 少）(やや) 粘質シルト＋明褐～橙色ローム土粒子 2－3%、しまりあり～ややあり
21. 7.5YR4/6（≧4/4）やや粘質シルト＋ローム土明褐色 15 ミリ以下 3%、20 層より明るい、しまりあり、やや粘性あり
22. 7.5YR3/4－4/4 やや粘質シルト＋ローム土粒子 5 ミリ以下 5－7%、21 層より暗い、しまりややあり～やや甘い、 やや粘性あり
23. 7.5YR4/4－4/6 粘質シルト＋5YR5/6－6/6 明赤褐～橙色ローム土粘質土 30%、しまりあり、粘性あり
24. 7.5YR4/4（－3/4）粘質シルト＋5YR5/6－6/6 ローム土 10 ミリ以下 10－15%、炭粒わずか、しまりややあり
25. 7.5YR4/4 粘質シルト＋7.5－5YR6/6 ローム土斑状 25－30%、しまりややあり～やや甘い
26. 27 層＋ローム土ブロック (28 層)15%、しまりややあり、27 層より一部やや暗い

27.5－7.5YR4/3 やや粘質シルト＋5 ミリ以下橙色ローム土 3－5%、しまりややあり（～やや甘い）

28. 7.5YR4/4(－4/3 少)（やや）粘質シルト＋橙～明褐色ローム土 5 ミリ以下 3%、しまりややあり
29. 7.5YR4/6 やや粘質シルト＋7.5YR5/6 ローム粘質土斑状 15 ミリ以下 25%＋7.5YR4/4 やや粘質シルト斑状 10%、しまりややあり～やや甘い
30. 7.5YR5/6(－4/6) ローム土粘質土＋7.5YR4/4 粘質シルト土 15%、粘性あり、しまりあり
31. 7.5YR4/3(－4/4 少) やや粘質シルト＋5YR5/6 前後ローム土 20 ミリ以下 20%、しまりやや甘い
32. 7.5YR4/3－4/4(少し粘質) シルト＋7.5YR5/6 ローム土 20 ミリ以下 10－15%、しまりやや甘い～ややあり
33. 7.5YR4/3－4/4 やや粘質シルト＋5－7.5YR5/6－6/6 ローム土ブロック 30 ミリ以下 25%、しまりやや甘い
34. 7.5YR4/6(－4/4 少) やや粘質シルト＋5YR5/6 前後ローム土ブロック 50 ミリ以下 30%、(ローム土ブロック上半に多い＝上半 50% 下部 15%)、しまりやや甘い (～甘い)
35. 7.5YR4/4(－3/4 少) やや粘質シルト＋5－7.5YR6/6(－5/6) ローム土 10 ミリ以下 7－10%、しまりやや甘い
36. 7.5YR4/6(－4/4 少) 粘質シルト＋5YR5/6－6/6 ローム土 5 ミリ以下 5%、しまりやや甘い
37. 7.5YR4/4(－4/6 少) 粘質シルト＋5YR5/6 ローム土 15 ミリ以下 20%(多)、しまりややあり (～やや甘い)
38. (5－)7.5YR4/4(やや粘質) シルト＋明赤褐色ローム土粒子 2%、 しまりややあり (～やや甘い)

39A. 39B 層＋橙色ローム土ブロック 25 ミリ以下 30%、(多)、しまりややあり～やや甘い

39B. (5－)7.5YR4/4 やや粘質シルト＋明褐色ローム土粒子 3%、しまりややあり～あり

40. 5－7.5YR4/4（－3/4 少）＋明赤褐色ローム土粒子 4 ミリ以下 3－5%、炭粒ごくわずか、しまりややあり、粘性ややあり
41. (5－) 7.5YR4/4(やや粘質) シルト (5YR 少)＋明赤褐色ローム土粒子 2－3%、しまりやや甘い
42. 7.5YR4/4－5/4 粘質シルト＋明赤褐～(明) 橙色 (B 2－C) ローム土 5 ミリ以下 7%、しまりあり（ややかたい）
43. 5（－7.5）YR4/4 粘質シルト (7.5YR 少)＋明赤褐～明褐色ローム土 10 ミリ以下 5%
44. (5－) 7.5YR4/4（－4/3）粘質シルト（5YR 少）＋明赤褐色ローム土 5 ミリ以下 7－10%、しまりややあり～やや甘い

(45 層以下、27 頁上部「表２」に続きあり)

Fig.11　　SD001土層断面図（S=1/40）

検出は段丘上部を形成する地山（鳥栖ローム）上面となっている（Fig.6)。遺構が比較的遺存している調査区西半分中央から南側では、GL － 60 ～ 70cm で遺構を検出している。検出遺構は、飛鳥時代前半期の竪穴住居・柱穴・掘立柱建物・区画溝・井戸のほか、中世の溝・柱穴、弥生時代の柱穴および削平された竪穴住居の可能性があるもの、中世末期（戦国時代）～近世前期の壕（堀)、谷部を利用した近世以降の造成遺構（道路切り

SD001-Ⅴ区南側ベルト土層注記続き

45. 7.5YR4/4 粘質シルト(主体)+7.5YR4/6 粘質シルト 10%+明赤褐色ローム土 20 ミリ以下 10%+橙～明橙色ローム土 30 ミリ以下 15%、粘性ややあり、しまりあり～ややあり
46. 7.5YR4/4 シルト+5(−7.5)YR6/6 ローム土ブロック 40%、しまりやや甘い、粘性少し
47. 7.5YR4/4(−3/4 少)粘質シルト+橙色ローム土 5 ミリ以下 2−3%、炭粒わずか、しまりややあり
48. 7.5YR5/4（−4/4 少）やや粘質シルト+7.5YR4/6 粘質シルト斑状 15%+橙色ローム土粒子・明赤褐色ローム土ブロック 10 ミリ以下 3−5%、しまりあり
49. 48 層に近い、7.5YR4/4（−5/4 少）やや粘質シルト+7.5YR4/6 粘質シルト 5%+明赤褐～橙色ローム土 5 ミリ以下 5−7%、しまりあり～ややあり
50. 49 層+ローム土やや多、7.5YR4/4−4/6 粘質シルト+明赤褐色～明褐色ローム土 10 ミリ以下 20%、しまりやや甘い
51. 7.5YR4/4 シルト+明赤褐色ローム土 10 ミリ以下 10%、小砂礫わずかに含む、しまりあり

地山（A−B−Cすべて漸移的に移行）
A. 5YR4/6−5/6 粘質シルト化ローム土、しまりあり、粘性あり、シルト気味
B1. 5YR5/6(−6/6・5/8) ローム粘質土、しまりあり(やや強)、粘性あり、(やや強)
B2.5YR5/6 粘質シルト化ローム土、しまりあり（～ややあり）
C. 5YR5/6(−6/6 少一部)粘性弱いローム土+7.5YR5/6 ブロック斑状、しまりあり、粘質やや弱くなる、黒色(極暗褐色)バミス化、均質でない、ザラザラしている

通しないし水路？）の落込みとその側溝群である。戦国時代の堀は南側調査の 24 次・69 次地点からの延長である。弥生時代の遺構は少なかったが、弥生土器片および古墳時代初頭の土器片が後世の遺構に混入して比較的多く出土しており、本地点にも本来は当該期の遺構群が多く分布していたものが削平された可能性が高い。

出土遺物は、弥生土器、古墳時代後期～奈良時代の土師器・須恵器、中世の土師器・陶磁器、近世～近代の陶磁器、各時代の石器・石製品、近世の鉄製品（遺存状況が悪く現場で崩壊した）などである。出土量はコンテナケース計 10 箱である。その他、弥生時代の青銅器鋳造に関わるスラグの可能性があるものも出土した。

調査に先立って、道路下水道局が工事を委託した工事業者により工場敷地のフェンスの撤去および移動と樹木除去が行われ、引き続き

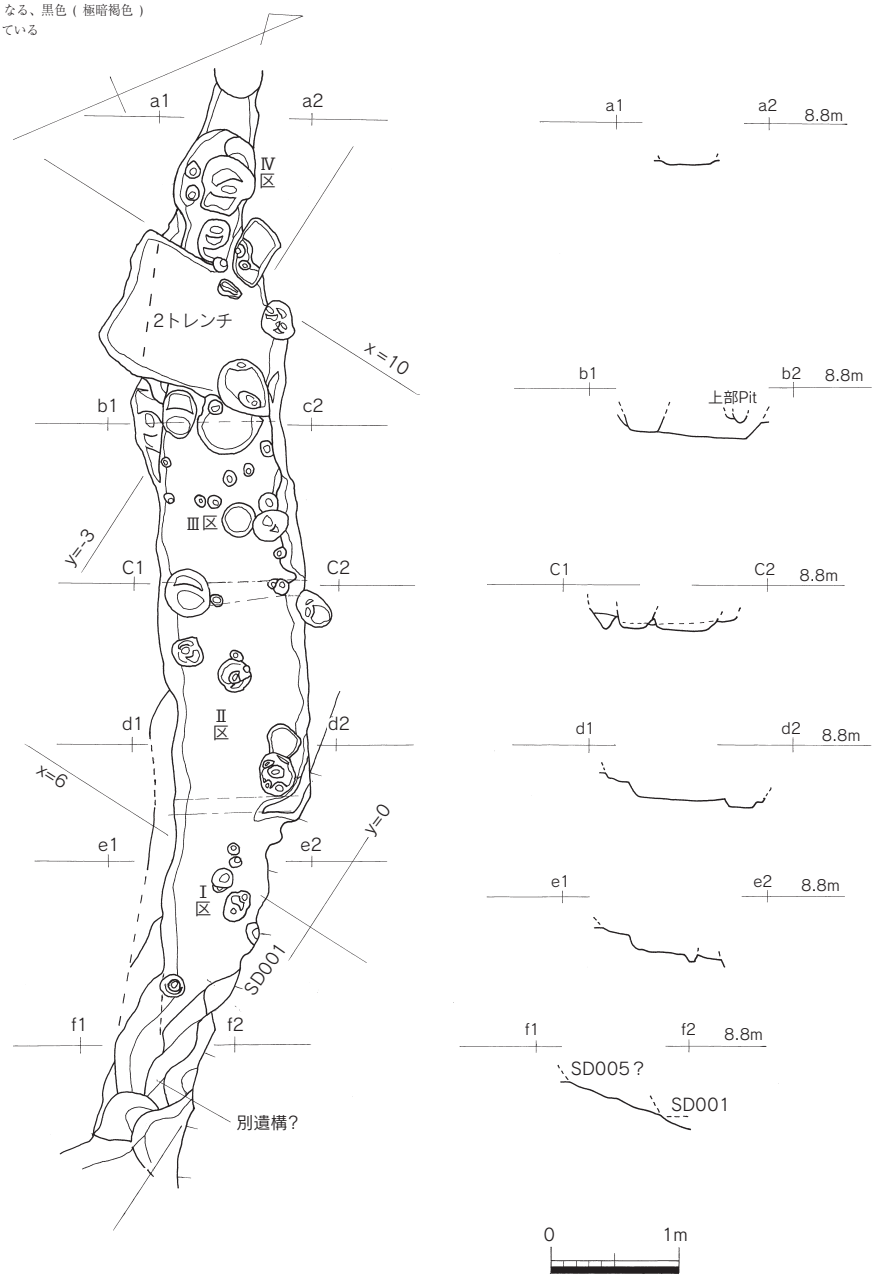


Fig.12　SD005実測図（S=1/60）

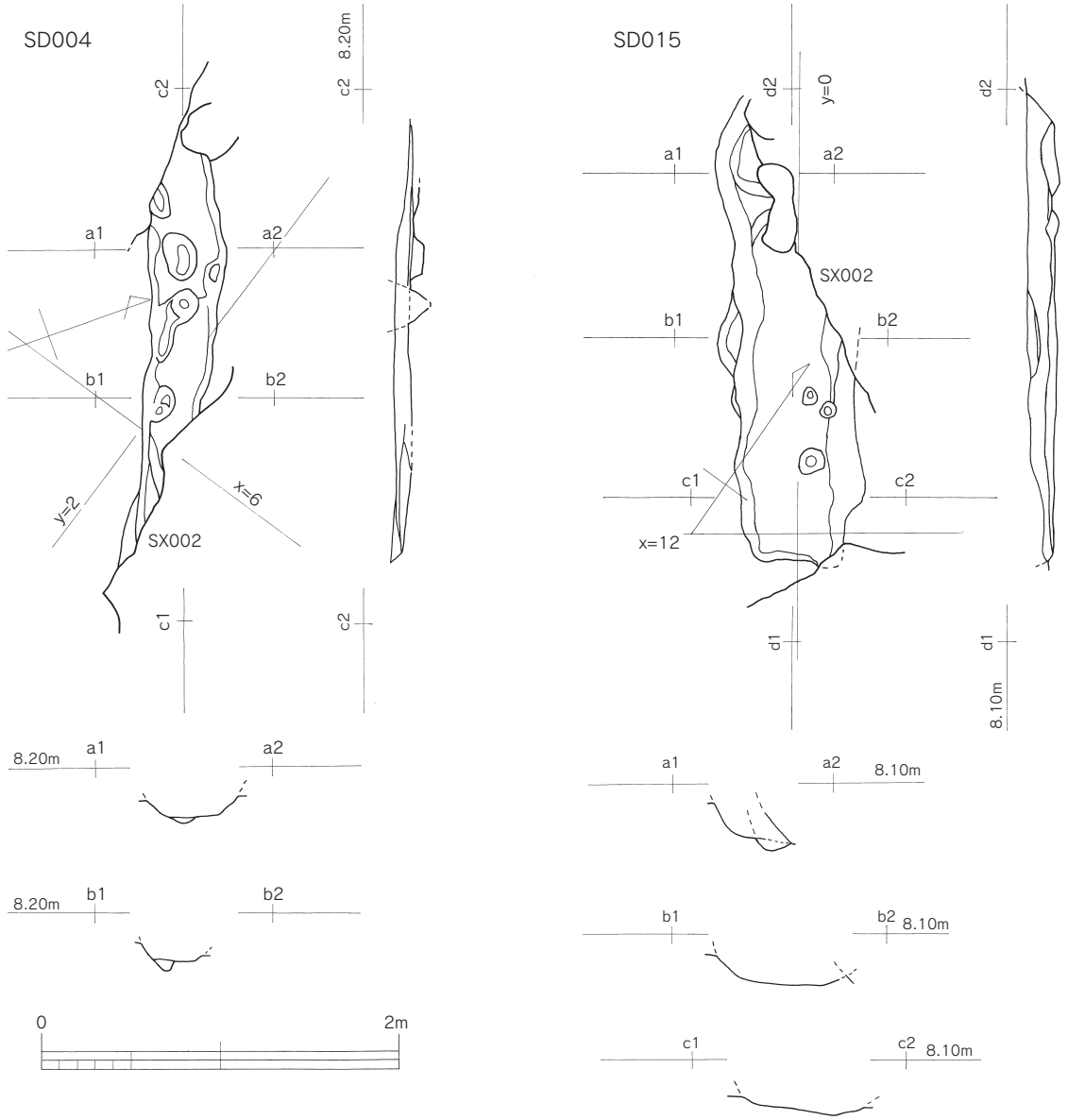


Fig.13　　SD004・SD015実測図（S=1/40）

４月16日から22日にかけて、埋蔵文化財調査課の立会のもと、埋蔵文化財調査面までの表土鋤取り工事と廃土の場外搬出が行われた。５月１日より埋蔵文化財調査課による発掘調査を開始した。当初、掘削不十分箇所の掘削や掘削法面の整備などについて、発掘調査の重機掘削に熟練した業者の重機を稼動した。以後の調査中廃土は調査範囲内処理のため、先に南側を主体に調査し（Ⅰ区）、調査範囲の北部は後に再度掘削して調査を行った（Ⅱ区）。各区の調査期間は、Ⅰ区が平成27年５月１日～７月５日、７月６日に重機による反転掘削を行い、Ⅱ区が７月６日～７月31日であるが、Ⅰ区のうち東側落込み（造成遺構）部分は調査が終了していなかったので、反転時に埋め戻さず７月末日まで調査を行った。７月15日には大方の作業が終了し、現場機材の大部分を撤収したが、一部の図面作成作業が残り、かつ工事業者が８月１日から現場入りのため、それまで現場管理を行う必要があり、７月末日まで調査を継続した。

２．検出遺構

（１）井戸（SE006；Fig. ７, ８、ＰＬ．３－1, ４, ５, ６－1, ９－5,10、表・裏表紙写真）

SE006 は調査区のほぼ中央で検出した。井戸は本来 SD001 に切られるが（Fig.4）、上面での検出径から深くなる可能性と掘削土量が多くなることを懸念し、SD001 の重複部分を早々に掘削して井戸の掘削を行ったので、全体図（Fig.5）や全体写真（ＰＬ．１－1, ２－1）では一見 SE006 が溝を切っているように見える。北東半分を SD001 に切られるため上部での径は推測になるが、南～西側で遺存した部分から推測すると、径 3.2 m前後の不整円形となる。遺存した南西部上部は浅い竪穴状テラスがるが内側は急角度で落ち込む。北東側上部は遺存しないが、北方向と北東方向にステップ状施設があり、これを考慮すると北東方向の上端はやや突出した、上面が不整形状だった可能性がある。この突出部が推定される北東方向と、井戸枠の方位がほぼ一致し、主軸はＮ－56.5°－Ｅとなる。中央底面は標高 5.35 m前後で、検出上面からの深さ 3.08 m前後だが、同時期の竪穴建物の削平度を考慮すると＋50cm 以上の深さが推測される。上層～中層では南西側に平瓶２個体の廃棄が見られたが（Fig.8 上、ＰＬ．３－2, ４－1, ９－5）、他は意図的な廃棄（祭祀行為など）が推測される遺物の出土はなかった。

SD001 底面レベル（以下を下層とする）までの観察では（SD001 南西側壁面での観察）、井戸側の落込み痕跡などは見られなかったが、SD001 底面レベルから少し下げた段階で、井戸側ないし井戸枠の落込みとみられる痕跡を検出した（標高 6.65 － 6.70 m前後、ＰＬ．４－2）。ここで調査方針を迷ったが、長軸方向で半裁して土層を観察することにした。結果的には、北半分の平面的構造の情報を捨てることになったので、厳密に言えば時間さえあれば「四分割」で裁断して土層を観察するのが最善だったかもしれない。いずれにしても、半裁して土層を観察しつつ上面も再度精査検出した結果、当初井戸側・枠落込みと考えた範囲よりも西側に狭まった範囲で、方形枠板状のものが外側にあり、その中にさらに円形ないし方形の落込みがある、ということが推定された。南西隅は、方形枠板の片方が外側（南側）に突出していただろうことも観察でき（同時にこの状況から横板の可能性が高いと判断した）、土層断面観察では、外側の推定方形枠板は、おそらく枠板の腐朽による周囲の土圧で上部が西側に傾いていることも推定された。さらにこれを上から掘り進める途中で、少し下げた段階で内側の落込みは方形状から円形状に変化したので（Fig.8 下部①）、おそらく方形枠板の内側の落込みは略円形の木製刳り抜き井戸側だろうと判断し、それに沿って掘削した（ＰＬ．５－3・4）。ところが、標高 6.15 m前後の精査では、円形筒状と推定していた刳り貫き井戸側痕跡の下部が狭まっており、かつその外側に別の方形枠板状の痕跡が観察された（Fig.8 下部②、ＰＬ．５－4・5）。ここから、半裁南側に残された覆土を枠板痕跡内側と外側の掘方充填土を分けて標高 6.00 m前後まで掘削した。この時点で、かなり深くなり下部が狭くなり作業しにくくなったこと、湧水し始め、底面まであまりないだろうと判断したので、以下を半裁せずに、井戸枠・側の落込みと思われる箇所を優先的に掘削した。これも結果的にはやや失敗で、以下も半裁していれば井戸構造について推測の少ないより正確で復元ができたと思われる。標高 6.0 m以下 5.6 m前後までの土層情報がないことになってしまった。実際、その標高 6.0 m前後の上下で、井戸枠・側構造が変わっていたらしいことが後で判明した。掘り進めると、井戸側下部中央に約 30 × 20㎝大の凝灰岩製石製品残欠が出土した（Fig.18 下部③、ＰＬ．５－6,7）。井戸廃絶時に大きな石を投棄するというのは民俗事例や他の発掘調査事例にもあるが（久世康博 2001）、祭祀行為であろう。この石を除去し下部を掘り下げると小礫混じりの覆土となった。土よりも小礫（砂利）がむしろ多かった。しかし当初それをあまり注意せずにそのまま掘り進めたので、小礫（砂利）層上面は正確には不明である。井戸下部の濾過装置などとしての「砂利層」として認識し、一度清掃した面で検出レベル（実際の上面は若干上部である）の記録を残したが（Fig.8 下部④）、個々の小礫については実測する余裕もなく、写真のみの記録で済ませている（裏表紙写真、ＰＬ．６－3～5）。こ

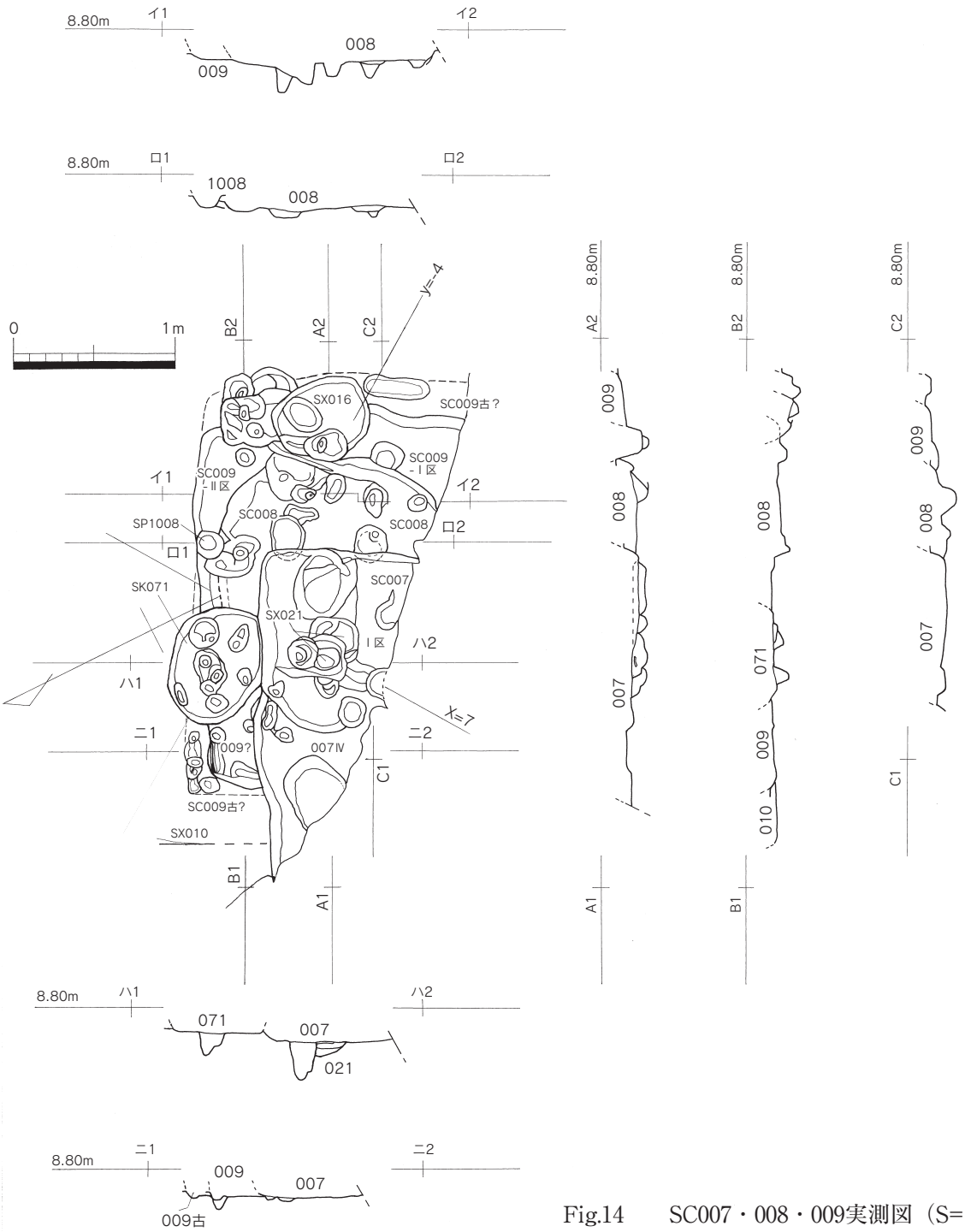


Fig.14　SC007・008・009実測図（S=1/40）

の段階で再度半裁し、土層を精査観察した（Fig.7 右上下部土層、Fig. 8 下部⑤⑥、ＰＬ．５－5,10－２）すると、東側に板痕跡があり（Fig.7 右上「下６層」）、またその下部に須恵器坏身（ＰＬ．10－1、Fig.8「土器３」）を挟んで「下 12 層」の木質痕跡があり、これは砂利層を除去すると井戸掘方最下部に円形に廻ることが確認された。したがって、井戸最下層には下層上部の刳り貫き井戸側とは別の（径が大きい）推定刳り貫き井戸側（曲物の可能性もあるが木質痕跡のみなので不明）があり、その上部に推定板組みの井戸枠があったと考えられる。また途中で土層を観察していない部分があるので推測が入るが、掘方下部南西側壁の状況と砂利層の落込み状況から、この間にもう一つ方形の枠板組があったと推測する。この**井戸構造の推定過程が Fig.7 の右側**であり、最終的な推定図が **Fig.9** である。複雑な構造となるが、少なくとも、上部に方形枠板組（A）と円形刳り貫き井戸側（B）があったこと、下

部に上とは別の径の大きな円形井戸側（推定刳り貫き；E）とその上部に別の方形枠板組（D）があったことは認められよう。また方形枠に隅柱痕跡はなかった。問題は、枠板Dの内部にさらにCの別の方形枠板組みを推定したことである。これについては掘方の状況と砂利層や石製品投棄の落込み状況からの推測で、また南西側上部は、下層上半半裁土層の有機質痕跡層がこの部分厚くなるので（11層下部）、板組が重複していたのではないかということである。この推定復元案の問題点は、Dの枠板組は三辺しかなく、周囲の補強でしかないということである。あるいは枠板組Cは存在せず、Cの西辺とした部分が枠板Dの西辺の可能性もある。また方形枠板が「横板」というのは、Aの精査過程から問題ないと思われるが、個々の板の高さと枚数（段数）については全く根拠がなく、板自体が残っていないので横板どうしの結合方法については全く分からない。上部と下部に井戸構造が分かれるので、一度井戸の廃棄祭祀（石製品投棄）をした後に、再度その上で井戸を作り直した、という可能性も考えられなくもないが、湧水層の八女粘土層は井戸側E（内部砂利充填）下部の壁面以下であり、それより上部は鳥栖ロームと八女粘土の漸移的層で、湧水は雨天時などにはあるが、安定的な湧水は望めず、井戸枠・側の再構

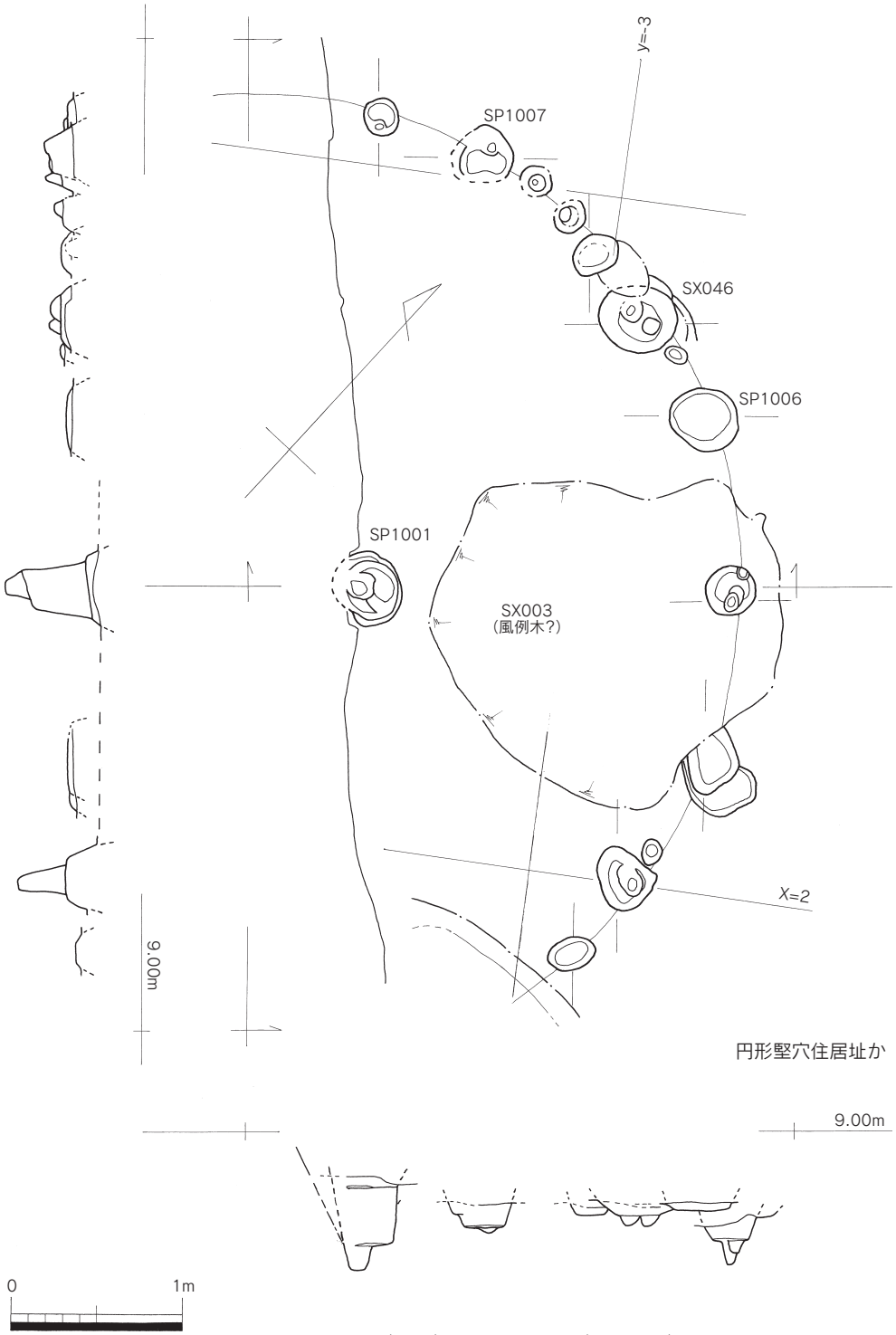


Fig.15　SX（SC?）081実測図（S=1/40）

築の可能性は薄い。いずれしても、方形枠板と刳り貫き井戸側の組合せで、かつそれが二段構造で、さらに最下部に砂利層という濾過装置を備えるような入念な井戸構造は少なくともこの時期（６世紀末～７世紀前半）の北部九州では類例はなく、比較例としては畿内中枢（飛鳥・難波）や、朝鮮半島の国々の井戸との比較検討が必要となる。これについては若干の考察を報告書末尾に載せたい。

出土遺物には飛鳥時代前半（Ⅳ期）の須恵器・土師器のほか、初期瓦片、弥生土器片（Fig.18,19－１～3)、最下層の凝灰岩製石製品残欠（Fig.22）がある。これらの詳細は後述するが、須恵器だけを見ると、井戸側痕跡が検出されたレベルより下部の一群（Fig.18 － 9 ～ 17）も、上部の一群（Fig.18－１～８）も、須恵器坏の径（坏身の場合は蓋の口縁部が当たるところで計測する）に一部重複があり（12.5cm前後)、それほどの時期差はない。ただし下層にはやや大きな径（12.8 ～ 13.7cm）のものが３点あり（Fig.18 － 9,10,13)、井戸構築時期～井戸廃絶初期はⅣ期初頭～古相（Ⅳ－１～２期）であろう。埋没過程の中層以上はⅣ－３期で（Fig.18-8 は牛頸小田浦 40 －Ⅰ号窯跡段階か)、上層の平瓶などもⅣ-3 ～４期前後だろう（Ⅳ期の細分は久住 1999 ａ)。石製品残欠は、本来は東光寺剣塚古墳に伴うものと考えられる。初期瓦片（Fig.18 － 18）は、桶巻作りによる平瓦であり、Ⅳ期初頭では「神ノ前タイプ」の須恵器成形作りが本地域では通有なので稀有な例となる（通有の瓦成形瓦は、確実例は牛頸ではⅣ－２・３期の惣利西２号住居以降で、那珂 115 次建物群での瓦導入も同様)。今後、牛頸窯址跡群でも通有な瓦成形の瓦の焼成窯の初現が遡る可能性を示す重要な破片である。南側８次の南北条溝に初期瓦が多く出土しているが（10 頁以下「４．周辺の調査」)、近隣（調査区西側の高台か）に瓦葺建物などがかなり早くからあったのかもしれない。

（２）溝状遺構

・SD001（Fig.10、土層断面 Fig.6・11、ＰＬ．２，３，７－２～7,11 － 1,2）

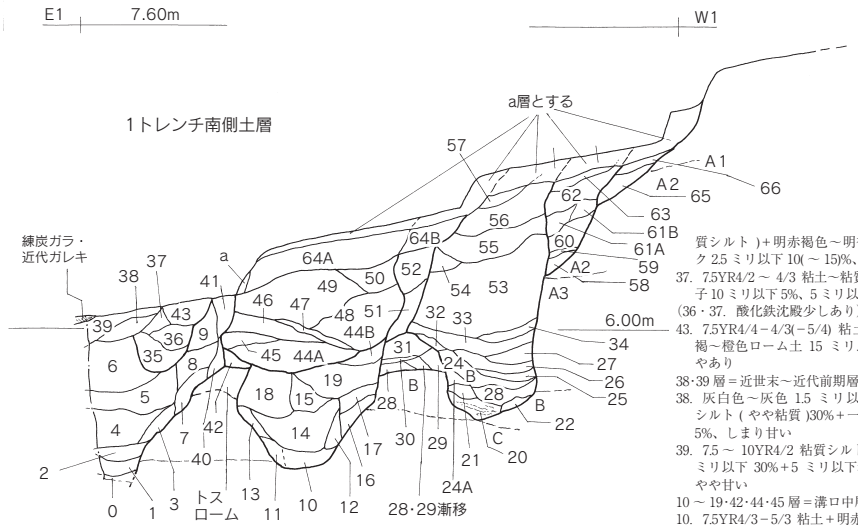
調査区中央で略南北（南東－北西）にかけて検出した溝。調査区を縦貫し、検出延長は 23.2 ｍで（Fig.4)、南北にさらに延びる。南側 24 次・69 次の溝と同一であるのは確実である（Fig.2・3)。調査区北半のⅡ区では残りが悪く溝幅がやや狭くなり、浅くなっているが、北側も終わっていない。ほぼ直線をなし、方位は、Ｎ－ 48 ～ 49°－Ｗである。東側谷部落込み外縁線とおよそ平行している。溝は土層観察と遺物の出土地点を分けるため、つごう南から北へⅠ区からⅧ区に分けて調査した。Ⅳ区は SE006 と重複していたため他より先に下部まで掘削したため、全体図（Fig.4）や全体写真では一見 SE006 が切っているような状況であるが、SD001 が新しい。またⅢ区はちょうど溝の主軸方向で確認調査時の試掘トレンチが入っており、西側肩部が一部破壊された状況であった。

溝の遺存度や溝幅、深さは地点により異なる。また近世以降の造成により東側谷部に向かって溝の東側上端が削平されたとみられる。そのため上端は西側が高くなっており、深さも西側の上端レベルからの計測とする。Ⅰ区南端（Fig.6 上段）では幅 2.26 ｍ、深さ 130cm（底面標高 6.52 ｍ)、Ⅱ区北側

表３．（Fig.16 上段）SX002-１ トレンチ土層注記続き

20 ～ 27・32 ～ 34 層＝溝ハ中層下部・下層
53 層下半＝溝ハ中層上部
20 ～ 27・32 ～ 34・53 層下半＝取上げｆ層
20. 7.5YR4/3（－5/3）粘土＋明赤褐色他ローム土 30 ミリ以下 20%（東から明赤褐ローム土中心に崩落・混入)、しまりややあり
21. 7.5YR4/3－5/3 粘土＋7.5YR5/6 前後明褐色ローム土ブロック 50% 前後、しまりやあり
22. 明赤褐色ローム土崩れ＋7.5YR4/3－4/2 粘土しみ状 20%、しまりやや甘い
23. 7.5YR4/2（－4/3）粘土＋ローム土 15 ミリ以下混入 3%、しまりやや甘い～ややあり、
24Ａ. 7.5YR5/3－5/2（－4/2）粘土＋7.5－5YR4/6－6/6 ローム粘土 30%（水平互層混合)、鉄分沈殿、しまりややあり、ローム土が砂質シルト化
24Ｂ. 24Ａ層の砂っぽいローム土含む、7.5YR－5YR5/3－4/4 粘土＋ローム土明赤褐色 20 ミリ以下 10%、鉄分沈殿
25. 7.5YR4/2（－4/3）粘土＋ローム土少し混入、やや灰色っぽい、23 層とほぼ同じ、
26. 7.5YR（5/3－）4/3 粘土＋明赤褐色ローム土混入 20 ミリ以下 10%、しまりややあり、
27. 7.5YR4/3－4/4 粘質シルト＋7.5YR5/4－5/3 粘質シルト質少し＋明赤褐色ローム土崩れ砂質シルト化 5－7%、鉄分沈殿、全体に少し砂っぽい（砂質シルト状）層
32. 33 層＋ローム土 15%、しまりやや甘い
33. 7.5YR5/3(－4/3) 粘土＋明赤褐色ローム土全体に 5%、小砂礫含む、しまりややあり、
34. 7.5YR4/4(－5/4) 粘質シルト (～シルト)＋明褐～橙色ローム土崩れ砂質シルト化 25% 斑状、やや砂っぽい層、しまりやや甘い (～甘い)
53. 7.5YR4/3（－4/4）粘土＋(明）赤褐 10 ミリ以下 3－5%、鉄分沈殿少し、しまりあり
53 層＝溝ハ中層
53 層上半・54・55 層＝取上げｃ層の一部
54 ～ 56 層＝溝ハ上層
54. 7.5YR4/3（－4/4）粘土＋明褐～明赤褐色ローム土 10 ミリ以下 5－7%、しまりややあり、
55. 7.5YR4/4(－4/6) 粘質シルト＋明褐～橙色ローム土 20 ミリ以下 7－10%、しまりややあり～やや甘い、
56. 7.5YR4/4(－4/6) 粘質シルト＋明褐～橙色ローム土 20 ミリ以下 10%、砂礫少し含む（30 ミリ長小礫まで含む)、しまりややあり
57 層＝近世末～近代前期層（取上げはｂ層）
57. 7.5YR3/3－3/4(やや粘質) シルト＋明褐色～橙色ローム土ブロック大 40 ミリ以下含む 30%、しまりやや甘い
58 ～ 61 層＝溝ニの中下層（取上げはｃ層の一部
58. 7.5YR4/3－4/4 粘土 (粘質シルト)、(明) 赤褐色ローム土ブロック 30 ミリ以下 20%、しまりやや甘い～甘い
59. 7.5YR4/4－5/4 粘質シルト～シルト＋明赤褐色ローム土 10 ミリ以下 5%、しまり甘い、
60. 7.5YR(－4/5)4/4 粘質シルト＋明褐～橙色ローム土 15 ミリ以下 5%、しまりややあり～やや甘い
61Ａ. 7.5YR4/4 粘質シルト＋明褐～橙色ローム土ブロック 20 ミリ以下 25%、しまりやや甘い～ややあり
61Ｂ. 明褐～橙色ローム土ブロック主体＋7.5YR4/4 シルト (粘質シルト)30－40%、しまり (あり) ～ややあり
62・63 層＝溝ニの上層（取上げはｂ層の一部）
62. 7.5YR3/3(－4/3) やや粘質シルト＋明赤褐 (～橙) 色ローム土 20 ミリ以下 10%、炭粒少し含む (1－2%)、しまりあり～ややあり
63. 7.5YR3/3(－4/3) やや粘質シルト＋明褐～橙色ローム土ブロック大 50×40 ミリ以下 2.5－30%、しまりあり (～ややあり)
65・66 層＝SX002 最外縁部（溝ホ、取上げｂ層の一部）
65. 7.5YR4/4 シルト＋明赤褐～橙色ローム土 20 ミリ以下、斑状 10－15%、しまりあり
66. 7.5YR(3/3－)3/4 シルト＋明赤褐ローム土 10 ミリ以下 5%、、しまりあり、
※検出面からの上部層を取り外して土層を検討した段階で、複数条の溝が上部から下部まであることが判明したが、上層掘削時は一括で取上げてしまい（「ｂ層」、「ｃ層」)、実際の新旧関係と取上げ順序に混乱が生じている。

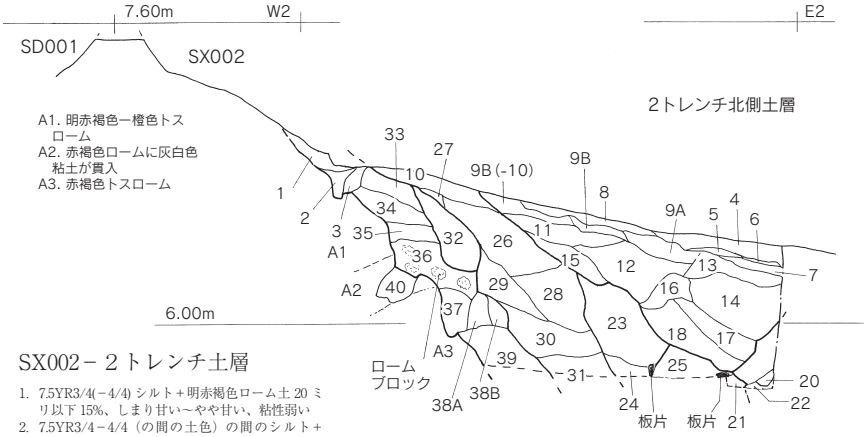
地山Ａ．トスローム
Ａ１．明褐～橙色やや粘質シルト、ややパサパサした感触のシルト
Ａ２．明赤褐色やや粘質シルト
Ａ３．赤褐～にぶ赤褐色粘質土、上部よりやや暗い
地山Ｂ．トスローム下部・トスローム／八女粘土漸移層、トスロームに黄白色粘土が貫入する、Ｂ層で一部湧水
地山Ｃ．八女粘土上部、黄白色粘土に一部赤褐色ローム粘質土が混入する、Ｂ／Ｃ間で湧水がある



SX002－１トレンチ土層

0～9・40・41 層＝溝イ
0～8・40・6 層下部＝取上げｄ層
0. 青灰色粘土、グライ化層、湧水
1. 7.5YR4/1～10YR3/2 粘土、しまりややあり
2. 7.5～10YR4/2 粘土＋明褐（～橙）色ないし黄白色トスローム土＋八女粘土ブロック 30 ミリ以下 25%、木片など含む、しまり（やや甘い）ややあり
3. 7.5YR（4/1～）4/2 粘土＋明赤褐色トスローム・黄白色八女粘土ブロック 25 ミリ以下 15～20%、しまりやや甘い
4. (7.5－)10YR3/2～4/2 粘土、しまりややあり、明、褐（～橙）色ローム土ブロック 40 ミリ以下 10%、小砂礫少し（わずか）
5. 7.5－10YR4/2－3/2 の間の土色粘土・酸化部分は7.5YR4/3粘土＋明褐～橙色ローム土、小ブロック 15 ミリ以下 3～5%、しまりやや甘い～甘い
6. 7.5YR(3/3－)4/3 粘質シルト（粘土に近い）・酸化していない部分は7.5YR4/2粘土(粘質シルト)＋赤褐色ローム土 15 ミリ以下 7%、しまりやや甘い～ややあり
7. 7.5YR4/3（－5/3）粘土＋浅黄橙～明褐色ローム土小ブロック 20 ミリ以下 5%、酸化鉄分沈殿あり、しまりやや甘い、
8. 7.5YR4/3 粘土～粘質シルト＋赤褐色ローム土粒子 10 ミリ以下 2% 以下、5 ミリ以下砂礫ごくわずか、しまりややあり～やや甘い、鉄分沈殿わずか
9. 7.5YR4/3－4/4 粘土～粘質シルト＋ローム土粒子 10 ミリ以下 2% 以下、炭粒ごくわずか、5 ミリ以下砂礫ごくわずか、しまりややあり
40. 7.5YR4/2－4/3 粘土（～粘質シルト）＋明褐～明赤褐色ローム土 15 ミリ以下 7～10%、しまりやや甘い
41. 7.5YR4/3（－4/4）粘質シルト＋ローム土粒子 3%前後、5 ミリ以下砂礫ごくわずか、しまりやや甘い～ややあり、鉄分沈殿少し
35～37・43 層＝清イ上部遺構
6 層上部・9・35～37・43＝取上げｃ層の一部
35. 7.5YR4/3－5/3 粘質シルト＋明褐～（明）赤褐色ローム土（浅黄橙色八女粘土含む）35 ミリ以下ブロックやや多 20%、しまりややあり～やや甘い
36. 7.5YR4/3 粘質シルト（粘土というよりやや粘質シルト）＋明赤褐色～明褐色ローム土ブロック 2.5 ミリ以下 10(～15)%、しまりやや甘い
37. 7.5YR4/2～4/3 粘土～粘質シルト＋ローム土粒子 10 ミリ以下 5%、5 ミリ以下砂礫わずかに含む
(36・37. 酸化鉄沈殿少しあり)
43. 7.5YR4/4－4/3(－5/4) 粘土～粘質シルト＋明褐～橙色ローム土 15 ミリ以下 10%、しまりややあり
38･39 層＝近世末～近代前期層下部（取上げはｂ層）
38. 灰白色～灰色 1.5 ミリ以下砂＋10YR4/－5/2 シルト（やや粘質）30%＋一部 5～1.5 ミリ粗砂 5%、しまり甘い
39. 7.5～10YR4/2 粘質シルト＋灰～灰白色砂 1.5 ミリ以下 30%＋5 ミリ以下粗砂 1－2%、しまりやや甘い
10～19･42･44･45 層＝溝口中層以下（取上げｅ層）
10. 7.5YR4/3－5/3 粘土＋明赤褐ローム土 20 ミリ以下 5－7%、しまりやや甘い～甘い
11. 7.5YR5/3(－4/3) 粘土＋(明) 赤褐色ローム土ブロック 30 ミリ以下 30%、しまり甘い。
12. 7.5YR5/3(－5/4 粘土、しまり甘い、ローム土粒子 10 ミリ以下 10%
13. 5YR－7.5YR4/4－5/4 粘土＋明赤褐色ローム土 B20 ミリ以下 15－20%、しまりやや甘い
14. 7.5YR(4/3－)5/3 粘土＋明赤褐～明褐色ローム土ブロック 40 ミリ以下 15%、しまりやや甘い(～ややあり)、鉄分沈殿あり
15. 7.5YR4/4－5/4 粘土＋7.5YR4/1－5/1 粘土 20 ミリ以下 5%、＋明赤褐色ローム土 20 ミリ以下 5%、しまりややあり
16. 7.5YR4/2－4/3 粘土（やや灰色気味）＋明赤褐～橙色ローム土 B15 ミリ以下 5－7%、しまりやや甘い（～ややあり）
17. 7.5YR4/3－5/4 粘質土＋明褐～明赤褐色ローム土 2.5 ミリ以下 20%、しまり甘い
18. 7.5YR（4/4－）5/4 粘質シルト＋明赤褐色ローム土 20 ミリ以下 3%＋全体に微砂粒混入（砂 2 ミリ以下）、他より砂っぽい粘質シルト、しまりややあり
19. 7.5YR4/3 粘質シルト＋明褐（～赤褐）色ローム土 10 ミリ以下 5% 砂質シルト含む 10%＋5 ミリ以下砂礫をわずかに含む、しまりあり～ややあり
42. 44A 層＋橙色～明褐色トスローム土ブロック 25%、しまりあり
44A. 7.5YR5/3（－5/4）粘土・粘質シルト＋ローム土粒子まじり少 10 ミリ以下 2%、5 ミリ以下砂礫わずか、しまりあり
44B. 7.5YR(5/3－)5/4 粘質シルト・シルト＋赤褐色ローム土 10 ミリ以下 5%＋5 ミリ以下砂礫 2%、しまりやや甘い～ややあり、44A 層＋19 層、しまり甘い
45. 7.5YR4/3（4/4）粘質シルト（～粘土）＋明褐色ローム土 15 ミリ以下 5%、土器小片含む、しまりやや甘い
46～52 層＝溝口上層（取上げｃ層の一部）
46. 7.5YR4/3(－3/3･4/4)粘土(～粘質シルト)＋ローム土まじり 1－2%、土器小片含む、小砂礫ごくわずか、酸化鉄分・酸化マンガン沈殿あり、しまりややあり
47. 7.5YR4/3(－5/3) 粘土～粘質シルト＋明褐～明赤褐色ローム土 15 ミリ以下 7－10%、しまりやや甘い
48. 7.5YR4/3－4/4 粘質シルト＋ローム土赤褐～明褐色 20 ミリ以下 10－15%(中央に多い)＋炭粒 2%＋5 ミリ以下砂礫 1%、酸化鉄分沈殿、しまりあり（～ややあり）
49. 7.5YR(4/4－)5/4 粘質シルト＋明赤褐色ローム土 15 ミリ以下 2－3%＋炭粒わずか、しまりあり
50. 7.5YR（4/3－）4/4 粘質シルト＋赤褐色ローム土 15 ミリ以下 3%＋5 ミリ以下砂礫わずか、鉄分沈殿
51. 7.5YR(4/4－)5/4 粘土＋赤褐色ローム土 20 ミリ以下 3－5%、酸化鉄沈殿少し、しまりあり
52. 7.5YR4/4 粘質シルト＋赤褐（～明赤褐）ローム土 20 ミリ以下 7%、しまりあり～ややあり
64 層＝溝口最上層（取上げはｂ層の一部）
64A. 7.5YR3/3－4/3 粘質シルト＋ローム土 10 ミリ以下 2－3%、、砂礫わずか、炭粒ごくわずか、しまりややあり～(一部やや甘い)
64B. 7.5YR4/3－4/4 粘質シルト＋明褐～明赤褐色ローム土 10 ミリ以下 5%、しまりやや甘い
28～31 層＝溝口・ハ間溝下層（取上げはｆ層）
28. 7.5YR（2/4－）5/4 粘土＋砂？（ローム土崩れ）ローム土、10%、しまりやや甘い～ややあり
29. 7.5YR5/3 粘土＋ローム土混入 15 ミリ以下 10%、28 層よりしまりやや甘い、
30. 28 層＋明褐色ローム土 15 ミリ以下 30%、しまり甘い
31. 7.5YR4/4－5/4 粘土＋明赤褐色他ローム土 15 ミリ以下斑状 15～20%（やや多）、小砂礫少し混じる、しまりややあり

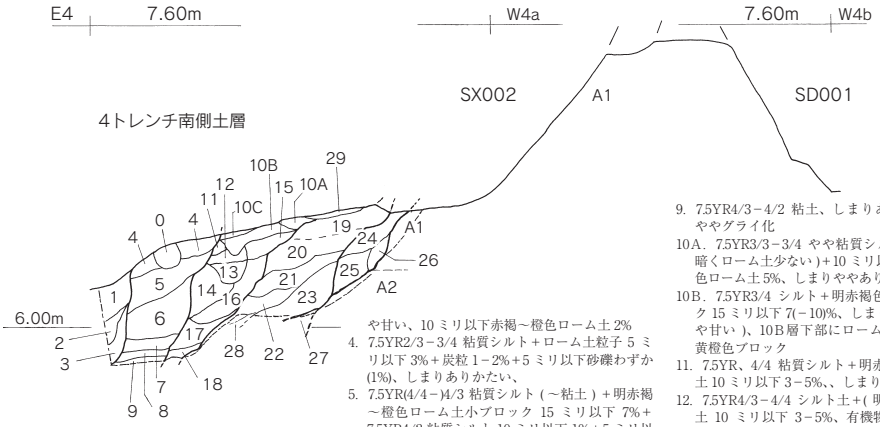
(以下、24 頁下部「表３」に続きあり)



SX002－２トレンチ土層

1. 7.5YR3/4(－4/4) シルト＋明赤褐色ローム土 20 ミリ以下 15%、しまり甘い～やや甘い、粘性弱い
2. 7.5YR3/4－4/4（の間の土色）の間のシルト＋明赤褐色ローム土 10 ミリ以下 5%、しまりやや甘い、粘性弱い
3. 7.5YR3/4－4/4（の間の土色）シルト＋赤褐～明赤褐色ローム土ブロック、30 ミリ以下 30%、しまり甘い
4. 7.5YR3/3－3/4 シルト＋炭（練炭？＋木炭？）小ガラ多 5－7%＋10 ミリ以下小礫 2－3%＋近代遺物片 1%＋レンガ小片 1% 以下、鉄分沈殿粒あり、しまり甘い
5. 7.5YR3/3 粘質シルト＋木炭小ガラ 10%＋鉄クズ状片、(鉄分沈殿層？)10%、しまりやや甘い
6. 5R 鉄片多（酸化鉄沈殿か？）＋砂礫 5 ミリ以下 5%、しまり甘い
7. 7.5－10YR3/2 暗灰色気味黒褐色粘質シルト（～粘土質）、＋7.5YR4/3 粘質シルト 25%＋3 ミリ以下砂礫 2－3%、しまりややあり～しまりあり
8. 7.5YR3/3 シルト＋15 ミリ以下砂礫多 15%＋炭粒やや多 3%＋レンガ小片含む近代遺物 1－2%、しまり甘い、粘性弱い
9A. 7.5YR4/3 シルト（少し粘質）、しまりあり～やや甘い
9B. 9A 層と 9C 層の間層、混入物やや少、9A・C（やや粘質土）7.5YR3/3－4/3 シルト＋小砂礫 1－2%、しまりややあり（～やや甘い）、粘性少し
9C. 7.5YR4/3－4/4 粘質シルト（10 層にも近い）＋ローム土粒子 10 ミリ以下 3%＋小砂礫 1% 以下、混入物は 10 層と異なる、しまりあり、
10. 7.5YR4/4 粘質シルト＋橙色～明褐・明赤褐色ローム土ブロック、25 ミリ以下 7－10% 含む（大きいもの赤褐色ローム土ブロック多）＋15 ミリ以下少砂礫含む 1－2%、しまりあり（～ややあり）
11. 7.5YR4/3－4/4 粘質シルト＋明赤褐（淡橙白色付着）ローム土ブロック 40 ミリ以下 10－15%＋小砂礫 1% 以下、炭粒わずかに含む、しまりややあり、10 層の延長か
12. 7.5YR4/3(－4/4 少)粘質シルト＋明赤褐色ローム土ブロック 20 ミリ以下 3－5%、小砂礫含む(わずか)、しまりややあり（～ややあり）
13. 7.5YR4/5 粘質シルト（～粘土）＋7.5YR4/5 シルト 20%＋赤褐色ローム土ブロック 2.5 ミリ以下（7－)10%、鉄分沈殿粒あり、しまりややあり～しまりあり
14. 7.5YR4/2（－4/3 少）粘質シルト（～粘土）、しまりあり、鉄分沈殿粒少し、13 よりも灰色気味
15. 7.5YR4/3（－4/4 少）粘質シルト＋ローム土粒子 1－2%、混入物少ない、しまりあり
16. 7.5YR4/3－5/3 粘質シルト (12 より灰色気味)＋赤褐色ローム土 15 ミリ以下少し、しまりややあり、鉄分沈殿粒あり
17. 7.5YR(5/3－)4/3 粘土～粘質シルト＋赤褐～明赤褐色・橙色ローム土・淡橙色八女粘土ブロック 40 ミリ以下多 25%＋7.5YR4/2－4/1 粘土大ブロック斑状 5－7%＋、粘性やや強、しまりややあり
18. 7.5YR5/3（－4/3）粘土（一部 7.5YR5/2)＋明赤褐色ローム土・淡橙色八女粘土ブロック 20 ミリ以下 3－5%、鉄分沈殿粒少し、粘性強い、しまりややあり～ややあり、
19. 7.5YR4/1－4/2 粘土＋明赤褐ローム土ブロック 15 ミリ以下 5－7%、鉄分沈殿少し、しまりややあり～やや甘い
20. 21 層と同様の粘土＋明褐～橙色ローム土ブロック 15 ミリ以下 10%、しまりややあり、粘性強い
21. 7.5YR4/1－4/2 粘土＋明褐～橙色ローム土ブロック 2.5 ミリ以下 15%－20%、しまりあり～ややあり、粘性強い
22. 7.5YR3/1－4/1 粘土、しまりあり～ややあり、粘性強
23. 7.5YR4/3(－5/3) 粘土＋赤褐～明赤褐色ローム土ブロック 20 ミリ以下 5(－7)%、＋小砂礫わずかに含む (1% 以下)、鉄分沈殿少し、粘性やや強、しまりややあり（～あり）、15 層より暗い、28 層より灰色気味
24. 7.5YR4/2（－4/1）粘土＋明赤褐色ローム土小ブロック・粒子 10 ミリ以下 3(－5)%＋小砂礫 5 ミリ以下わずか (1% 以下)、粘性強い、しまりあり～ややあり
25. 7.5YR4/2(－4/1) 粘土、混入物わずか、粘性強い、しまりややあり
26. 7.5YR4/3－4/4 粘質シルト（粘土に準じる）＋ローム土小ブロック・粒子 1.5 ミリ以下 2－3%、混入物少
27. 7.5YR4/4－3/4 粘質シルト＋ローム土粒子 10 ミリ以下 2%、しまりあり
28. 7.5YR4/3 粘土＋ローム土小ブロック・粒子 15 ミリ以下 2－3%、炭粒ごくわずか、しまりあり、鉄分沈殿あり、26 層より灰色気味
29. 7.5YR4/4(26－28 層より明褐色気味）粘土（～粘質シルト)＋ローム土粒子 1－2%、炭粒わずか、混入物少、しまりあり、
30. 7.5YR4/4（－4/3 少）粘質シルト＋10 ミリ以下ローム土粒子 2－3%、小砂礫・砂ごくわずか、粘性あり、しまりあり、
31. 7.5YR4/3－4/4 粘質シルト＋7.5YR4/3－4/4 砂質シルト 10% 混入＋7.5YR5/3 粘質シルト若干＋赤褐色ローム土小ブロック 20 ミリ以下 7－10%、粗砂・小砂礫 5 ミリ以下 2% 前後あり、しまりやや甘い、鉄分沈殿少し
32. 7.5YR(3/3－)4/3 粘質シルト＋明赤褐～橙色ローム土 15 ミリ以下少 3%、しまり（やや甘い～）ややあり、
33. 7.5YR3/4－4/4 粘質シルト＋10 ミリ以下ローム土粒子 1－2%、小砂礫上面にわずかに混入する、しまりあり
34. 7.5YR4/4(～4/6) 粘質シルト～シルト＋明赤褐～明褐色ローム土ブロック 20 ミリ以下 3－5%、しまりやや甘い(～ややあり)、
35. 7.5YR4/3 粘質シルト～シルト＋明赤褐色・白色(～淡橙色)ローム土(・八女粘土含む)ブロック 60×20 ミリ以下 15－20%、しまりややあり～やや甘い
36. 7.5YR4/3 粘質シルト～シルト＋(明)赤褐色ローム土ブロック 90×70 ミリ以下 40% 前後、しまりあり～ややあり
37. 7.5YR やや粘質シルト＋ローム土 10% 前後、しまりやや甘い、
38. 7.5YR4/3(－4/4) 粘土（～粘質シルト）＋明赤褐色ローム土ブロック 50 ミリ以下 10－15%、しまりややあり～やや甘い、真ん中でしまりが異なり左右に分かれる（境界に亀裂が入る）、38A 層しまりややあり＞38B 層しまりやや甘い
39. 7.5YR4/3（－4/4 少、－5/3 少）やや粘質シルト＋5YR6/6－4/6 赤褐色ローム土ブロック 60 ミリ以下 30－40%＋7.5YR4/2 粘土 10%＋砂まじり（砂質シルト)1－2%、しまりやや甘い
40. 7.5YR4/4－5/4 粘質シルト＋明赤褐色・淡橙色ローム土ブロック 20 ミリ以下 10%、しまりやや甘い

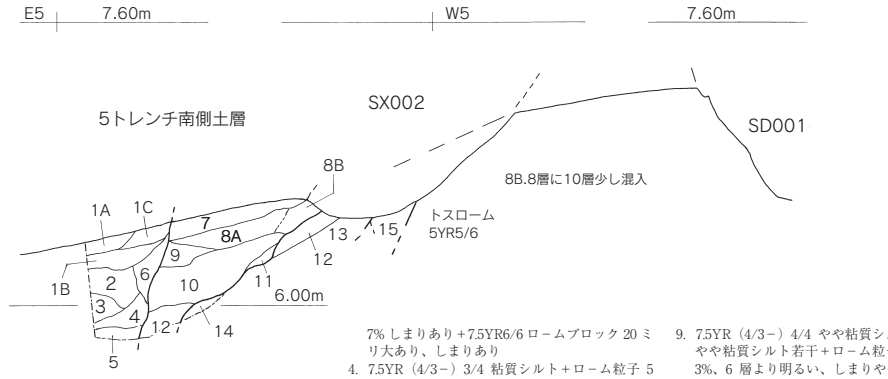
Fig.16　SX002落込み土層断面図(1)（S=1/40）



SD002－4 トレンチ土層

0. 7.5YR4/3 粘質シルト＋砂礫 2 ミリ以下やや多（2%）、木炭（練炭？）ガラ少し混入
1. 7.5YR4/3 粘質シルト＋赤褐色ローム土 20 ミリ以下 3－5%＋炭粒 (炭化有機物) あり 1%、しまりやや甘い
2. 7.5YR4/3 粘土＋赤褐～橙色ローム土 10 ミリ以下 3%＋5 ミリ以下砂礫わずか、酸化鉄分・酸化マンガン沈殿あり、しまりあり、
3. 7.5YR4/3（－5/4）粘土、しまりややあり～やや甘い、10 ミリ以下赤褐～橙色ローム土 2%
4. 7.5YR2/3－3/4 粘質シルト＋ローム土粒子 5 ミリ以下 3%＋炭粒 1－2%＋5 ミリ以下砂礫わずか (1%)、しまりありかたい、
5. 7.5YR(4/4－)4/3 粘質シルト (～粘土) ＋明赤褐～橙色ローム土小ブロック 15 ミリ以下 7%＋7.5YR4/2 粘質シルト 10 ミリ以下 1%＋5 ミリ以下炭粒 2%、5 ミリ以下砂礫わずか、しまりあり
6. 7.5YR、(4/3－)4/4 粘質シルト＋明褐～橙色ローム土 10 ミリ以下 5%＋7.5YR4/2 粘質シルト 20 ミリ以下 2%＋最大 20 ミリ角の炭・炭粒わずかに含む (1%)、しまりややあり (～あり)
7. 7.5YR4/3－5/3 粘質シルト (粘土＋シルト)＋10 ミリ以下 (明) 赤褐色ローム土 5－7%、酸化鉄分－酸化マンガン沈殿か、しまりややあり
8. 7.5YR4/3 粘土＋明褐～橙色ローム土 10 ミリ以下 3 ～ 5%、しまりややあり
9. 7.5YR4/3－4/2 粘土、しまりあり～ややあり、ややグライ化
10A. 7.5YR3/3－3/4 やや粘質シルト (10B 層より暗くローム土少ない)＋10 ミリ以下の明赤褐～橙色ローム土 5%、しまりややあり
10B. 7.5YR3/4 シルト＋明赤褐色ローム土ブロック 15 ミリ以下 7(－10)%、しまりややあり (～やや甘い)、10B 層下部にロームパミス浅黄～浅黄橙色ブロック
11. 7.5YR、4/4 粘質シルト＋明赤褐～橙色ローム土 10 ミリ以下 3－5%、、しまりややあり
12. 7.5YR4/3－4/4 シルト土＋(明) 赤褐色ローム土 10 ミリ以下 3－5%、有機物多く含む、しまりやや甘い～ややあり
13. 7.5YR シルト＋(明) 赤褐色ローム土ブロック 15 ミリ以下 7－10%＋有機物 (木の根･小枝など) 含む 2%、しまり（やや）甘い
14. 7.5YR3/4－5/4(やや粘質) シルト＋明赤褐色ローム土 15 ミリ以下 7%、有機物少し含む
15. 5YR4/4－7.5YR4/6 シルト＋5YR4/6－5/6(明) 赤褐色ローム土ブロック 80×60 ミリ以下 30%（大ブロック含む、ローム土混入多い
16. 7.5YR4/4(－5/4) やや粘質シルト主体＋7.5YR4/3 やや粘質シルト 10%＋7.5YR4/2 粘土 20 ミリ以下 5－7%＋炭・炭粒 10 ミリ以下 1%、有機物少し含む、しまりやや甘い
17. 7.5YR4/3－4/4 粘土～粘質シルト＋明赤褐色ローム土 10 ミリ以下 3%＋木質 (有機物) 含む 2%（細板など）、炭粒わずか、しまりやや甘い～ややあり
18. 7.5YR4/3(－4/4) 粘土～粘質シルト＋ローム土 10 ミリ以下 3%、炭粒･種子炭化粒含む(わずか)、しまりやや甘い、
19. 5YR(7.5)YR4/4(やや粘質) シルト＋明褐色ローム土 35 ミリ以下ブロック (長 80×2.5 ミリ含む) 20%、(24 より暗い)、しまりややあり～やや甘い、24 層より明るい、ローム土混入やや多い
20. 5(－7.5)YR(3/4－)4/4 粘質シルト＋7.5YR4/3 シルト 10%＋明赤褐～ 5YR に近い橙色ローム土ブロック 100×80 ミリ以下 40－50%斑状(大ブロック含む)、しまりややあり～やや甘い、24 層より明るい、ローム土混入多い
21. （5－）7.5YR4/4 粘質シルト＋明赤褐～明褐色ローム土 2.5 ミリ以下 15%＋炭化有機物含む 7.5YR3/3 粘質シルト 20 ミリ以下 3%、しまりやや甘い～甘い
22. 5YR4/4 粘質シルト（～粘土）＋明褐～橙色ローム土 15 ミリ以下 7%、しまりややあり（～やや甘い）
23. (5－)7.5YR4/3 粘土、しまりあり～ややあり、(明) 赤褐色ローム土 15 ミリ以下 3%
24. （5－）7.5YR3/4（－4/4）（やや粘質）シルト、しまりやや甘い～ややあり、橙色～明赤褐色ローム土 20 ミリ以下 5－7%、19･21 層より暗い、25 層より少し明るく赤い、ローム土混入やや多い
25. (5－)7.5YR(4/4－)3/4 やや粘質シルト＋赤褐色ローム土 20 ミリ以下斑状 5－7%＋炭 15 ミリ角以下含む 1% しまりやや甘い、24 層より少し暗い
26. 5－7.5YR（4/4－）3/4(やや粘質) シルト＋明赤褐色ローム土 10 ミリ以下 3%、しまりやや甘い～ややあり
27. 5(－7.5)YR4/3 粘土＋明赤褐色ローム土 20 ミリ以下 3%、炭粒わずかに含む、しまりやや甘い～ややあり
28. 5(－7.5)YR(4/3－)4/4 粘土＋明赤褐～橙色ローム土 15 ミリ以下 5%＋5 ミリ以下砂礫 1%、炭粒わずか、炭化有機物含む (わずか)、しまりやや あり (～あり)
29. 7.5YR4/3－3/4 やや粘質シルト＋明赤褐色ローム土 15 ミリ以下 5－7%、しまりややあり

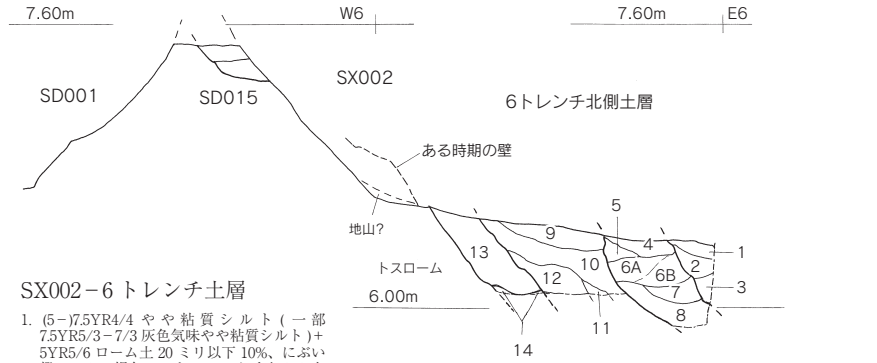
地山Ａ１．明黄褐～赤褐色ローム（トスローム）
地山Ａ２．明赤褐色ロームに灰白色粘土貫入（八女粘土への漸移層）



SX002－5 トレンチ土層

0. 7.5YR4/2 砂質シルト＋7.5YR2/3－4/3 シルト、炭粒・砂利（小砂礫）含む、しまりやや甘い
1A. 7.5YR4/3－3/4 やや粘質シルト＋10 ミリ以下砂礫 1%＋ローム粒子 3%、しまりやや甘い～ややあり
1B. 7.5YR4/3－4/4（少し粘質）シルト＋ローム粒子 2%、しまりやや甘い
2. 7.5YR（4/3－）3/4 粘質シルト＋ローム 10 ミリ以下 3－5%、しまりややあり～あり
3. 7.5YR4/4 粘質シルト＋ローム粒子 10 ミリ以下 7% しまりあり＋7.5YR6/6 ロームブロック 20 ミリ大あり、しまりあり
4. 7.5YR（4/3－）3/4 粘質シルト＋ローム粒子 5 ミリ以下 5%、しまりあり
5. 7.5YR4/4－4/3 粘質シルト＋ローム粒子 10 ミリ以下 3－5%、しまりあり
6. 7.5YR4/3（－4/4）（少し粘質）シルト＋7.5YR6/6－6/8（・5/6）ローム 15 ミリ以下 5－7%、しまりやや甘い、
7. 7.5YR（4/3－）（少し粘質）5/4 シルト＋7.5YR5/6－6/6 ローム 10 ミリ以下 7－10%、炭粒わずか、しまりややあり
8A. 7.5YR3/4－4/4（少し粘質）シルト＋ローム 10 ミリ以下 5%＋7.5YR7/6－6/8 ローム 20 ミリブロック含む、しまりややあり（～やや甘い）
9. 7.5YR（4/3－）4/4 やや粘質シルト＋7.5YR5/4 やや粘質シルト若干＋ローム粒子 10 ミリ以下 3%、6 層より明るい、しまりややあり～やや甘い
10. 7.5YR4/4 粘質シルト＋ローム 10 ミリ以下まじり少 2%、しまりややあり（～あり）、9・10 層間境界に亀裂入る
11. 7.5YR3/4 褐色やや粘質シルト＋5YR4/6－5/6 ロームブロック大小 15%－20%、しまりややあり～やや甘い
12. 7.5YR4/3 粘質シルト＋ローム粒子少 1－2%、炭粒ごくわずか、しまりあり、（～ややあり）、5 層より少し明るい
13. 7.5YR4/3－4/4（少し粘質）シルト主体、しまり甘い、14 層とほとんど同じ
14. 7.5YR4/4－4/3（・5/4 少）混合（少し粘質）シルト＋5－7.5YR5/6 ローム 20 ミリ以下 20%、しまり甘い、13・14 層地山崩落土
15. ピット覆土か、7.5YR4/4 シルト主体＋5－7.5YR4/6－6/6 ローム土 30%＋7.5YR3/3 シルト 10%、しまりややあり

地山Ａ．5YR5/6 トスローム



SX002－6 トレンチ土層

1. (5－)7.5YR4/4 やや粘質シルト (一部 7.5YR5/3－7/3 灰色気味やや粘質シルト)＋5YR5/6 ローム土 20 ミリ以下 10%、にぶい橙～にぶい褐色シルト 10%、しまりややあり～やや甘い、やや粘性、
2. (5－)7.5YR4/3－4/4 やや粘質シルト＋ローム土粒子 10 ミリ以下 3－5%、しまりやや甘い
3. 7.5YR5/4 やや粘質シルト＋5YR3/6 ローム土 15 ミリ以下 5%、15×20 ミリの炭粒含む、しまりややあり、7 層との間（境界）に土質が異なるため亀裂が入る
4. 7.5YR4/4－4/3（少し粘質）シルト＋ローム土 10 ミリ以下 5－7%＋小礫 10 ミリ以下 2－3%、粘性少ない、しまり甘い～やや甘い、
5. (5－)7.5YR4/4 シルト＋ローム土粒子 1－2%、しまりやや甘い～甘い
6. 7.5YR4/4 シルト＋5YR6/6(－5/6・6/6 少) ローム土粒子 10 ミリ以下 5%＋5YR4/6-5/6 ローム土 20 ミリ大ブロック少し含む、炭 (10×20 ミリ) 含む、、しまりやや甘い～甘い、粘性やや弱い
7. （5－）7.5YR（4/4－）5/4 やや粘質シルト＋ローム土粒子 2%、しまりややあり～やや甘い、
8. （5YR－）7.5YR（4/4－）5/4 にぶい褐色粘質シルト＋ローム土粒子 10 ミリ以下 3%、しまりややあり、7 層より粘質やや弱、7 層より赤い
9. 7.5YR4/4 やや粘質シルト＋ローム土粒子 10 ミリ以下 3－5%
10. 7.5YR4/4(－4/6)粘質シルト＋5YR4/6 ローム土 7%＋5－7.5YR5/6 ローム土 3%、しまりやや甘い、粘性少し
11. 7.5YR（4/4－）5/4 粘質シルト＋5YR5/6 ローム土 30%、しまり甘い、粘性あり
12. 5YR4/6－5/6 ローム土主体＋7.5YR4/4－5/4 褐色～にぶい褐色シルト 25%、しまりやや甘い、粘性ややあり
13. 5YR4/4 にぶい（明）赤褐色シルト主体＋5YR4/6 赤褐ローム土 20%＋7.5YR4/4 にぶい褐色シルト 10%＋5YR6/6－5/6 明赤褐色ローム土 10%、しまり甘い、粘性ややあり
14. 5YR5/6－5/8 明赤褐色ローム土＋5YR4/6 赤褐色ローム土 30%、地山ローム土再堆積、しまりやや甘い
15. 5YR5/8 ローム土＋4/6 ローム土混合再堆積、しまりやや甘い、粘性やや欠けるローム土

0　1m

Fig.17　　SX002落込み土層断面図(2)（S=1/40）

（Fig.11 上段）では幅 1.82 m、深さ 120cm（標高 6.70 m）、Ⅴ区南側（Fig.11 下段）では幅 2.3 m、深さ 122cm（標高 6.78 m）、Ⅷ区北端（Fig.6 下段）では西側の配管撹乱が無かった場合を想定して幅 1.0 ～ 1.2 mとなり、深さは 44cm前後（標高 6.74 m）である。溝底面は、一部前後するが、おおむね北側の方が高くなる。溝断面は逆台形ないしＵ字形をなす。土層断面を観察すると（Fig.6・11）、不整合面がいくつか認められ、複数回の掘り返しが推定される。多くの部分では、掘り返し層は当初の底面までは達していないが、一部は最下層の埋没直後に元の底面以上に掘り返したことが観察される箇所もある（Fig.11 下段、ＰＬ．７－5）。**出土遺物**（Fig.18 － 4 ～ 19 － 15）から、中世末期（戦国時代後半、16 世紀）に掘削され、近世に埋没したのだろう。おそらく地形を利用した、中心が西側の高台上にある城館縁辺部を囲郭した壕（堀）の一部だろうと推測される。

・**SD005**（Fig.12、ＰＬ．８－１・2,11 － 3）

Ⅰ区西側で検出。全長 8.3 m以上だが、東端を SD001 に、西端を撹乱に切られる。全体的に遺存度が悪いが、西側ほど削平が進んでいる。東端の断面「f1 － f2」（Fig.12）部分は SD001 が西側に膨らむ箇所か、または別遺構の可能性があるものの、一緒に掘削してしまっている。このためこの部分は全長に入れていない。残りが若干良好な東側中央で幅 1.2 から 1.3 m、深さ 20 ～ 25cm（ピット状の凹みは除く）で、西端は幅 0.4 m、深さ５センチ程度の遺存である。底面レベルは西端が 8.48 m、中央から東側は 8.35 ～ 8.30 mである。土層を詳しく観察していないが、一度埋没した後に再掘削されたような土層ラインがあった。断面形は上部が削平されるが、ほぼ逆台形状であろう。方位は、Ｎ－70°－Ｗである。**出土遺物**は少なく、図化できたのは１点のみである（Fig.20 － 16）。ⅢＢ期～Ⅳ期前半の須恵器坏身であるが、SC007 ～ 009 とも方位がそろい、SE006 の井戸枠主軸方位とはおよそだが直交するので、これらはほぼ同一時期に共存した遺構群の可能性が高い。遺構覆土も SC007 ～ 009 と同様の極暗褐色（～暗褐色）を主とするものであったこともその推定を支持する。

・**SD004**（Fig.13 左）

Ⅰ区中央南側、SD001 と SX002 の間で検出した溝。全長 4.6 m以上だが、南北を新しい遺構に切られる。遺存度が悪く、幅 34 ～ 52cm、深さ 12 ～ 14cm（ピット状の凹みは除く）である。底面レベルは 7.9m 前後であり、本来は SD005 よりも深い。方位はＮ－ 70°－Ｗであり、SD005 と平行する。同時存在の可能性もあるが、SD004 は遺物がほとんどなく証明できない。ただし覆土の特徴は似て入る。北西に延長すると SE006 に当たってしまうので、SE006 とは時期が別であるか、井戸の手前南側で溝が終わるかである。

・**SD015**（Fig.13 右）

Ⅰ区北縁中央、SD001 と SX002 の間で検出した溝。全長 2.65 m以上だが、南側は撹乱に一部切られるが立ち上がっており、北側と東側は SX002 に切られるが、北端は東側に屈曲するような様相である。幅は 60 ～ 70cm、深さは 12 ～ 26cm（ピット状の凹みは除く）である。溝底面は標高 7.60 ～ 7.67 mである。

上部が顕著に削平されるが、断面形は逆台形であろう。方位はＮ－ 35°－Ｗで、SD001 の方位とも飛鳥時代遺構群の方位とも合わない。覆土は暗褐色というよりは褐色土である。**出土遺物**はあまりなく、図化できたのは２点のみである（Fig.20 － 17・18）。12 ～ 13 世紀、中世前半の遺構であろう。

（３）竪穴建物（竪穴住居）

・**SC007**（Fig.14、ＰＬ．８－ 2,11 － 4・5,12 － 1）

Ⅰ区中央西縁で検出。西側から北側は撹乱か調査区外。SC008・009・010 を切り、**SX071**（９世紀の内黒土師器埦出土）に切られる。略南北 2.2 m以上×略東西 1.2 m以上、検出面からの深さは 4 ～ 10cm程度で相当削平されている。貼床はあったが薄く、掘方底面まで下げて記録した。ただし SX021 など床面の凹み（小土坑）・ピットの一部や南辺の壁溝は貼床面で検出した。**SX021** の深いピット部分は、四

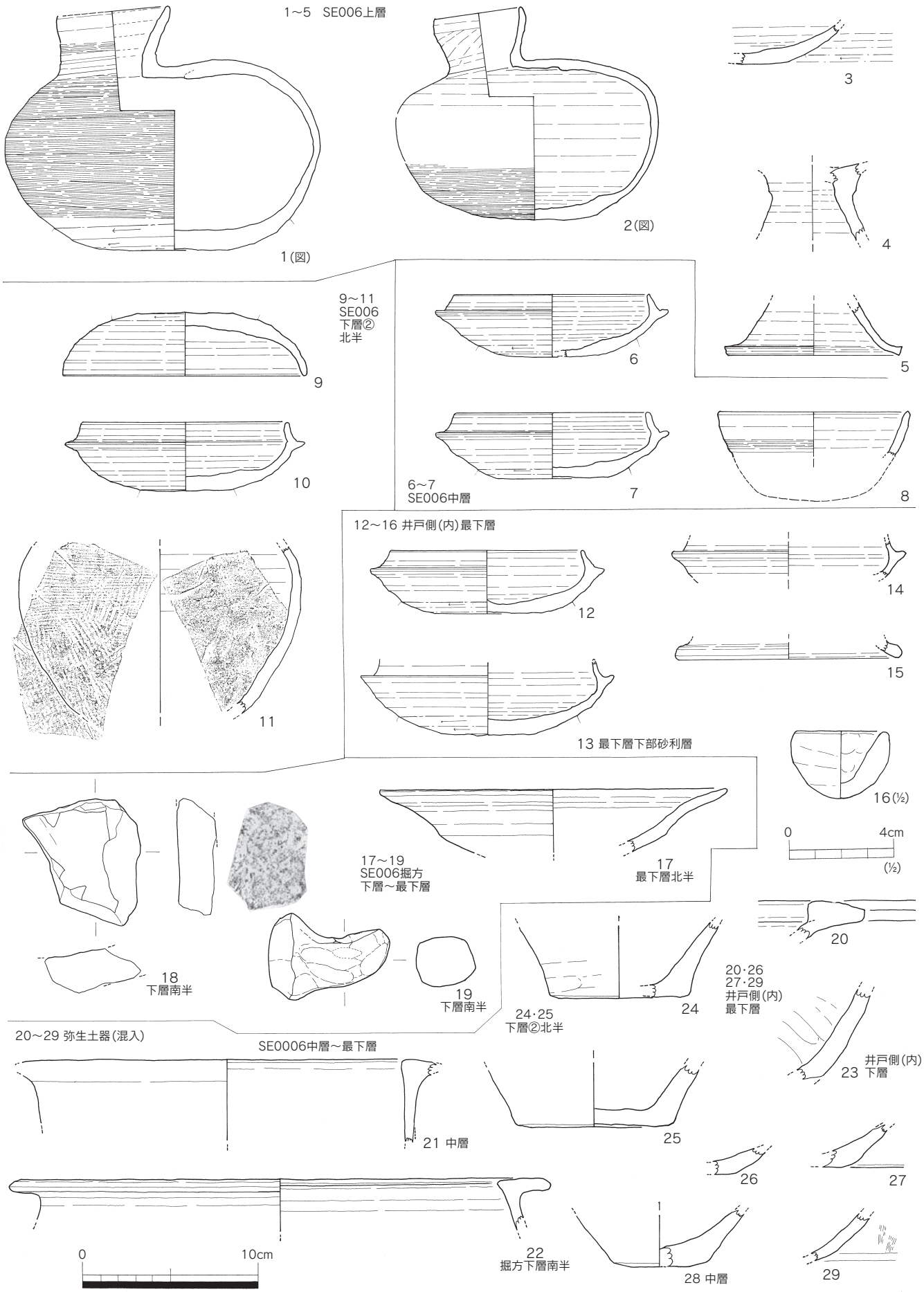


Fig.18　　SE006出土遺物実測図(1)（S =1/3, 一部1/2）

本主柱の一つだろう。このピットと南辺の距離を測り、北側の対応ピットの位置を推定すると、最短でも南北辺は 2.6 m以上になる。床面は北側がわずかに高くなる。竪穴北辺は検出外のためカマドの有無は不明。方位はN－60°－Wで、**出土遺物**には須恵器甕片や混入した弥生土器片があるが（Fig.20－19・22)、細かい時期決定は難しい。おそらくⅢB期～Ⅳ期前半（8 頁注 4）であろう。

・**SC008**（Fig.14、ＰＬ．８－2,11－4・5,12－1）

SC007 と SX016 に切られる。南北 2.2 m×東西 1.2 以上。深さ 6 ～ 8cmの遺存。SC009 より新しい。東辺と南辺、北辺に壁溝・壁際ピット（小穴）が断続的にある。南辺が湾曲し西側で北に屈曲しそうに見えるが、これは掘方凹みの形態で、実際の壁は壁溝方向に直線的に延びると思われる。ただし南北 2.2 mというのは間違いなく、那珂遺跡群ではⅢB期～Ⅴ期前後に最小一辺２m前後の竪穴建物が存在し（同様の小規模竪穴にカマドが付設する那珂 125 次例がある)、特に問題は無い。主柱穴は不明だが、主柱穴が無いタイプだろう。北辺が切られカマドの有無は不明。方位はN－44°－W前後。**出土遺物**は少なく、図化遺物もわずかだが（Fig.20－20・21)、須恵器高坏片からⅢB期～Ⅳ期前半だろう。

・**SC009**（Fig.14、ＰＬ．８－2,11－4・5,12－1）

SC007・008、SX016 に切られる竪穴建物。南側の壁が平行して二つあり、建替と判断した。内側の新しい方を **SC009 新**、外側の古い方を **SC009 古**とする。前者は南北 2.4 m×東西 1.6 m、後者は南北 2.6 m。深さは5cm以内の遺存しかない。東辺と SC009 古の南辺に断続的な壁溝ないし壁際ピットがある。掘方にはわずかな貼床があった。主柱穴が不明で、SC008 同様に主柱が無いタイプの竪穴建物であろう。北辺が切られカマドの有無は不明。方位はN－56°－W で SC007 に近い。出土遺物が少なく時期の詳細は不明だが、SC008 に先行するも近い時期と考えられ、**SC010** を切るためⅢB期かそれ以降。SC007・008・009 の覆土は全て極暗褐色～暗褐色土で類似していた。SC009 古南辺の南側 30 ～ 40cmにも平行する小溝があり、壁溝痕跡とみられ、SC009 古よりさらに先行する竪穴建物痕跡と考える。

・**SC010**（Fig.5、ＰＬ．８－2,12－1）

SD005 と SC009 の間で検出した方形竪穴建物の貼床範囲。少し下げたらすぐに地山上面となってしまった。北辺は壁の立ち上がりが判明し、南辺は貼床範囲が分かるので、南北 2.6 m×東西 2.0 m以上となる。方位は、北辺からN－35°－E（南北軸だとN－55°－W）となり、SC009 とほぼ同じである。小型竪穴建物が多い古墳後期後半以降だろう。北辺があるのでカマド痕跡が期待されたが、検出時はすでに貼床面下部であり削平された可能性が高い。壁溝も不明だが、これも浅い場合は痕跡を残さない。**出土遺物**に須恵器があり（Fig.20－23)、坏蓋とすればⅢB期前後である（図は天地逆か)。

・**SX081**（Fig.15、ＰＬ．12－2,13－1・2）

Ⅰ区西側の竪穴建物群やピット群などを調査し、その全てのベルト（重複関係を残すベルト）を除去した後に明確になった円形状のピット列。樹木痕の可能性があるピットを除いて図上で復元した。復元半径 2.9 mの円弧をなすが、竪穴の壁はもう少し外側であるから（壁自体は完全に削平される)、半径 3.2 ～ 3.4 mとなり、径 6.4 ～ 6.8 mの円形竪穴建物（竪穴住居）となるだろう。**SP1001** は、位置的に想定される中央土坑の両脇二柱穴の一つである可能性がある。出土遺物は不明確だが、周囲の調査例から弥生時代中期後半～中期末の竪穴建物であろう。調査区内に須玖Ⅱ式～後期初頭の弥生土器片が多くあり、それらが伴う遺構があったはずなので、この SX081 はその候補の一つになる。

・**SX201**（Fig.5、ＰＬ．８－2,12－1）

SC010 貼床跡を切るような小溝だが、SC010 の貼床が薄くすぐ地山になったので、その関係は微妙。北側は SD005 に切られ、南北長 75cmの遺存。南端が西側に屈曲して終わるが、削平された竪穴建物隅角の壁溝だろう。方位はN－32°－W。時期は不明確だが、古墳時代後期以前の可能性もある。

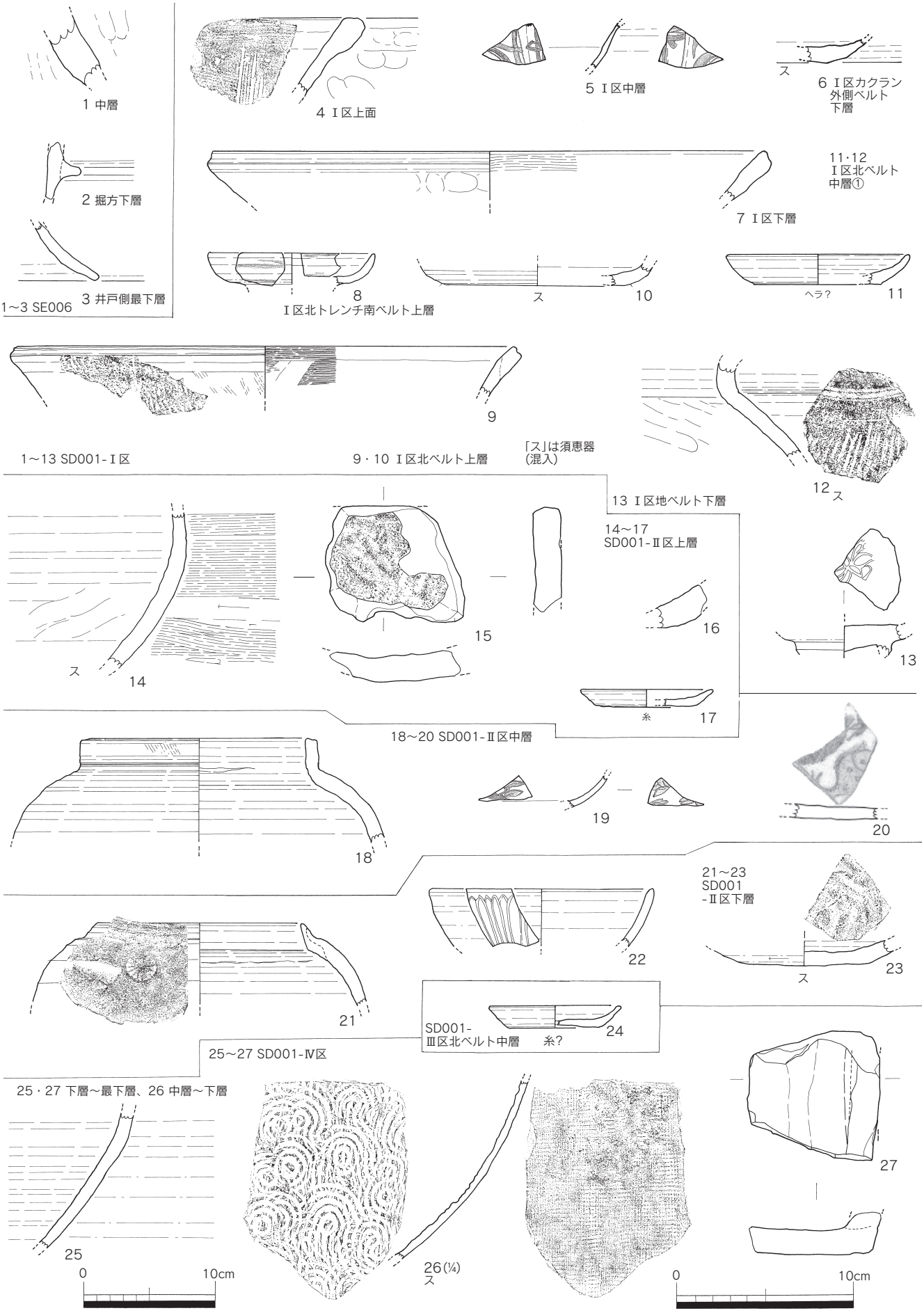


Fig.19　SE006(2), SD001(1)出土遺物実測図（S=1/3, 一部1/4）

・SX202（Fig.5、ＰＬ．12 － 1）

SC009 の南東側にある柱穴と浅い溝状遺構が連なる遺構。竪穴建物の壁溝ないし掘方の壁際掘り込みだろう。全長 1.75 m前後の遺存で、方位はＮ － 61° －Ｗ。北端のピット列は西側に屈曲するようにも見え、完掘後状況は西側が床面状の浅い凹みとなり（ＰＬ．12 － 2)、竪穴建物の痕跡だろう。方位は SC009 に近いが、SX081 を構成する柱穴に切られ、弥生時代中期の方形竪穴建物の可能性がある。

・SX203・SX012（Fig.5、ＰＬ．12 － 1）

SX203 は SX202 と SD005 の間にある小溝で、70cm 長しか遺存しない。北側は SX014 に切られ、南側は削平で消える。この溝の西側は検出時に貼床状であったので、竪穴建物の壁溝痕跡とみられる。方位は上記 SX202 とほぼ同じ。SX012 は西側を風倒木痕 SX003 に切られる貼床痕跡の範囲。検出時に確認したが、表面精査を何度もしているうちに消失した。確認できたのは 1.1 × 1.0 m。SX203 の延長と貼床確認範囲の東辺が合致し、同一遺構の可能性がある。須恵器小片があり（Fig.20 － 24)、Ⅳ期前後。

（４）谷状落込み（造成）遺構（SX002；Fig.5、Fig.16・17、ＰＬ．１,13 － 3 ～ 6）

SX002 は調査区東側の落込み遺構。周囲地形に残る（現状は道路がその上を走る）谷状地形の西側肩部である。谷状地形自体は、SD001 の位置と走行方向から少なくとも中世には存在した可能性が高いが（那珂 58 次例から弥生時代中期の時点でも何らかの地形上の鞍部があったと思われる)、今回の調査により近世以降に段丘間の鞍部ないし小谷部をさらに広げて造成した可能性が高いことが判明した。まず落ち込み検出後は、近現代以降に埋め立てた上部層のみ重機で掘削した。重機で掘削が不足した近代層下部は人力で掘削したが、以下はトレンチを落込み方向（落込み上端と直交方向）に６箇所入れて土層断面を観察した。調査の早い段階で掘削した１・２トレンチの状況から底面はかなり深くなることが分かり（２トレンチは底面に達していない)、全掘すれば相当の土量となり時間的予算的に厳しいこと、また調査区東側の調査時現況の道路際擁壁の保全から深く掘削するのは危険なこと（表土や落込み覆土上部はしまりが悪く、深く掘削すると崩落の恐れがあった)、この２点から全体は下部を掘削せず、上記トレンチ６箇所のみの調査とした。各トレンチも、調査期間と梅雨時であったことも影響し湧水が激しかったことから、１トレンチのみ地山まで掘削した他は途中で掘削を断念した。以下簡単に記すが、１トレンチで顕著に分かるが（ＰＬ．８－ 2)、まず大きく外側まで掘削され（Fig.16 上段 65・66 層)、一部埋没した後に、細い逆台形状の溝が何度も掘られたことが分かる（１トレンチ溝イ～ニ)。おおむね、西側（外側）の溝が古く、東側に向かって新しくなる。東側現状が道路であるであるので、あるいは先行する切り通し道路があり、その側溝の可能性も考慮される。ただしその場合、東側に想定される谷部地形の底面が深いと予想されるのと矛盾が生じる。そのため水路など別の機能も考えられる。他のトレンチでも土層の不整合が観察され、いずれも埋没しては溝を掘り返すという状況が想定されるが、１トレンチで検出した細い逆台形溝が全て延びるのか（ただし１トレンチ溝イは落ち込み全体の一部を掘削した可能性も排除できない)、谷状地形落込みの幅を狭めながらも全体的に掘削し直したものなのか、判断は難しい。こうした溝ないし落込みの再掘削の繰り返しは、近代に入ってて行われなくなったとみられる。１トレンチ溝イ上部の段差(凹み)は、SX002 の調査面の調査区東縁に沿ってで北に延びていて、近代前期の堆積層である。出土遺物には（Fig.20 － 27・28,29 － 1 ～ 15)、上層（重機掘削後の検出面）や上記凹みに近代前期の遺物があり、トレンチ内には近世遺物がある。その他、弥生時代から中世までの遺物が多く混入する。正確な時期は不明だが、近世のある時点（少なくとも 18 世紀）には以前から存在した段丘間の小谷部（鞍部）を拡張するような造成工事があり（谷部中央には水路が掘削された可能性もある)、造成した谷部がある程度埋没するごとに再び大きく掘削し、落込み際に側溝状の条溝

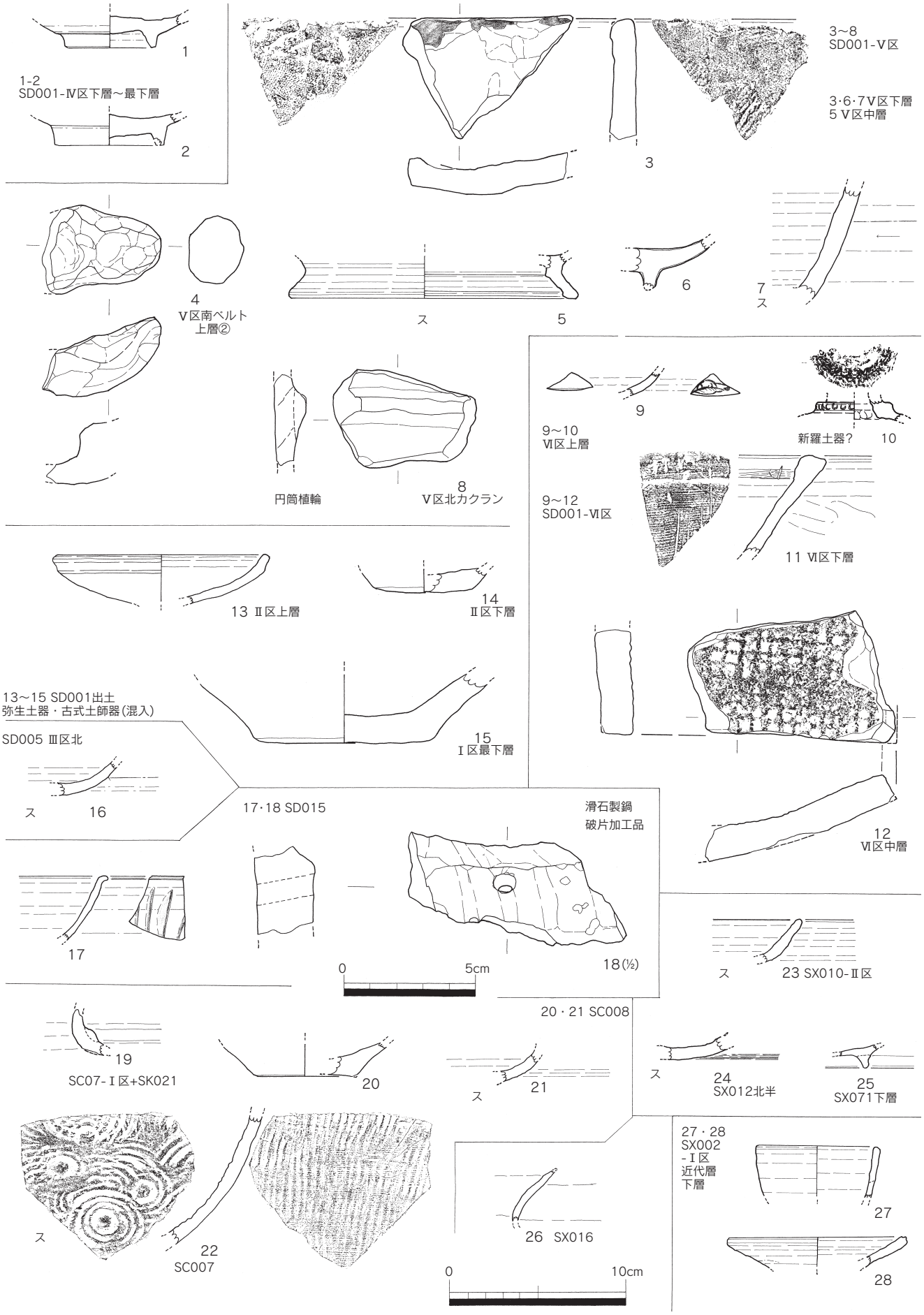


Fig.20　SD001(2)，その他SD，SC，SX出土遺物実測図(2)（S=1/3，一部1/2）

が何度も掘削され、最終的に近代以降は現在に続く切通状の道路となったと考えられる。

３．出土遺物（Fig.18 ～ 22、ＰＬ．14）

以下、出土遺物について記述するが、紙幅も少ないので簡潔に記す。また報告すべき情報の一部（個々の遺物の出土遺構・層位など）は挿図中に記し、ここまでの各遺構の報告で記述したものもある。

（Fig.18）１～15 は須恵器。１・２は平瓶。３は坏身ないし坏蓋。正確な径は不明だが坏蓋にして径 14 ～ 15cm になると予測され、ⅢＡ期前後か。４・５は高坏。８は古相の坏Ｇの坏身。６・７・10・12・13 はⅣ期初頭～中頃までの坏Ｈの坏身。９はⅣ期前半の坏Ｈの坏蓋。以上、坏身に出土が偏る。11 は壺。外面平行タタキ後カキメ、内面は当具痕をナデ消し。15 は高杯の脚裾部か。16 は土師器の手ずくね小埦。祭祀行為に関わるものか。17 は土師器の高杯。宗像周辺に多い形式だが福岡平野にもある。Ⅳ期併行で問題ない。18 は土師質の**初期瓦**平瓦片。外面やや粗い格子目タタキ。Ⅳ期前半での出土は稀で、類例の検討が必要。19 は土師器の把手。鍋・甕か甑かは不明。20 ～ 29 は弥生土器。20・21・25 は須玖Ⅰ式の壺と甕、22・24 は須玖Ⅱ式の甕と壺、23・28 は後期後半の甕、26・27 は後期前半～中頃の壺と甕、29 は終末期の甕。中期前半（須玖Ⅰ式）から終末期までがある。

（Fig.19）１～３は弥生土器。１は支脚または器台。後期～終末期か。２は壺の胴部突帯として図示したが、天地逆で瓢壺の肩部の可能性もある。３は高坏脚部だが、図化していないが破片中位上に穿孔痕跡があり、赤色顔料（ベンガラ？）が付着する。2･3 は中期末～後期初頭。**４以下**は SD001 出土。４は土師質土器摺鉢。中世末～近世初期。５・８・19 は肥前陶磁の染付磁器の碗皿類。６は須恵器坏Ｈの身。７・９は土師質土器の捏鉢。10 は須恵器の坏Ｈの坏身。径は不確定だが比較的大きくなり、坏蓋にして径 15cm前後か。ⅢＡ期。11・17・24 は土師器小皿。いずれも外底回転糸切り。12 は須恵器の壺だが、外面は、木目直交平行タタキ、内面は当具痕を丁寧にナデ消し、頸部屈曲などからあるいは陶質土器の可能性もある。13 は龍泉窯系青磁碗。14 は須恵器の壺。15 は平瓦。16 は分厚い器壁の軟質焼成土器だが内面が被熱で褐色に変色して表層が溶融気味で、坩堝ないし取瓶だろう。南の那珂８次で取瓶があり、弥生中期末前後か。青銅器生産関連遺物。18 は口縁部が短く直立する須恵器無頸壺。Ⅴ～Ⅵ期のもの。20 は肥前陶磁染付大皿。21 は土師質土器の湯釜。中世末～近世前期。22 は龍泉窯系青磁の碗。15 ～ 16 世紀（明代）のもの。23 は須恵器の坏Ｈの身で、内底に当具痕が残る。24 は褐釉陶器の壺。中世前期の輸入陶磁。25 は須恵器の甕。外面格子目タタキ、内面同心円文当具痕。薄い器壁でやや古いものか。27 は土師質の方形火舎。近世前期。

（Fig.20）１は肥前陶磁の染付磁器碗。内底蛇の目釉はぎ。18 世紀頃。２は中世前期の輸入陶磁の白磁碗。３は須恵質（硬質）焼成の平瓦。内面布目痕、外面ナナメ平行タタキ後ヘラナデ。古代瓦。４は土師器の把手。５は須恵器の脚台付壺の脚台。Ⅵ期前後。６は龍泉窯系青磁碗。中世後半期の型式。７は須恵器の壺か。８は円筒埴輪片。Fig.21 －７も同様で、本来は東光寺剣塚のものだろう。９は肥前陶磁の染付磁器碗。10 は**新羅土器**の細頸壺の頸部と考えられ、頸部突帯の側面と上面に半裁竹管文が連続して施文される。おそらく７世紀前半の型式（洪潽植 1999）。11 は瓦質土器の擂鉢。近世初期。12 は内面に格子目タタキ当具痕がある特異な平瓦。外面はヘラナデ。中世か。13・26 は古式土師器。

13 は庄内式系小型器台。26 は筑前型庄内甕Ⅰ式（久住 2017）の口縁部。14･15･19･20 は弥生土器。14 は後期後半から終末期前半の甕、15 は後期前半の壺。19 は外面丹塗で、袋状口縁壺ないし細頸壺。須玖Ⅱ式。20 は須玖Ⅱ式の壺。16･21 ～ 24 は須恵器。16 は坏Ｈの身。21 は高杯坏部。22 は甕の胴部下半片。外面は木目直交平行タタキ後にカキメ。23 は天地逆とみられ坏Ｈの蓋だろう。24 は細かいカキメがあり、壺か瓶類の底部。17 は中世前期の輸入陶磁の白磁碗。18 は滑石製鍋破片再の加

工品で穿孔あり。25は内黒の土師器台付埦。9世紀前後。27･28は肥前系陶器の小碗と皿。18世紀頃。

（Fig.21）1･2･4･6･11は肥前陶磁ないし肥前系陶器など。1は陶器の行平鍋。鉄鉢の上に白濁釉。内面は橙色釉が下地にある。19世紀か。2は外面灰オリーブ色釉の陶器甕。4は褐色鉄釉の陶器甕。

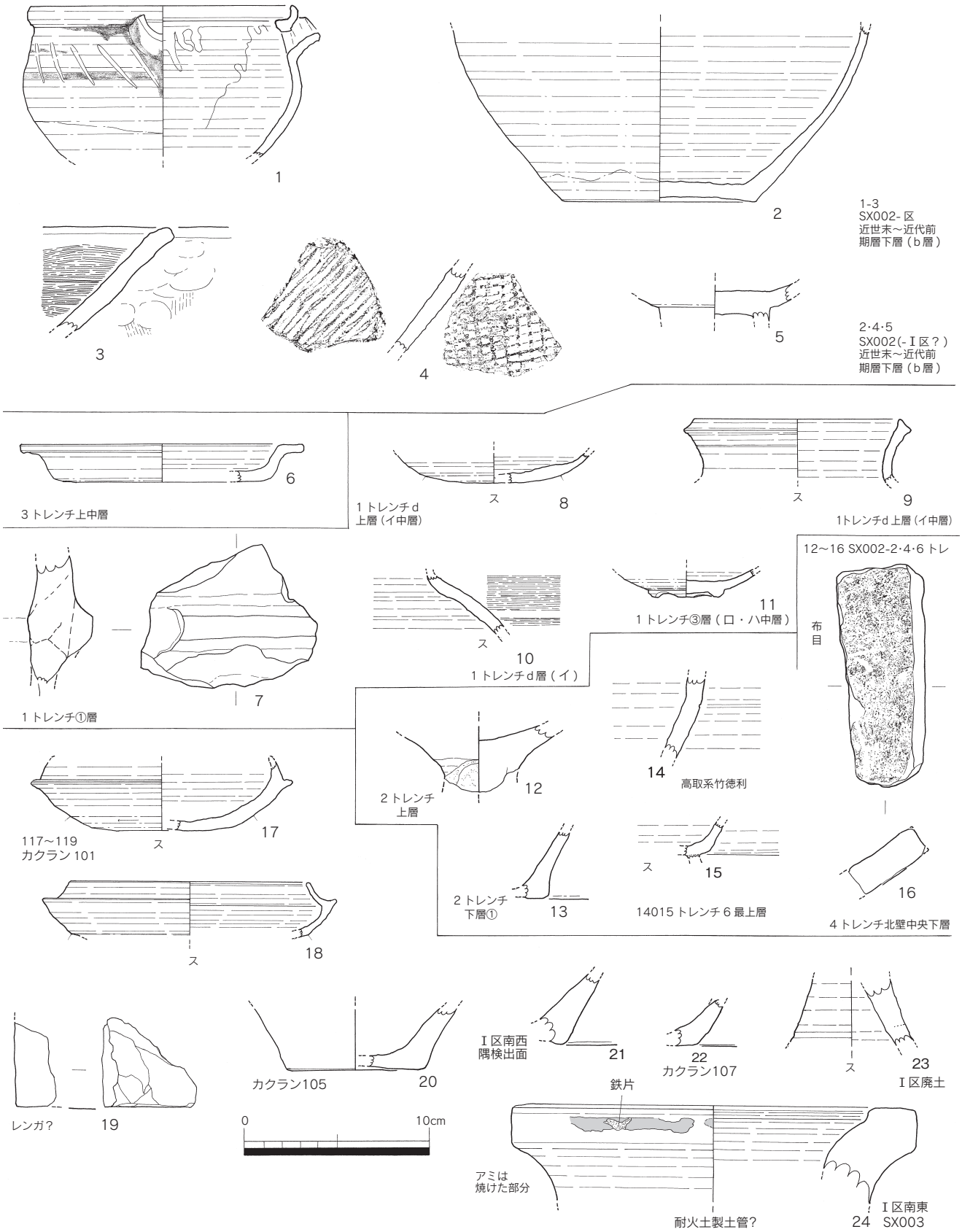


Fig.21　SX002およびカクランその他出土遺物実測図（S=1/3）

6 は褐色鉄釉の皿ないし蓋。2・3 は近世後期以降。11 は抉り高台の白磁埦。18 世紀。14 は高取系竹徳利とするが、中世前期の褐釉陶器壺（輸入陶磁）の可能性もあり。5 は龍泉窯系青磁碗。中世後期。8・9・10・15・17・18・23 は須恵器。8・17・18 は坏Hの身。17 はⅢB期。18 は径が大きくⅢA期か。受部から立ち上がりの断面形状が特異で、**八女系須恵器**。9・10 は壺類。15 は高台付坏身。Ⅵ～Ⅶ期。23 は高杯脚部。Ⅴ期以降。12・13・20 ～ 22 は弥生土器。12 は後期の高杯か。13・20・21 は中期の甕。22 は後期初頭～前葉の甕。15 は土師質で**初期瓦**の平瓦。内面布目痕、外面摩滅し不明。19 は近代の煉瓦片。24 は耐火土を用いた近代陶器で土管か。口縁部外面に被熱痕と鉄片付着。

（Fig.22）よくしまった**阿蘇凝灰岩製石製品**の残欠。凝灰岩でよいが通常よりも硬質で比重が重い。多くの面が破損・剥離で生きていないが、加工面が辛うじて生きている部分が何面かある。元の形状は不明だが、柳沢一男氏によると、古墳時代後期の**石製表飾**（石製樹物）とすれば、考えられるのは**石製靫の頭部**の直方体部の一部の可能性があるという。元来は**東光寺剣塚**の墳丘上のものだろう。

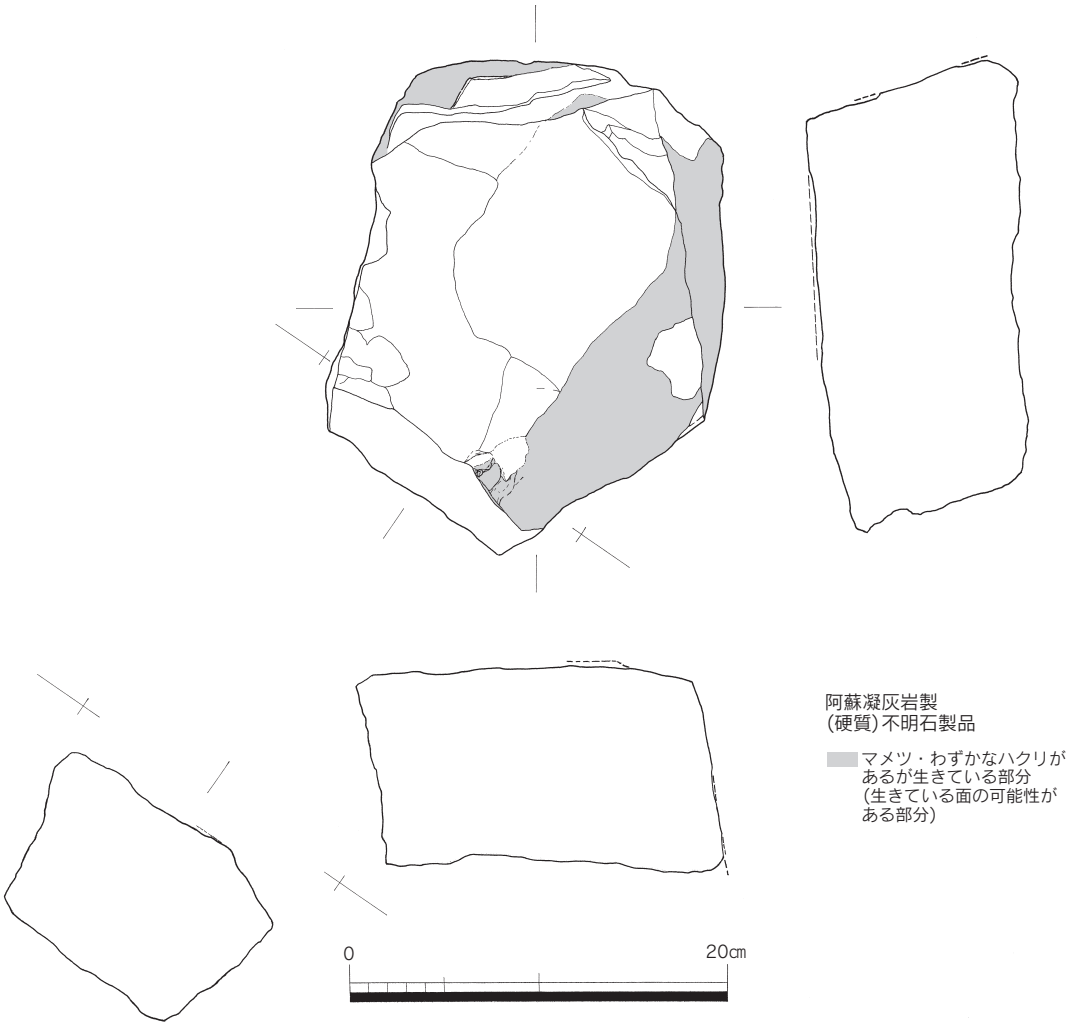


Fig.22　SE006 最下層出土石材（石製品？）実測図（S=1/4）

Ⅲ．自然科学分析

・那珂遺跡群156次発掘調査にかかる自然科学分析業務委託報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．はじめに

今回の分析調査では、古墳時代後期～飛鳥時代の井戸(SE06)埋積物の花粉分析を行い、周辺植生に関する情報を得ることを目的とした。

２．試料

試料は、古墳時代後期～飛鳥時代の井戸(SE06)埋土のうち、円形井戸側内の3層(サンプル2)・4層(サンプル1)、方形井戸枠板内の11層（サンプル4）、対象試料として井戸枠外の充填堆積物46層(サンプル3)より採取された4点である。

各試料の層相は、4層が褐～暗褐色粘土（ブロック状）、3層が褐色泥ブロックが混じる暗褐色粘土、46層は褐色泥ブロックが多く混じる灰褐色シルト質粘土（ブロック状）、11層が暗褐色泥ブロックが混じる褐色シルト質粘土（ブロック状）である。

４．分析方法

試料約10gについて、フッ化水素酸による泥化、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液(臭化亜鉛，比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9：濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman(1952,1957)、Faegri and Iversen(1989)などの花粉形態に関する文献や、島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。結果は計数結果の一覧表として表示する。

５．結果

結果を表２に示す。花粉化石・シダ類胞子はPh.１に示すように保存状態が悪く、表面に風化の痕跡がみられる。また、種類数、個数共に少ない。分析残渣も非常に少なく、全量～1/2量についてプレパラートを作成し、検鏡を行う。分析残渣の多くは、溶け残った鉱物や褐色の植物片が多く、黒色の炭片は少ない。

4層では、イネ科が7個体、アカザ科が4個体、シダ類胞子が58個体認められる。

3層では、イネ科が1個体、アカザ科が3個体、シダ類胞子が31個体認められる。

11層では、シダ類胞子が5個体認められる。

46層では、マツ属が１個体、シダ類胞子が23個体認められる。

表４.花粉分析結果

種　類	地点・層位			
	SE06			
	4層	3層	46層	11層
木本花粉				
マツ属	－	－	1	－
草本花粉				
イネ科	7	1	－	－
アカザ科	4	3	－	－
シダ類胞子				
他のシダ類胞子	58	31	23	5
合　計				
木本花粉	0	0	1	0
草本花粉	11	4	0	0
シダ類胞子	58	31	23	5
合計	69	35	24	5

6．考察

今回調査を行った井戸(SE06)埋土は、花粉化石の保存状態が悪く、ほとんど検出されなかった。一方、シダ類胞子はやや多く認められたが、それらも表面に風化の痕跡が認められた。花粉化石は好気的環境に弱く、早い段階で分解することが知られている(中村、1967など)。また、シダ類胞子は花粉化石に比べ、スポロポレニンの量が多く(Stanley&Linskens,1974)、風化に対する耐性がある(徳永・山内,1971など)。これらのことを踏まえると、今回の井戸埋土試料の花粉・胞子化石の産状は堆積時・後の風化作用の影響を示唆している。試料の層相をみると、井戸壁や井戸周囲から崩落あるいは流入した井戸の基盤をなす堆積物ブロックが含まれている。このような層相を踏まえると、調査層準の井戸埋土は堆積速度が速く、花粉・胞子が取り込まれにくい環境にあった可能性がある。この点については井戸埋土の形成過程を踏まえた評価が必要である。

本遺跡群では、那珂遺跡14次調査区で花粉分析が実施されている(野井,1992)。その結果によると、14次調査区では、弥生時代前期以前に周辺が照葉樹で囲まれた沼沢地から、しだいに排水の良い比較的乾燥した土地に変化していき、干上がった後、人間が住み着いたと推定されている。また、隣接する比恵遺跡24・25次調査区の花粉分析(野井,1991)によると、弥生時代前期にはシイ属・アカガシ亜属などの照葉樹林要素と、落葉広葉樹のエノキ－ムクノキ属、針葉樹のマツ属を交える植生が存在し、弥生時代中期になるとシイ属、アカガシ亜属が優勢になり、特にアカガシ亜属がシイ属よりも優勢になることが確認されている。また、低地では弥生時代前期後半にやや縮小するものの、稲作が行われていたことが推定されている。このように本遺跡周辺では、弥生時代前期～中期に森林植生が成立可能な領域において、常緑広葉樹林が優勢であったことがうかがえる。また、低地では稲作が行われていたと考えられている。ただし、古墳時代以降については分析事例が少なく、当該期の植生については不明である。先述したように花粉・胞子などは風化作用により分解消失するため、建物などが存在する人間活動領域では花粉化石が残存していない可能性が高い。そのため、今回のような井戸などの遺構を対象に今後も分析調査を実施するとともに、調査区が位置する氾濫低地の地形発達過程、土壌生成作用の状況、さらに土壌生成層準の植物珪酸体分析を実施し、考古学的調査成果と合わせた、植生の再生・更新に関する検討を行っていくことが大切と考える。

なお、北九州地域の花粉分析結果の総括(Hatanaka,1985）に基づくと、古墳時代～飛鳥時代頃の花粉化石群集は草本類の割合が高い。特にイネ科の割合が高く、イネ属型花粉も多く検出されている。また、イネ属の植物珪酸体や炭化米、籾なども検出されていることから、氾濫低地などを中心に稲作が広い範囲で行われるようになったと推定される。イネ科花粉の多産は、耕作地を開発するために周辺が切り開かれ、草地化が進んだことが原因の一つであるとみられる。このほかソバやムギ類、マメ類、アワなど雑穀類の種実も北九州各地の遺跡で検出されており、これらの栽培・利用も行われていたと考えられる。一方木本類では、マツ属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属が多産する。マツは生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。マツ属花粉の増加は、周辺が切り開かれた結果、マツ二次林の分布が拡大したことに由来すると考えられる。その他、アカガシ亜属やシイ属は、ヤマモモ属、ツバキ属などとともに暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素であり、開発が進んでいない場所においては、自然度の高い森林が形成されていたとみられる。なお、九州地方の植物珪酸体分析では、イスノキ属やクスノキ科といった、常緑広葉樹由来の樹木珪酸体がみられる杉山(1999)。これらは常緑広葉樹の主要な樹種であるが、クスノキ科は花粉外膜が弱いため花粉化石としては検出されず、イスノキは虫媒花のため花粉化石が検出されることは希である。これらもシイ・カシ類と同様に、自然度の高い場所に生育していたとみら

れる。このように、花粉化石では検出されない、もしくはされにくい樹種の中には植物珪酸体で検出される種類もあるため、複合的に考えることは重要である。

＜引用文献＞

Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I).Almqvist&Wiksells,539p.

Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteriodophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II),147p.

Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.

藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アクアコーラル企画,155p.

Hatanaka Ken'ichi,1985,Palynological stadies on the vegetational succession the Wurm Glacial Age in Kyusyu and adjacenet areas.Journal of the faculty of Literature,Kitakyusyu UniveraSity(Series B),18,29-71.

畑中健一・野井英明・岩内明子,1998,九州地方の植生史.図説　日本列島植生史,安田喜憲・三好　教夫編,朝倉書店,151-161.

黒田登美雄・畑中健一,1979,花粉分析よりみた北九州の過去２万年間の植生変遷.花粉,13,3-8.中村純,1967,花粉分析.古今書院,232p.

中村　純,1980,日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ(図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第12,13集,91p.

野井英明,1991,比恵遺跡第24次、25次調査によって得られた試料の花粉分析.福岡市埋蔵文化財報告書第255集　比恵遺跡群(10),福岡市教育委員会,229-233.

野井英明,1992,那珂遺跡群14次調査によって得られた試料の花粉分析.福岡市埋蔵文化財報告書第291集　那珂5,福岡市教育委員会,265-266.

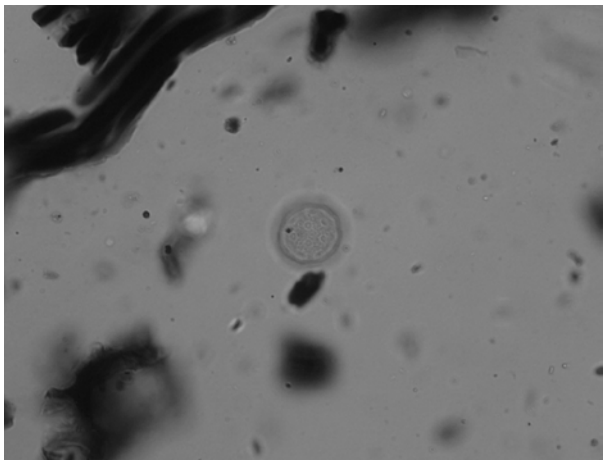
島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第5集,60p.

Stanley Robert&Linskens Hans,1974, Pollen: biology, biochemistry, management,Springer-Verlag Berlin Heidelberg New York,307p.

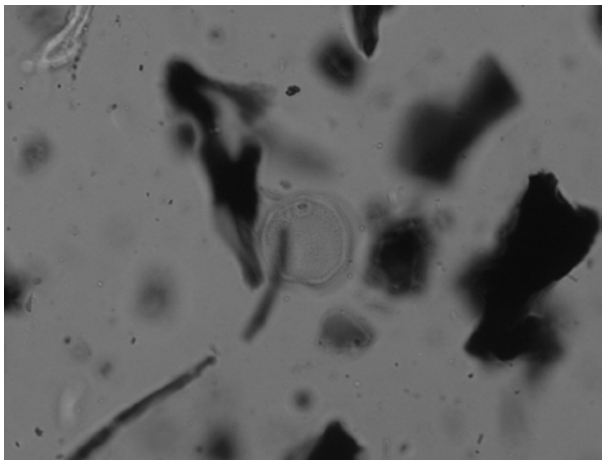
杉山真二,1999,植物珪酸体分析からみた最終氷期の九州南部における照葉樹林発達史.第四紀研究,38,109-124.

徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社.50-73.

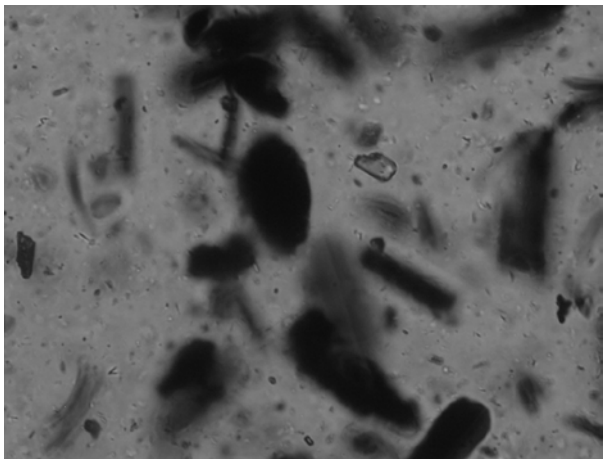
Ph. 1　花粉化石



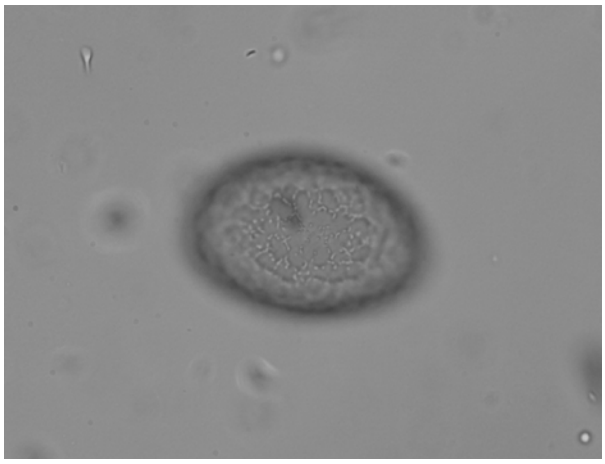
1）アカザ科 (SE06　4 層)



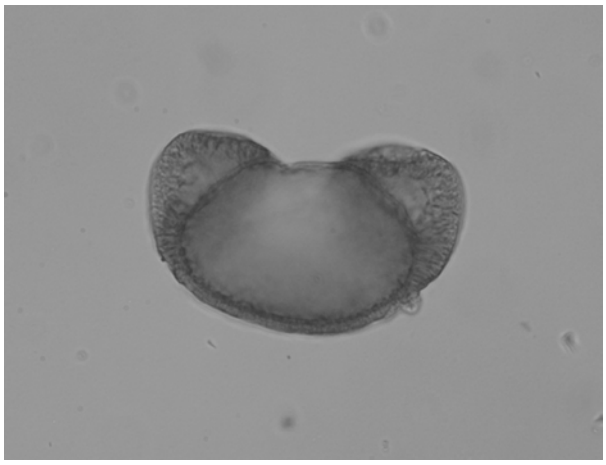
2）イネ科 (SE06　4 層)



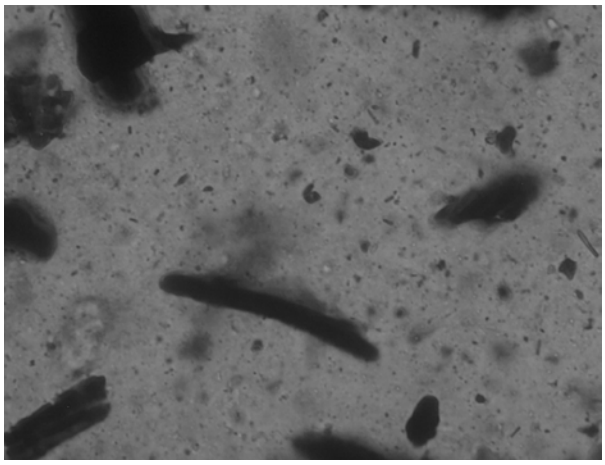
3）状況写真 (SE06　3 層)



4）シダ類胞子 (SE06　46 層)



5）マツ属 (SE06　46 層)



6）状況写真 (SE06　11 層)

50 μm

Ⅳ．調査のまとめ

１．遺構の変遷と那珂 156 次調査の意義

那珂 156 次調査では、時代順に以下の遺構群を検出した。①**弥生時代中期後半～後期初頭**、②**古墳時代後期後葉～飛鳥時代前半期**（須恵器ⅢＢ期～Ⅳ期）、③**中世前半期**、④**中世末期～近世初期**、⑤**近世以降**、である。①の遺構には **SX081**（円形竪穴建物）のほか、**SX202** が方形竪穴建物として存在した可能性がある。また SD001 出土だが坩堝ないし取瓶の残欠があり（Fig.19 － 16）、南側の８次調査にみられた青銅器生産が本調査区にも及んでいた可能性もある。②以前の弥生時代中期前葉～中頃（須玖Ⅰ式）の土器片や、②以後の後期前葉から古墳時代前期前葉までの土器片が少なからずある。遺構は削平されて不明確になったものの、集落はや弥生後期前葉から古墳前期前葉まで本調査区ないし直近の周辺域で継続していた可能性が高い。これは調査区南側の８･69 次調査の傾向と同じである。次に②の時期だが、井戸 **SE006**（Ⅳ－１～２期）のほか、竪穴建物 **SC010**（ⅢＢ期？）→ **SC009**（古･新）→ **SC008** → **SC007**（Ⅳ期？）、**SX203・012**（Ⅳ期？）、溝状遺構 **SD005** と **SD014** がある。これらはおおよそ方位がそろう傾向にある。那珂遺跡群全体の遺構群が正方位化する（2 － 10 頁「周辺の地理的歴史的環境」参照）。Ⅴ期以降の確実な飛鳥時代後半期遺構はない。周囲調査（８・69 次）の成果からは、南北方位の条溝の延長が本調査区にも及ぶ可能性があったが（Fig.3）、そのうち西側溝延長部（８次 SD003 － 001、SD004 － 008 － 009）は撹乱が激しく削平されたとみられ、東側溝延長部（８次 SD001 － 69 次 SD036）は SD001 と落込み SX002 により消失した可能性がある。しかし後世遺構や撹乱などからは、先行するⅢＡ期や、②以降のⅤ～Ⅶ期（飛鳥時代後半期～奈良時代初頭）の須恵器が認められる。**初期瓦**も若干ながら存在し、南側の８次 SD001 である程度まとまった出土量があることから、比較的近隣のどこか（西側か）に初期瓦を葺くような建物が存在した可能性がある。③の時期は明確なものは **SD015** のみである。しかしこれも後世遺構（SD001、SX002）に一定量当該期の遺物が存在するので、もう少し遺構が展開していただろう。周囲を見ると、８次 SD002 ＝ 69 次 SD037 の同一時期の溝と直交方位であり、あるいは方形の屋敷地を囲む溝の一部であった可能性がある。その範囲は SD015 の延長が 43 m以上、８・69 次溝延長が 57 m以上で、その場合想定される南東隅角部は 24 次と 69 次の間になる。④は戦国時代後半期（16 世紀）掘削と推定される **SD001** があり、近世初期までは何度か掘り直しがなされたとみられる。SD001 の西側上端（肩部）のやや西側には**柱穴列**が認められ、柵列の可能性がある。他の遺構はないが、東側が低く西側が高くなる地形の変換線に掘られた SD001 は、柵列の存在可能性も合わせて、戦乱の世に備える城館の一部であっただろう。この堀は、南東側は少なくとも 69 次の南東端まであと 60 m以上続いており、北側もまだ続くから、相当な規模の城館が存在したことになる。今回の調査の土層断面の観察や 24 次（SD001 － 002）で顕著に判明したように、大規模な掘り直しが途中で行われている。那珂遺跡群では当該期の堀（壕）が走り、相互関係についても整理検討する必要があるだろう。

このように那珂 156 次調査では、弥生時代中期以来の集落遺構の消長と土地利用の変遷をとらえることができた。これは周辺の調査と合わせ、那珂遺跡群全体の土地利用の変遷の復元に資するものであり、地域の歴史を明らかにする基礎的作業となったと言える。

また、特に**②の時期（古墳後期後葉～飛鳥時代前半期）**が注目され、別項を設けて考察したい。

２．環境の変遷について～植生変遷解明のためのデータ蓄積の必要性について～

今回の調査では、井戸 SE006 の下層覆土について土壌サンプルを採取し、当時の周辺環境復元に関する情報を得るため、周辺植生復元に適した花粉分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。結果としては、採取した覆土（埋土）の花粉化石の保存状況があまり良好ではなかったので、望んだよ

うな結果は十分には得られなかった。結果論であるが、より湧水レベルに近く滞水状態で花粉化石などが残りやすい下層の井戸側内覆土を採取してサンプル提供できればより適切だったと思われる。

今回この自然科学分析委託を行おうと考えるに至ったのは、古墳時代後期から飛鳥時代の「那津官家」の時代に関するそのような環境復元のためのデータがあまり無かったからである。比恵・那珂遺跡群の弥生時代から古墳時代前期については、花粉分析や種実同定によるデータ蓄積があり（「Ⅲ．自然科学分析」引用の野井英明 1991・1992、および比恵 100 次報告書＝市報告第 956 集）、植生変遷推定からの自然環境変遷の考察がある（田崎博之 1998）。しかし、古墳前期後半に比恵・那珂の集落が衰退した後、古墳時代中期にわずかな居住痕跡しかない時代があり、その後剣塚北古墳の築造や、東光寺剣塚古墳の築造を経て、「那津官家」の造営があり（比恵８・72 次、109・125 次ほか、2 － 10 頁「周辺の地理的歴史的環境」参照）、飛鳥時代には初期瓦を伴うような初期官衙を含む特殊な遺構群（「都市」と言ってもよい）が広がる過程において、植生変化があるはずだということが前提としてある。しかし弥生時代と異なりそれを裏付けるデータがない。これを解明するためには花粉分析などの自然科学分析が必要であり、井戸埋土下層には花粉化石などが遺存している可能性があるため、今後意識的に採取し分析していく必要がある。このためには、古墳後期から飛鳥時代だけでなく、古墳前期以降の通時的データが必要であり、これらの時期の**井戸や低湿地遺構**が発見された場合には、**サンプル土壌や自然遺物の採取**がまず必要である。弥生時代以来の「都市的」遺構群（久住 2008a・2009）が衰退して遺構が激減した古墳前期後半～中期には、**植生が回復して二次林が一部に形成された可能性**もあり、それが東光寺剣塚、那津官家の倉庫群や初期官衙が造営される過程で、再度弥生後期から古墳初頭にみられるオープンな植生に戻った可能性がある。こうした想定を実際の分析データで検証し、あるいは修正していく必要がある。

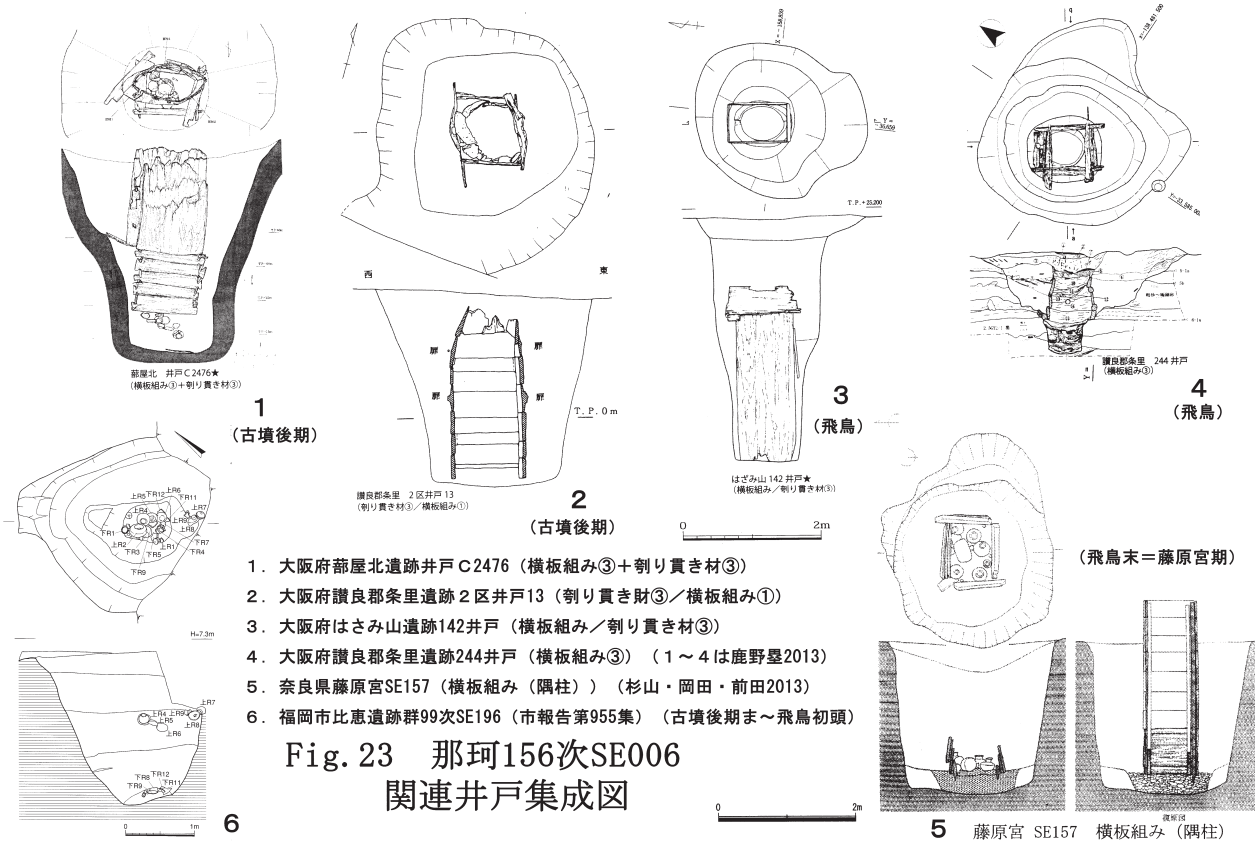
３．井戸ＳＥ００６に関する考察～飛鳥時代の比恵・那珂遺跡群小考～

井戸 SE006 は、一部不十分な過程もあったが、比較的詳細な調査と観察を実施することにより、方形板組（横板組）井戸枠と円形刳り貫き井戸側の複合的な組合せの状態を推定復元するに至った（Fig.7 ～ 9）。この復元案には若干の疑問もあるが、少なくとも方形枠と円形井戸側の複合的な組合せであったことは認められるだろう。さらにこの最下部に砂利を厚く敷き詰め濾過層とするという入念な構造となっている。このような井戸構造は、畿内中枢部（飛鳥・難波とその周辺）でも飛鳥時代後半期以降は多くなるが、それ以前はそれほど多くない。全く同じという構造はないが、井戸枠・側の組合せという観点では､河内（大阪府）の蔀屋北遺跡井戸Ｃ 2476（古墳時代後期）､讃良郡条里遺跡 244 井戸（飛鳥時代）などがある（Fig.23、鹿野塁 2013）。また底面礫敷構造というのも古墳後期から飛鳥時代も存在するが意外と少なく、藤原宮 SE157（Fig.23）などに代表されるように藤原宮期に一般化する（杉山拓己・岡田雅彦・前田俊雄 2013）。したがって、当該期では畿内中枢部でさえ一般化していない井戸枠・側構造（底面の砂利層＝礫敷構造を含む）が、飛鳥時代の初頭（Ⅳ－１～２期）というかなり早い段階に比恵・那珂遺跡群に存在するということ自体が非常に大きな意義を有している。

井戸構造だが、推定方形板組は隅部の木質痕跡土層の観察から、「井」字状の組合せではなく、「ㅍ」字状の組合せとなる。隅柱痕跡は認められなかったので、「積み上げ式横板組型井戸」（鐘方正樹 2013）の「相欠きＣ類」か「枘差し（通し枘）」タイプ、もしくは「井籠横板組」構造の隅角で組み合う一方のみが外側に突出するタイプかのいずれかであろう。ただしこれらの確実な出現は飛鳥時代末期頃とされており、板自体が遺存しない本調査事例の推定復元には疑問を持たれる方もいるかもしれない。ただし横板組で「積み上げ式」タイプ自体は、古墳時代中期の渡来人に関わる遺跡（韓式系土器多数出土など）において河内では古墳中期中葉に出現し（久宝寺遺跡 SE5002）、後期にはこれが多段化する例

がある（蔀屋北遺跡井戸Ｃ 2476）。同じく古墳時代後期には、隅角の横板の組合せで、「相欠き」や「枘」が認められない（鹿野塁 2013 の「横板組①」）、讃良郡条里２区井戸 13（Fig.23、古墳時代後期）のような平面「ヱ」状の横板組積み上げ式井戸枠もある（鹿野 2013）。この例などは那珂 156 次に近く、これに刳り貫き井戸側を挿入すれば同じようなものになる。そのため、「横板組型井戸」が導入された後に、すでに多様な変化がある可能性があり、今回想定復元した構造はありえないとまでは言えまい。いずれにしても、比恵・那珂には畿内やあるいは朝鮮半島の井戸構造の情報がダイレクトに入っているものと考えられる。調査区内出土の新羅土器細頸壺の存在（Fig.20－10）も考慮すると、あるいは朝鮮半島からの直接的な情報や井戸構築技術の伝播かもしれない。これは今後の検討課題である。

比恵・那珂では、弥生時代中期～古墳時代前期の井戸が突出して集中的に掘削・構築されていることが判明している（久住愛子・久住猛雄 2008）。古墳前期後半以降、後期初頭（須恵器 MT15 期）までは、比恵・那珂での集落遺構自体が少なく、井戸の構築もわずかである。ところが古墳後期前葉～中葉（ⅢＡ期、TK10 ～ MT85 期）になると集落遺構が増加し始め、井戸の掘削も始まったようである。ⅢＢ期（TK43 期）には、再び井戸の構築数が他の遺跡に比べて明らかに多い状態になり、それは奈良時代まで続く。比恵・那珂における古墳時代後期から飛鳥時代（MT15 期～Ⅵ期）までの井戸をまとめた（表５）。最近５年間の調査報告事例の遺漏がある可能性があるが、確認したものは 32 例である。ⅢＢ期に増加し（３基）、Ⅳ期前半が多く（12 基）、Ⅳ期後半は４基、Ⅴ基は３期、Ⅵ期は古相が２基、新相が１基である（「ⅢＡ期～ⅢＢ期」はⅢＡ期に、「ⅢＢ期～Ⅳ期古相」はⅢＢ期に、「Ⅳ－２～３期」はⅣ期古相に、「Ⅳ期新相～Ⅴ期」はⅣ期新相に、「Ⅴ期～Ⅵ期古相」はⅤ期に、それぞれ掘削時期を推定している）。井戸数からは、Ⅳ期古相の比恵・那珂の隆盛がうかがえ、同じ頃に那珂 156 次にもあるような一辺２ｍ代の小型竪穴建物が増加し、何らかの人口集中があったことがうかがえる。この点は、**「那津官家」「筑紫大宰」**などの国家的施設・機関の設置に伴い、非在地的な人々が多く集まっただろうという推定の裏付けとなる。また井戸に**初期瓦**や**硯**が廃棄されている例がいくつかあり、そうした例は比較的大きな井戸か、**井戸側が存在した疑い**がある掘方形態の井戸であることが多い。井戸枠（井戸側）が



１．大阪府蔀屋北遺跡井戸Ｃ2476（横板組み③＋刳り貫き材③）
２．大阪府讃良郡条里遺跡２区井戸13（刳り貫き財③／横板組み①）
３．大阪府はさみ山遺跡142井戸（横板組み／刳り貫き材③）
４．大阪府讃良郡条里遺跡244井戸（横板組み③）（１～４は鹿野塁2013）
５．奈良県藤原宮SE157（横板組み（隅柱））（杉山・岡田・前田2013）
６．福岡市比恵遺跡群99次SE196（市報告第955集）（古墳後期ま～飛鳥初頭）

Fig. 23　那珂156次SE006
関連井戸集成図

ある井戸については、比恵・那珂で多く検出される弥生時代から古墳時代前期の井戸の大半が素掘り井戸であるため、土層の観察をあまりせずに（調査時の時間的余裕の問題もあるが）半裁せずに一気に掘削してしまう場合が多いので、それと判断された確実なものは少ない。掘り方の大きな井戸や段掘り構造の井戸については、井戸側痕跡がないか精査していく必要があろう（柱穴での柱痕や柱抜き跡の検出観察と同じである）。段掘りや井戸底部に円形凹みがある、あるいは方形井戸枠が入るような底面、底面四隅に杭打ちがあるなどの井戸は、井戸枠・井戸側が存在したことが疑われる。実はこれらは弥生時代中期～古墳時代前期の井戸にも少ないが存在する。今後の調査においては、そうした可能性も念頭に入れた調査における精査、平面および土層断面の観察が必要であろう。たとえば、比恵 99 次 SE195（Fig.23）などは掘方底面の状況と遺物の出土状況（井戸枠・井戸側落込み上に遺物が廃棄される）からそうした事例の可能性がある。比恵・那珂における古墳時代後期から飛鳥時代の井戸は、その集中性だけが問題ではなく、個々の構造も問題である。今回の那珂 156 次調査のような井戸は、その構造の稀少性からかなりの上位層に関わる可能性があるが、他にもそうした事例があるかもしれない。当該期の井戸の調査研究の進展は、「那津官家」や「筑紫大宰」の実態解明に寄与するであろう。

番号	遺跡名	遺構名	時期	最大長・径(m) ※長軸のみ計測も含む	検出面からの深さ(m)	井壁保護施設								井戸底	備考
						素掘り	木製・植物製						土製		
							刳り貫き	縦板組み	横板組み	転用材	その他	石製			
1	那珂13次	井戸53	Ⅵ期古相→Ⅵ期新相までに埋没か（当初Ⅳ－4期掘削の可能性もある）	3.8	3	素掘り									遺物の出土層位が不明確、Ⅳ期新相からの土器があるが、多くはⅥ期古相～新相、ただしⅣ－4期掘削後の掘り直しの可能性がある 初期瓦・百済系単弁軒丸瓦（白鳳期古代瓦）が出土
2	那珂21次	SE61	最下層はⅣ期新相（Ⅳ－3・4期）、下層に奈良時代初頭があり掘り直しか	4.0 （隅丸方形）	4		○ 径60cm丸い痕跡								初期瓦・古代瓦多数出土、獣脚硯、圏足円面硯が出土 長期間の利用か
3	那珂50次	SE02	下層～中層Ⅳ－2期、上層Ⅵ期以降	4.7	3.9	素掘り？ （段掘りまたは片側スロープ状の傾斜あり）									円筒埴輪が出土するが、東光寺剣塚の埴輪より新しい未知の古墳の埴輪か
4	那珂64次	SE003	Ⅴ期	2.0×1.1 （長楕円形）	2.1	素掘り									初期瓦多数出土
5	那珂73次	SE07	Ⅵ期新相	3.4	4	素掘り （段掘り）									土器一括廃棄、竹状模骨痕丸瓦あり
6	那珂74次	SE05 （05号遺構）	下層はⅣ－3期→上層奈良時代の廃棄土坑	2.4×2.1	1.8	素掘り？ （上部の一方にスロープ状施設）									最下層に板材（扉材）あるが井戸枠材の一部か？
7	那珂85次	SE08	最下層須恵器大甕はⅥ期古相、Ⅵ期遺物多、Ⅶ期廃絶	1.8	1.3	素掘り									初期瓦・古代瓦多数 下部掘り方や土層は井戸枠存在の可能性
8	那珂102次	SE13	ⅢB期～Ⅳ期初頭	1.7	1	素掘り？ （底面四隅に杭打ち込みあり、井戸枠？）								4本の杭を打ち込む	瓢箪の種が大量出土 四隅に杭が確認される。井戸側の固定用か？
9	那珂102次	SE43	Ⅱ期（MT15）	1.3	0.6	素掘り									瓢箪の種が大量出土
10	那珂102次	SE128	Ⅳ期古相掘削？→Ⅳ－3期に上層に一括廃棄	2	1.3	素掘り									
11	那珂102次	SE139	Ⅴ期～Ⅵ期？	1.5	0.5	素掘り									
12	那珂102次	SE154	Ⅳ期古相	0.8	0.8	素掘り									
13	那珂114次	SE-2011	Ⅳ－2期前後掘削？→土器廃棄はⅣ－4期まで	3.1×2.9 （さらに西側にスロープ状施設あり長軸4.3m）	2.8	素掘り （段掘り、上部の一方にスロープ状施設）									初期瓦片 掘方形状からは井戸枠・側が存在した可能性あり（底面長方形状）
14	那珂114次	SE-5005	Ⅳ－4期？	2.1	1.3	素掘り									
15	那珂117次	SX009	Ⅴ期	1.2×0.6 （長軸片側が段々になっている）	1.35	（段掘り）	？								「大きな柱を抜いたような痕跡」と考え掘り進めたので、刳り貫き井戸側の落込みがあった可能性が高い
16	**那珂156次**	**SE006**	**Ⅳ期初頭、Ⅳ期前葉に廃棄**	**3.2**	**3.1**		**痕跡**		**痕跡**					**砂利層（礫敷）**	**方形枠板＋円形刳り貫きの組合せが上下二段と推定、井戸側最下層に凝灰岩製石製品を廃棄（祭祀か）**
17	比恵9次	34号井戸	Ⅳ－2～3期	3.9	2.4	素掘り？ （段掘り）									木柄出土 遺物が段掘りで深くなる南西側からほとんど出土、井戸側痕跡の落込みが推定される 報告は「ⅢB期」とするがⅣ期である
18	比恵9次	35号井戸	Ⅳ－3期？	2	1.8	素掘り									1/4検出 「ⅢB期」とするがⅣ期
19	比恵45次	SE01	底面出土Ⅳ－1期→Ⅳ－2期までに廃棄	3.5	2.5	素掘り？ （底面径35cm円筒状ピット）	？							径35cmピット	底面出土土師器甕中より桃の種出土、底面ピットは刳り貫き井戸側などの痕跡の可能性あり Ⅳ－1～2期の須恵器・土師器大量廃棄
20	比恵50次	A区 SE-015	ⅢB期～Ⅳ－1期	1.5	1.3	素掘り								底面に5箇所の杭打ち	底面壁際に杭打ちがあり、何らかの井戸側があった可能性あり
21	比恵50次	C区SE130	Ⅳ-1～2期	2.36×1.7	1.46	素彫り？	？							中央凹みあり	掘り方形状（底面凹み）から井戸側があった可能性あり
22	比恵53次	SE21	古墳後期？	1.55	1.1	素掘り									出土遺物不明（須恵器坏？）
23	比恵55次	井戸2	Ⅳ－2～3期	2.9	2	素掘り？ （段掘り、三段）									掘り方形状からは井戸枠・側の存在が疑われる Ⅳ－2～3期の須恵器（出土層位不明）
24	比恵55次	井戸3	Ⅳ－1～3期	2	1.6	素掘り									古い須恵器はⅢB期に近いⅣ期初頭の坏H、平瓶や壺・甕類はやや下る（いずれも出土層位不明）
25	比恵57次	SE132	上層土器群はⅣ－3期か、最下層はⅣ期古相？	1	1.7	素掘り			？						底面に須恵器技法土師器小型甕出土、他は上層出土
26	比恵82次	SE005	ⅢA期新相～ⅢB期	1.2×0.7	0.7	素掘り									
27	比恵87次	SE08	Ⅳ期古相掘削？→Ⅳ－4期に上層廃棄？	1.95×1.5	1.8	素掘り （段掘り）									土器多量廃棄 木製品含む、下層に牛馬歯出土
28	比恵99次	SE195	ⅢB期～Ⅳ期初頭廃棄	2.8	2.2	素掘り？									最下部掘方は方形井戸枠の可能性
29	比恵141次（未報告）	仮1	Ⅳ期			井戸側 （刳り貫き？）痕跡	？								未報告
30	比恵142次（未報告）	仮2	Ⅳ期			素掘り									未報告
31	比恵143次（未報告）	仮3	Ⅳ期			素掘り									未報告
32	比恵144次（未報告）	仮4	Ⅳ期			素掘り									未報告

表5. 比恵・那珂遺跡群における古墳時代後期～飛鳥時代の井戸一覧

（埋蔵文化財研究会編2013『続・井戸再考』掲載の表を基に、修正して作成。全て報告書を再検討し、時期が異なるものは除き、一部加筆し、また遺構を追加した。特に時期は出土遺物をもとに全面的的に見直した。報告では「古墳後期」となっているものはⅣ期＝飛鳥時代前半期が多い。また「古代」に飛鳥時代のものがある。なお、最近の調査報告事例は遺漏があるかもしれない。）

＜引用文献＞
石木秀啓2017「西海道北部の土器生産」『徹底追究！大宰府と古代山城の誕生』九州国立博物館「大宰府学研究」事業・熊本県「古代山城に関する研究会」事業合同シンポジウム資料集
海野 聡・小田裕樹2013「都城の形成と井戸」『続・井戸再考』第62回埋蔵文化財研究集会発表要旨集・資料集、埋蔵文化財研究会
小田和利2014「磐瀬宮における諸問題」『九州歴史資料館研究論集』39
小田富士雄1964「九州の須恵器研究序説」『九州考古学』22
小田富士雄1977「豊前地方における須恵器」『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財研究会
鐘方正樹2003『井戸の考古学』ものが語る歴史シリーズ⑧、同成社
鐘方正樹2013「６～７世紀における井戸枠の構造と変化」『続・井戸再考』第62回埋蔵文化財研究集会発表要旨集・資料集
久住愛子・久住猛雄2008「九州Ⅰ（福岡県）―福岡県下における弥生時代から古墳時代前期の井戸について―」『井戸再考～弥生時代から古墳時代前期を対象として～』第57回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
久住猛雄1999a「出土須恵器の編年とＥ－２・3号境の築造・追葬の年代について」『羽根戸南古墳群』福岡市報告第661集
久住猛雄1999b「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学』第74号、九州考古学会
久住猛雄2008a「福岡平野　比恵・那珂遺跡群－列島における最古の「都市」－」『集落からよむ弥生社会』弥生時代の考古学8, 同成社
久住猛雄2008b「九州Ⅰ　付編　弥生時代中期中頃～終末期古相までの井戸一括基準資料」『井戸再考』
久住猛雄2009「比恵・那珂遺跡群－弥生時代後期の集落動態を中心として－」『弥生時代後期の社会変化』第58回埋蔵文化財研究集会資料集
久住猛雄2017「福岡県（糸島・早良・福岡平野）」『九州島の古式土師器』第19回九州前方後円墳研究会（長崎大会）発表要旨集・基本資料集
久世康博2001「井戸はどうして埋められたのか（石を入れる）」『考古学論集』第５集、考古学を学ぶ会
駒見和夫1992「井戸をめぐる祭祀―地域的事例の検討から―」『考古学雑誌』第77巻第４号、日本考古学会
齋部麻矢1999「北部九州の飛鳥・白鳳時代の瓦」『飛鳥・白鳳時代の瓦と土器―年代論―』帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会共催シンポジウム
佐藤 隆2003「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年」『大阪歴史博物館研究紀要』第２号
鹿野 塁2013「近畿地方の古墳時代から飛鳥時代の井戸―大阪府域を中心として―」『続・井戸再考』第62回埋蔵文化財研究集会発表要旨集・資料集
白井克也1998「博多出土高句麗土器と7世紀の北部九州」『考古学雑誌』第83巻第4号、日本考古学会
白井克也2004「筑紫出土の獣脚硯」『九州考古学』第79号、九州考古学会
菅波正人1994「那珂遺跡群出土の古瓦について」『那珂10』福岡市埋蔵文化財調査報告書第365集
菅波正人1996「那津の口の大型建物群について」『博多研究会誌』第4号
杉原敏之「太宰府政庁のⅠ期について」『九州歴史資料館研究論集』32
杉山拓己・岡田雅彦・前田俊雄2013「奈良県の様相」『続・井戸再考』第62回埋蔵文化財研究集会発表要旨集·資料集
高橋徹・小林昭彦1990「九州須恵器研究の課題」『古代文化』第42巻第４号、財団法人古代学協会
田崎博之1998「福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発」『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会
長 直信2012「豊前地域の土器様相と須恵器生産－７世紀を中心に－」『古文化談叢』第67集、九州古文化研究会
長 直信2014「九州における長舎の出現と展開―7世紀代を中心に―」『長舎と官衙の建物配置　報告編』第17回古代官衙・集落研究会報告書、奈良文化財研究所研究報告第14冊
長 直信2017「西海道の土器編年研究」『徹底追究！大宰府と古代山城の誕生』シンポジウム資料集
長 洋一1994「新城「太宰府」の成立」『日本の古代国家と城』新人物往来社
中島恒次郎1997「七世紀の食器－九州消費地－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東5　７世紀の土器－』古代の土器研究会
橋口達也1979「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』ＸＸＸⅠ中巻、福岡県教育委員会
比嘉えりか2008「初期瓦研究の現状と課題－筑前地域を中心に－」『七隈史学』第9号、七隈史学会
舟山良一（編）2008『牛頸窯跡群：総括報告書』大野城市文化財調査報告書, 第77集
宮本一夫2011「環境の変遷と遺跡からみた福岡の歴史」『新修福岡市史　特別編　自然と遺跡からみた福岡の歴史』
柳田康雄1986「高三潴式と西新町式土器」『弥生文化の研究』４、弥生土器Ⅱ、雄山閣
横田賢次郎1984「福岡県内の出土の硯について―分類と編年に関する一試案―」『九州歴史資料館研究論集』９
吉留秀敏2009「鴻臚館から大宰府への道―水城西門ルート福岡市内探索の中間報告―」『市史研究ふくおか』第４号
吉村靖徳2003「成立期の太宰府政庁に関する試論」『九州考古学』第78号
龍孝明・久住猛雄・菅波正人・山崎頼人2013「九州地方の古墳時代から飛鳥時代の井戸」『続・井戸再考』第62回埋蔵文化財研究集会発表要旨集・資料集

1．那珂 156 次調査Ⅰ区全景（南から）

2．Ⅰ区全景（南西から）

1．ＳＤ００１掘削状況（北西から）

2．ＳＤ００１掘削状況（南東から）

3．Ⅱ区全景（北西から）

1．那珂 156 次調査Ⅱ区全景（南から）

2．ＳＥ００６検出状況（ＳＤ００１-Ⅳ区）（北西から）

1．ＳＥ００６上層遺物状況（北東から）

2．ＳＥ００６井戸側落込み検出状況（北東から）

3．ＳＥ００６井戸側検出土層断面細部（北から）

4．ＳＥ００６井戸側検出土層検討状況（北西から）

1．SE006 下層半戴井戸側痕跡検出上面（北西から）

2．SE006 下層井戸側内枠掘削状況（南西から）

3．SE006 下層井戸側内枠掘削状況近景（北西から）

4．SE006 下層井戸側外枠掘削状況（西から）

5．SE006 下層井戸側外枠掘削状況（南西から）

6．SE006 最下層上部凝灰岩出土状況（南西から）

7．SE006 最下層上部凝灰岩出土状況近景（北西から）

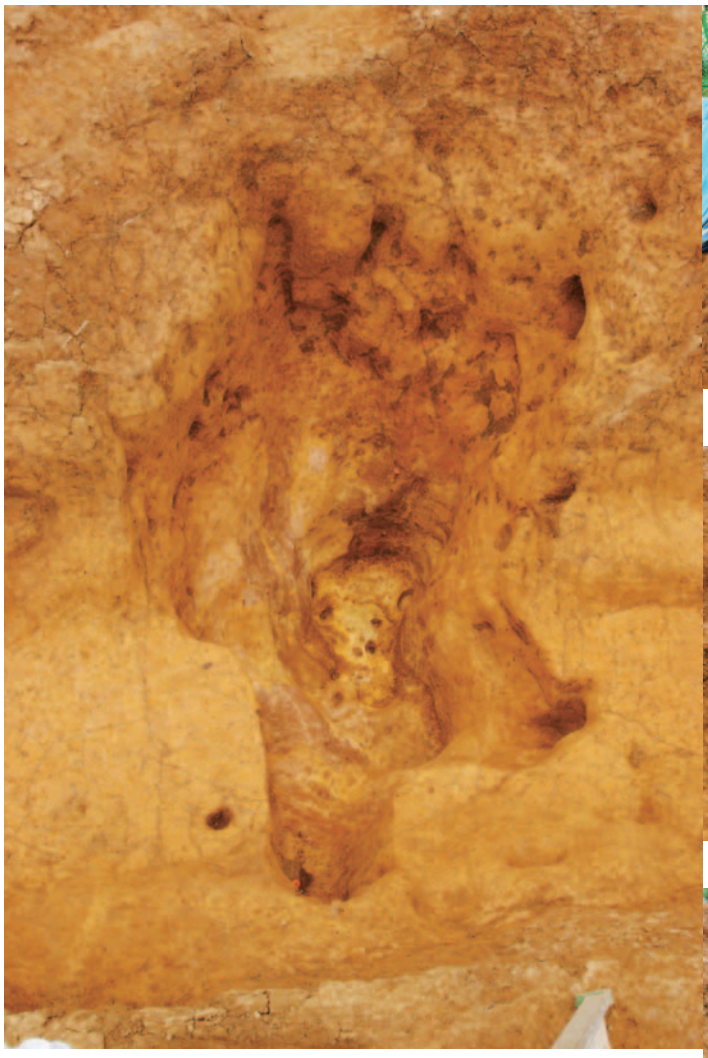
1．SE006 最下層砂利層上部検出状況（南西から）

2．SE006 完掘状況（南西から）

3．SE006 最下層砂利層上部検出状況(南西から)

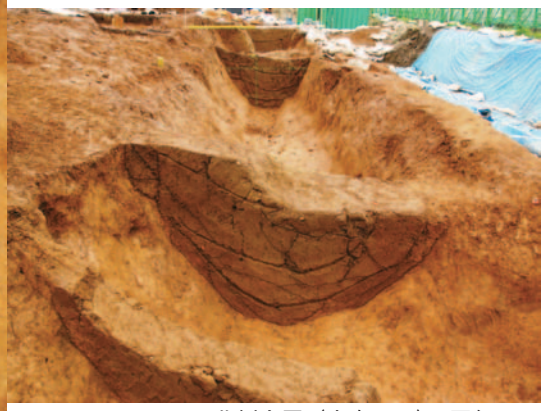
4．SE006 最下層砂利層上部検出状況近景(南から)

5．SE006 最下層砂利層半戴土層（北から）



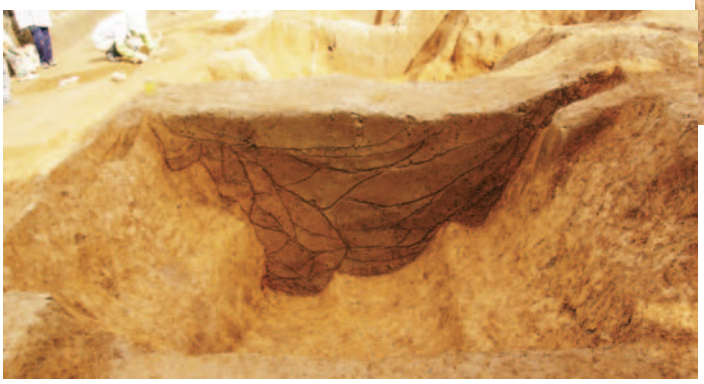
1．SE006 完掘状況（北東から）

2．SD001-Ⅰ区南側土層（北西から）

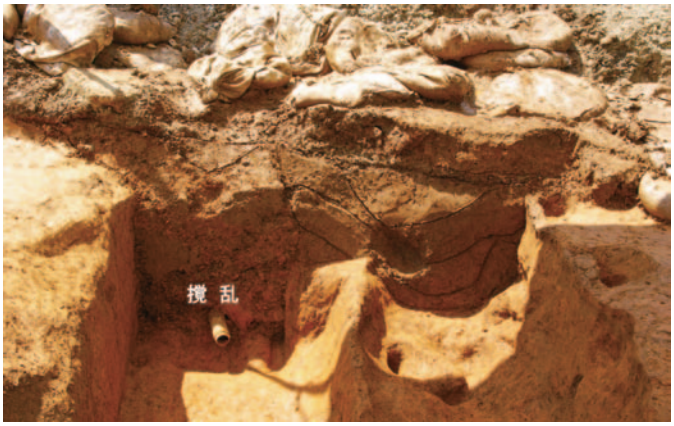


3．SD001-Ⅰ区北側土層（南東から）※図無し

4．SD001-Ⅱ区北側土層（南東から）

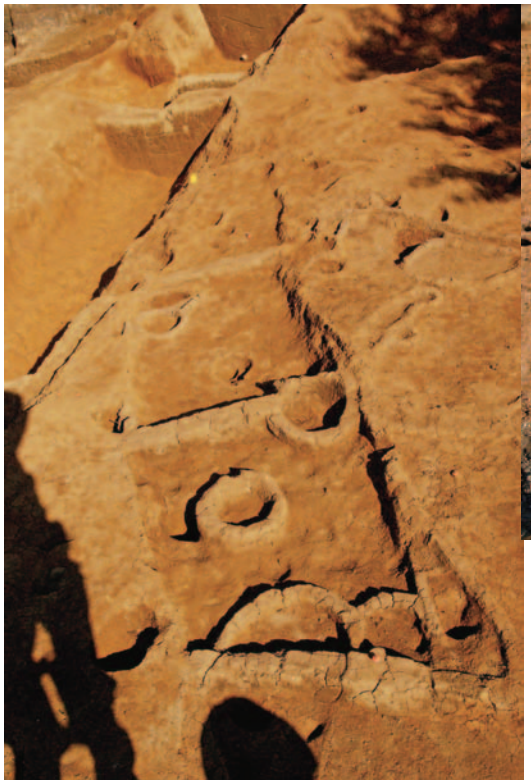


5．SD001-Ⅴ区南側土層（北西から）



6．Ⅱ区 SD001-Ⅷ区北側土層（南東から）

7．反転後Ⅱ区 SD001 延長上面
検出状況（南東から）

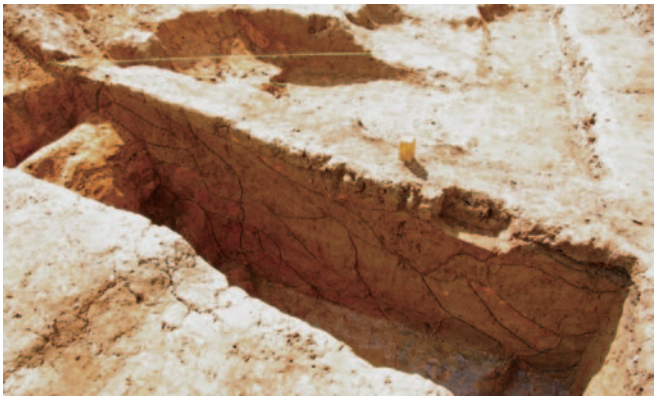


1．SD005 掘削状況（東から）

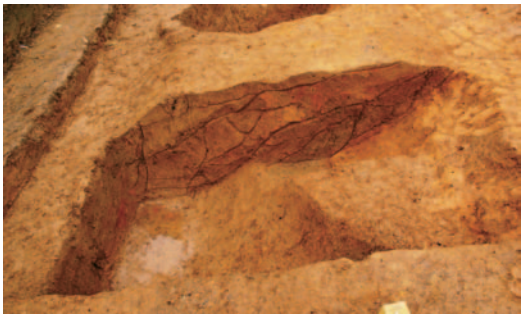
2．SC007,SX010,SD005 掘削状況（南西から）

3．SX003 風倒木痕？（北西から）

4．SX002-Ⅰ区南トレンチ１土層（北西から）



5．SX002-Ⅰ区北トレンチ２北側土層（南東から）



6．SX002-Ⅱ区北トレンチ４南土層(北西から)

7．SX002-Ⅲ区南トレンチ５南側土層（北西から）

8．SX002-Ⅳ区南トレンチ６北側土層（南東から）

1．Ⅰ区中央～北西調査状況（南西から）

2．調査区工事前現況写真（東から）

3．表土掘削終了状況（南東から）

4．Ⅰ区作業風景（北西から）

5．SE006 上層須恵器横瓶検出状況（北東から）

1．SE006 最下層掘り方須恵器出土状況（北から）

2．SE006 最下層砂利層半戴状況近景（北から）

1．SD001-Ⅰ・Ⅱ区間完掘状況（北西から）

2．Ⅱ区 SD001 延長掘削状況（南東から）

3．SD005 完掘状況（西から）

4．SC007 掘削状況（南西から）

5．SC007・009 周囲掘削状況（北東から）

1．SC007・008・009 周囲ベルト除去後掘削状況（南西から）

2．SD005、SC007・008・009 下部、SX081 北半完掘（南西から）

1．SX081 確認掘削状況（南西から）

2．SX081 確認掘削状況（北から）

3．SX002- トレンチ２掘削状況（北東から）

4．SX002- トレンチ５掘削状況
（北東から）

5．SX002- トレンチ６掘削状況
（北東から）

6．SX002-Ⅱ区南部上層鉢状鉄製品出土状況（北西から）

PL.14（遺物写真）

1．Fig.28-1（須恵器平瓶）

2．Fig.28-2（須恵器平瓶）

7．Fig.20-8（円筒埴輪片）

8．Fig.18-9（須恵器坏蓋）

3．Fig.18-7（須恵器坏身）

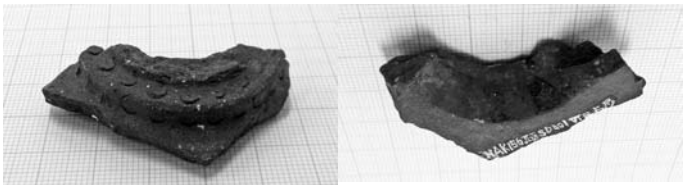
4．Fig.18-10（須恵器坏身）

5．Fig.18-12（須恵器坏身）

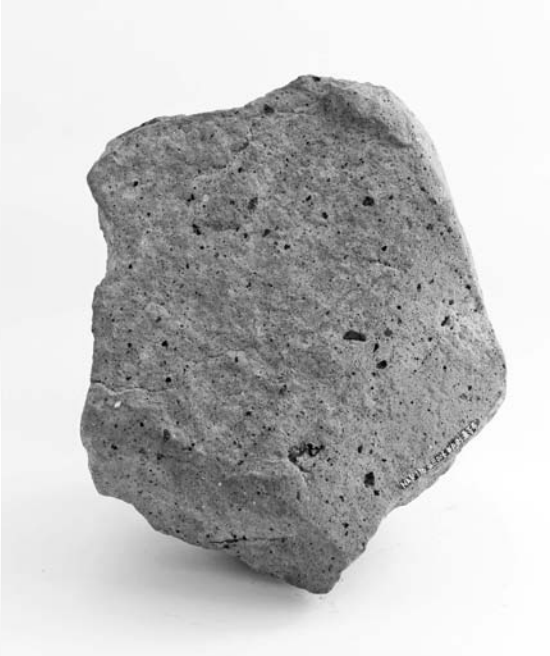
4．Fig.18-13（須恵器坏身）

9．Fig.21-18
（八女産？須恵器坏身）

10．Fig.21-7（円筒埴輪片）



11．Fig.28-10（新羅土器？壺）



12．Fig.22（凝灰岩製石製品？残欠）

報告書妙録

ふりがな	なか76－なかいせきぐんだい156じちょうさのほうこく－
書　　名	那珂76
副　書　名	－那珂遺跡群第156次調査の報告－
巻　　次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1312
編著者名	久住猛雄
編集機関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目8-1　電話番号　092-711-4667
発行年月日	西暦2017年3月27日

遺跡名ふりがな	なかいせきぐんだい156じちょうさ
遺跡名	那珂遺跡群第156次調査
所在地ふりがな	ふくおかしはかたくたけした3ちょうめ1ばんちない
遺跡所在地	福岡市博多区竹下三丁目1番地内
市町村コード	40132
遺跡番号	0085
北緯	33度34分23秒　（世界測地系）
東経	130度26分5秒　（世界測地系）
調査期間	2015.5.1～2015.7.31
調査面積（㎡）	353㎡
調査原因	下水道施設建設工事

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、戦国時代、江戸時代	溝状遺構（飛鳥時代、中世前期、戦国時代～江戸時代）、井戸（飛鳥時代前期）、竪穴住居（弥生時代？、飛鳥時代）、落ち込み（谷部造成）遺構（江戸時代以降）	弥生土器、古式土師器、古墳時代後期・飛鳥時代・奈良時代の土師器・須恵器、中世（平安時代後期以降）の土師器・土師質土器・輸入陶磁器・国産陶器、近世（江戸時代）の土師質土器・国産陶磁器、古墳時代後期の円筒埴輪片、古代（飛鳥～奈良時代）の瓦片、古墳時代後期？の凝灰岩製石製品残欠、中世の滑石製石鍋片など 出土量はコンテナケース計10箱	確実な弥生時代遺構はないが、円形竪穴住居があった可能性がある。弥生土器片が調査区から多く出土した。古式土師器（古墳時代前期の土器）も若干の出土があり、本来弥生時代～古墳時代前期の遺構があった可能性が高い。 飛鳥時代の竪穴住居、溝状遺構、井戸を検出したほか、遺構に伴わない飛鳥～奈良時代初期の土器が出土した。飛鳥時代の井戸は、土層観察から方形の井戸枠板、内側に刳貫の井戸側が多重に組合わされた構造と推定された。さらに最下層に浄化用の砂利層があるもので、このような入念な作りは同時期の畿内の飛鳥や難波地域などに限定される。「那津官家」や「筑紫大宰」に関わる、畿内から出向した、特別な階層の＜官人層＞の居住区を想定した。また井戸最下層に廃棄された凝灰岩製石製品は、近くにある東光寺剣塚古墳に樹立された石製樹物（楯、靫など）の残欠の可能性がある。 戦国時代末期の堀は、調査区東縁の落ち込みに沿って掘削され、周辺調査からも南北に長く延びると考えられる。西側の一段高い範囲に城館が想定される。 調査区東側の落ち込みは、ちょうど現在に続く道路に一致しているが、おそらく近世に自然地形の谷部をさらに造成したものと推定できた。近世以降、切り通し状の地形の西縁（調査区の東縁）に、何度も側溝ないし水路を掘削している。水路兼道路側溝としての機能が考えられる。

那　珂　76

―那珂遺跡群第156次調査の報告―
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1312集

2017年3月27日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８－１

印刷　株式会社大里印刷センター
福岡市東区二又瀬新町12-29